

本居豐穎  
木村正辭  
小杉楹邨

井上賴圀  
落合直文

監修

# 國文大觀

物語部參  
雜上

板倉屋書房



本居豐穎  
木村正辭  
小杉楹邨

井上賴圀  
落合直文

監修

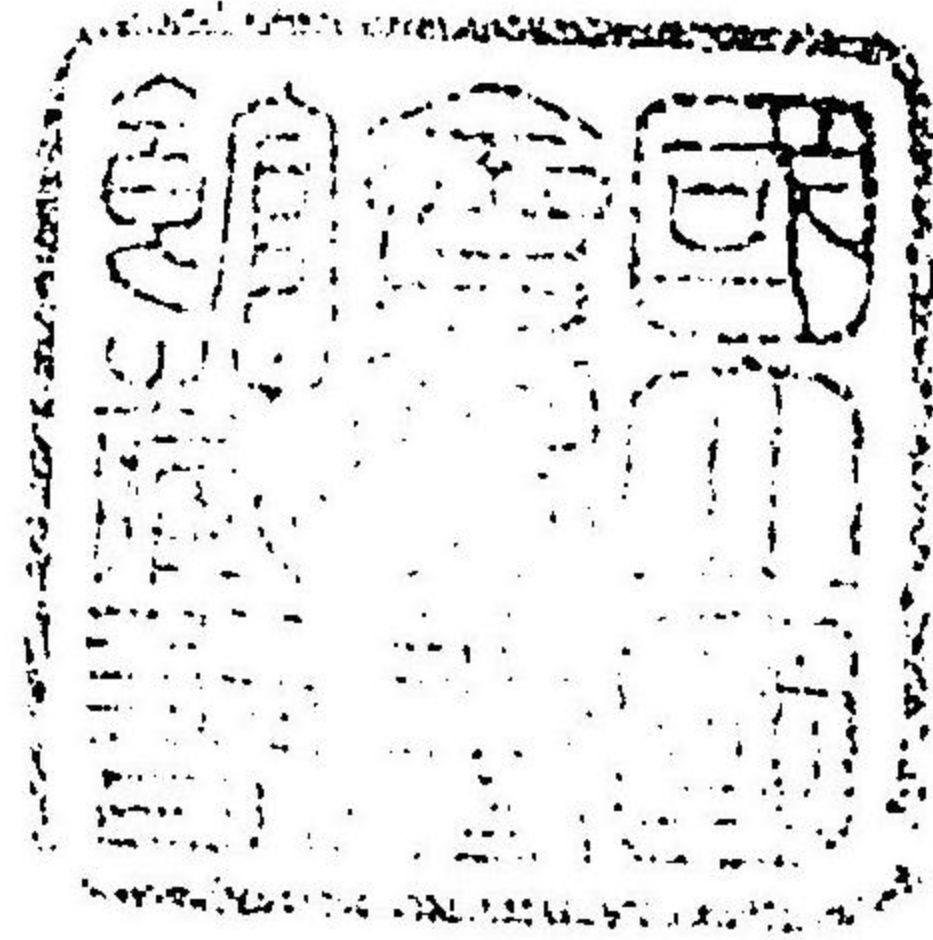
# 國文大觀

3

物語部參  
雜上

板倉屋書房





224488

國文大觀物語部雜上目次

竹取物語	一頁
伊勢物語	二九頁
堤中納言物語	七五頁
濱松中納言物語	三三頁
落窪物語	二七頁
とりかへばや物語	四一頁

目次



### 竹取物語

今はむかし、竹取のおきなといふものありけり。野山にまじりて竹をとりつゝ、よろづの事はつかひけり。名をば讃岐のみやつこまるとなむいひける。その竹の中に、本光る竹一すぢありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しくして居たり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて手にうち入れて家に持ちてきぬ。めのおうなにあづけて養はず。美しきと限なし。いと幼ければこに入れて養ふ。竹取の翁竹をとるとこの子を見つけて後に竹をとるに、節をへだて、よ毎にこがねある竹を見つゝること重りぬ。かくて翁やうやう豊になりゆく。このちを養ふほどに、すくすくとおほきになりまざる。み月ばかりになる程によきはどなる人になりぬれば、髪あげなど沙汰して、髪上げさせ装着す。ちやうの内よりも出さずいつきかしづき養ふほどに、このちのかたちけうらなること世になく、やの内は暗きところなく光満ちたり。翁心ちあしく苦しき時も、この子を見れば苦しきことも止みぬ。腹だゝしきとも慰みけり。翁竹をとると久しうなりぬ。勢まうの者になりけり。この子いとおほきになりぬれば、名をば三室戸の齋部の秋田を呼びてつけさす。秋田なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日うちわけ遊ぶ。よろづの遊をぞしける。男をうな嫌はず呼び

竹取物語



集へていと長く遊ぶ。世界のをのこわてなるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな見てしがなと、音に聞きめで、惑ふ。そのわたりの垣にも家の外にもをる人だにたは易く見るまじきものを、よるは安きいもねず、闇の夜に出で、も穴をくじりこ、彼所より覗きかいまみ惑ひわへり。さる時よりなむよばひとはいひける。人の物ともせぬところに惑ひありけども、何のしるしあるべくも見えす。家の人どもに物をだに言はむとていひかくれども、事ともせず。あたりを離れぬきんだち夜を明し日を暮す人多かり。おろかある人はようなきありきはよしなかりけりとして、來ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名一人は石作のみこ、一人は車持のみこ、一人は右大臣阿倍のみうし、一人は大納言大伴のみゆき、一人は中納言石上の麻呂、たゞこの人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、かぐや姫を見まほしうて、物もくはず思ひつゝ、かの家に行きてたゞすみありきけれども、かひあるべくもあらず。ふみを書きてやれども返りごとくもせず。わびうたきと書きてやれどもかへしもせず。かひなしとおもへどもまもつべきはすのふりこほり、みなつきの照りはたゞくにもさはらず來けり。この人々、或時は竹取を呼びいで、「娘を我にたべ」と伏し拜み、手をすりのたまへど、「己がなざぬ子なれば心にも従はずなむある」といひて、月日をおくる。かゝればこの人々、家に歸りて物を思ひ、いのりをし、ぐわんをたて、思ひやめむとすれども止むべくもあらず。さりとて遂にをとこあはせざらむやはとおもひて、頼みをか

けたり。あながちに志を見えありく。これを見つけて、翁かぐや姫にいふやう、「我が子の佛へん化の人と申しながら、こゝらおほきさまで養ひ奉る志おろかならず。翁の申さむこと聞き給ひてむや」といへば、かぐや姫、「何事をかのたまはむ事を承らざらむ。へん化の者にてはべりけむ身とも知らず。親とこそ思ひ奉れ」といへば、翁「嬉しくもの給ふものかな」といふ。「翁年なくそぢに餘りぬ、今日とも明日とも知らず。この世の人は、男はをうなにあふ事をす、女は男に合ふ事をす。その後なむかども廣くなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ」。かぐや姫のいはく「なでふさるとかまはべらむ」といへば「へん化の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいまずかりなむかし。この人々の年月を経て、かうのみみましつゝの給ふことを思ひ定めて、一人一人にあひ奉り給ひぬ」といへば、かぐや姫のいはく「よくもあらぬかたちを、深き心も知らであだ心つきまば、のち悔しきともあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひ難しとなむ思ふ」といふ。翁のいはく「思ひの如くものたまふかき。そもそもいかなる志あらむ人にかあはむと思す。かばかり志おろかならぬ人々にこそわめれ」。かぐや姫のいはく「何ばかりの深きを見むといはむ。いさゝかのことなり。人の志ひとしかあり。いかでか中におとりまさりは知らむ。五人の中にゆかしき物見せ給へらむに、御志まさりたりとて仕らまづらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ」といふ。「よきことなり」とうけつ。日暮るゝほど、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどす



るに、翁出で、いはく「忝くもまたなげなる所に、年月を経て物し給ふときはまりたるかしこまり」と申す。翁の命けふあすとも知らぬを、かくのたまふ君達にもよく思ひ定めて仕らまつれと申せば、深き御心をしらすではとなむ申す。さ申すもとわりなり。いづれ劣りまさりおはしまさねば、ゆかしきもの見せ給へらむに、御志のほどは見ゆべし、仕らまつらむことは、それになむ定むべきといふ。これ善きことなり。人の恨もあるまじ」といへば、五人の人々も「よきことなり」といへば翁入りていふ。かぐや姫「石作のみこには、天竺に佛の御石の鉢といふものあり、其をとりて給へ」といふ。「車持のみこには、東の海に蓬萊といふ山あり、それに老るがねを根とし、こがねを莖とし、白玉を質としてたてる木あり、それ一枝折りて給はらむ」といふ。「今一人にはもろこしにある火鼠の裘を給へ。大伴の大納言には龍の首に五色に光る玉あり、それをとりて給へ。石上の中納言には、つばくらめのもたる子安貝一つとりて給へ」といふ。翁「難き事どもにこそあなれ。この國にある物にもあらず。かく難き事をばいかに申さむ」といふ。かぐや姫「何か難からむ」といへば、翁「とまれかくまれ申さむ」とて出で、「かくなむ。開ゆるやうに見せ給へ」といへば、みこだちかんだちめ聞きて「おいらかにあたりよりだになわりきそとやはの給はぬ」といひてうんじて皆歸りぬ。猶この女見では世にあるまじき心ちのしければ、天竺にあるものももてこぬものはと思ひ廻らして石作のみこは心のしたぐみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千萬里の程行きたりともしいかでか取るべきと思ひて、かぐや姫の許には、今日なむ天竺へ石の鉢とりにまかると聞

かせて、みとせばかり經て、大和國十市郡にある山寺に、びんづるの前なる鉢のひた黒に煤つきたるをとりて、錦の袋に入れて作り花のえだにつけて、かぐや姫の家にもて来て見せければ、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

「海山のみちにこゝろをつくしはてみいしの鉢のなみだなかれさ」。かぐや姫、光やあると見るに、螢ばかりのひかりだになし。

「おく露のひかりをだにもやどさまし小倉山にてなにもとめけむ」とてかへしいだすを、鉢をかどに棄て、この歌のかへしをす。

「まら山にあへば光のうするかとはちを棄て、もたのまる、かな」とよみて入れたり。かぐや姫返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ。かれ鉢を棄て、又いひけるよりぞおもなきことをばはちをすつとはいひける。『車持のみこは心たばかりある人にて、おほやけには、筑紫の國に湯あみに罷りむとて、暇申して、かぐや姫の家には、玉の枝とりになむまかるといはせて下り給ふに、仕らまつるべき人々、皆難波までおくりしけり。皇子いと忍びてとのたまはせて、人も數多ぬておはしませず。近うつかうつまる限りして出で給ひぬ。みおくりの人々、見まつり送りて歸りぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三日許ありて酒ぎ歸り給ひぬ。かねて事皆仰せたりければ、その時一のたくみなりける内匠六人を召しとりて、たはやすく人よりくまじき家をつくりて、構へを三重にしこめて、たくみ等を入れ給ひて、皇子も同じ所にこもり給ひて、まらせ給ひつるかぎり十六そをかみに



くどをわけて、玉の枝をつくり給ふ。かぐや姫のたまふやうに、違はずつくり出でつ。いと畏くたばかりて、難波にみそかにも出でぬ。船に乗りて歸り來にけりと殿に告げやりて、いとたく苦しげなるさまして居給へり。迎へに人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物おほひてもちて参る。いつか聞きけむ、「車持のみこは優曇華の花持ちてのぼり給へり」とのしりけり。これをかぐや姫聞きて、我はこの皇子にまけぬべしと胸つぶれて思ひけり。かゝるほどに門を叩きて、車持のみこおはしたりと告ぐ。旅の御姿ながらおはしましたりといへば、逢ひ奉る。みこのたまはく「命を捨て、かの玉の枝持ちてきたりとて、かぐや姫に見せ奉り給へ」といへば、翁もちて入りたり。この玉の枝に文をぞつけたりける。

「いたづらに身はなしつとも玉の枝を手をらでさらしに歸らざらまし」。これをもわはれと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく「このみこに申し給ひし蓬萊の玉の枝を一つの所もあやしき處なく、あやまたずもおはしませり。何をもちてかとかく申すべきにあらず。旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずして坐しましたり。はやこのみこにあひつかうまつり給へ」といふに、物もいはすつらづらをつきて、いみじうなげかしげに思ひたり。このみこ「今さら何かといふべからず」といふまゝに、椽にはひのぼり給ひぬ。翁ことわりにおもふ。「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでかいなみまうさむ。人さまもよき人におはす」などいひ居たり。かぐや姫のいふやう「親ののたまふことを、ひたぶるにいなみ申さむこと」といとはしさに、得難き物をゆかしたむいひしを、かくあさましくもてくることねたく思

ひ神。翁は聞の内しつらひなとす。翁みこに申すやう「いかなる所にかこの木は候ひけむ、怪しくうるはしくめでたきものにも」と申す。みこ答へての給はく「ささをとしのささざらざ十日ごろに、難波より船に乗りて海中にいで、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせむと思ひしかば、たゞ空しき風に任せてありく。命死なばいかはせむ、生きてあらむ限りはかくありきて、蓬萊といふらむ山に逢ふやと、浪にたゞよひ漕ぎありきて、我が國の内を離れてありきめぐりに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時は風につけて知らぬ國にふき寄せられて、鬼のやうなるもので來て殺さむとさしき。或時には來し方ゆく末も知らず、海にまされむとさしき。或時にはかて盡きて草の根をくひ物としき。或時にはいはむ方なくむくつげなるもの來て、食ひかゝらむとしき。或時には海の貝をとりて命をつぐ。旅の空に助くべき人もなき所に、いろいゝの病をして、ゆくへすらも覺えず、船の行くに任せて、海に漂ひて、いはかといふ辰の時ばかりに、海の中に遙に山見ゆ。舟のうちをなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大きにてあり。その山のさま高くうるはし。これや我が求むる山ならむと思へど、さすがにおそろしく覺えて山のめぐりをさしめぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人のよそひしたる女、山の中よりいで來て、しろがねのかなまりをもて水を汲みありく。これを見て船よりおりて、この山の名を何とか申すと問ふに、女答へて曰く、これは蓬萊の山なりと答ふ。是を聞くに嬉しきと限りなし。この女に、かくのたまふは誰ぞと問ふ。我が名ははるかむるりといひて、ふと山の中に入りぬ。そ



の山を見るに、更に登るべきやうなし。その山のそばつらめぐれば、世の中になき花の木どもたてり。こがねなるがね瑠璃色の水流れいでたり。それにはいろいろの玉の橋わたせり。そのあたりに照り輝く木どもたてり。その中にこのとりて持てまうできたりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばとて、この花を折りてまうできたるなり。山は限りなくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて追風ふきて、四百餘日になむまうで來にし。大願の力にや、難波より昨日なむ都にまうで來つる。さらに潮にぬれたる衣をだに脱ぎかへなでなむ、たちまうで來つる」とのたまへば、翁聞きて、うち歎きてよめる。

「吳竹のよゝのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し」。これを皇子聞きて「このらの日頃思ひわび侍りつる心は、今日なむおちぬる」とのたまひて、かへし、

「わが袂けふ乾ければわびしさのちぐさのかすもわすられぬべし」とのたまふ。かゝるほどに、男ども六人連れて庭にいできたり、一人の男ふみばさみに文をはさみてまうす、「つくも所のつかさのたくみあやべの内鷹まうさく、玉の木を作りて仕うまつりしこと、心を碎きて、千餘日に力を盡したること少からず。しかるに祿いまだ賜はらず。これを賜はりて分ちて、けこに賜はせむ」といひてさへげたり。竹取の翁「このたくみ等が申すことは何事ぞ」とかたぶきをり。みこは我にもあらぬけしきにて、肝消えぬべき心ちして居給へり。これをかぐや姫聞きて「この奉る文をとれ」といひて見れば、文に申しけるやう「みこの君千餘日賤し

きたくみ等と諸共に同じ所に隠れ居たまひて、かしこき玉の枝を作らせ給ひて、つかさも賜はむと仰せ賜ひき。これをこの頃案ずるに、御つかひとおはしますべきかぐや姫のえうし給ふべきなりけりと承りて、この宮より賜はらむとまうして給はるべきなり」といふを聞き、かぐや姫、くるまに思ひわびつる心ちを榮えて、翁を呼びとりていふやう「誠に蓬萊の木かところ思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや疾くかへし給へ」といへば、翁こたふ「さだかにつくらせたるものと聞きつれば、かへさむこといと易し」とうなづきをり。かぐや姫の心ゆきはて、ありつる歌のかへし、

「まことかと聞きて見つればことの葉を飾れる玉の枝にぞありける」といひて、玉の枝もかへしつ。竹取の翁さばかりかたらひつるが、さすがに覺えて眠りをり。皇子はたつもはした居るもはしたにて居給へり。日の暮れぬればすべり出で給ひぬ。かのうれへせしたくみ等をば、かぐや姫呼びすゑて、嬉しき人どもなりといひて、祿いと多くとらせ給ふ。たくみ等いみじく喜びて「思ひつるやうにもあるかな」といひてかへる道にて、車持のみこ血の流るゝまでちやうせさせ給ふ。祿得しかひもなく皆とり捨てさせ給ひてければ逃げうせにけり。かくてこのみこ、「一生の恥これに過ぐるはあらじ。女をえすなるのみにあらず、天の下の人の見思はむ事の耻かしき事」とのたまひてたゞ一所深き山へ入り給ひぬ。みやつかささぶらふ人々、皆手を分ちて求め奉れども、みまかりもやしたまひけむ、得見つけ奉らざるなりぬ。みこの御供に隠し給はむとて、年頃見え給はざりけるなり。是をなむたまさかなるとはいひ始め



ける。』右大臣阿倍のみうしは、たから豊かに家廣き人にぞ坐しける。その年わたりけるもろこし船の王卿といふもの、許に、文を書きて「火鼠のかはごろもといふなるもの買ひておこせよ」とて、仕うまつる人の中に心たしかなるを選びて小野の房守といふ人をつけて遣はす。もていたりて、かの浦にをる王卿にこがねをとらす。王卿文をひろげて見て返事かく、「火鼠のかはごろも我が國になき物なり。おとには聞けどもいまだ見ぬものなり。世にある物ならば、この國にももてまうで來なまし。いと難きあきなひなり。まかれどももし天竺にたまさかにもて渡りなば、もし長者のあたりにとぶらひ求めむに、なきものならば、使に添へてこがね返し奉らむ」といへり。かのもろこし船來けり。小野の房守まうで來てまうのぼるといふとを聞きて、あゆみとうする馬をもちて走らせ迎へさせ給ふ。時に馬に乗りて、筑紫よりたゞ七日に上りまうできたり。文を見るには「火鼠のかはごろもからうじて、人を出して求めまつる。今の世にも昔の世にもこの皮はたは易くなきものなりけり。むかしかしこ天竺のひじりこの國にもて渡りて侍りける、西の山寺にありと聞き及びて、おほやけに申して、からうじて買ひとりて奉る。價の金少しと、國司使にまうし、かば、王卿が物加へて買ひたり。今金五十兩たまはるべし。船の歸らむに附けてたび送れ。もし金賜はぬものならば、かはごろもの質かへしたべ」といへることを見て「何おほす。今金少しのことにこそあなれ。必ずおくるべき物にこそあなれ。嬉しくしておこせたるかな」とてもろこしの方に向ひて伏し拜み給ふ。このかはごろも入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃をいろ

へて作れり。かはごろもを見ればこんじやうの色なり。毛の末には金の光輝きたり。げに寶と見え、うるはしきこと比ぶべきものなし。火に焼けぬことよりも、けうらなることならびなし。「うべかぐや姫のこのもしがり給ふにこそありけれ」との給ひて、あなかしこと、箱に入れ給ひて、物の枝につけて。御身のけさういといたくして、やがてとまりなむものぞとおぼして、歌よみ加へて持ちていましてたり。その歌は、

「かぎりなきおもひに焼けぬかはごろも袂かわきて今日こそはきめ」といへり。家の門にもて至りて立てり。竹取いで來てとり入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫かの裘を見ていはく「うるはしき皮なめり。わきてまことの皮ならむとも知らず」。竹取答へていはく「とまれかくまれまづしやうじ入れ奉らむ。世の中に見えぬかはごろものさまなれば、是をまことと思ひ給ひね。人ないたくわびさせ奉らせ給ひそ」といひて、呼びすゑたてまつれり。かく呼びすゑて、この度は必ずわはむと、おうなの心にも思ひをり。この翁は、かぐや姫のやもめなるを歎かしければ、よき人にあはせむと思ひはかれども、せちに否といふことなれば、えしひぬはことわりなり。かぐや姫翁にいはく「このかはごろもは火に焼かむに、焼けずばこそまことならむと思ひて、人のいふことにもまじめ。世になきものなれば、それをまこと、疑ひなく思はむとの給へ。なほこれを焼きて見む」といふ。翁「それさもいはれたり」といひておとゞに「かくなむ申す」といふ。おとゞ答へていはく「この皮は唐土にもなかりけるをからうじて求め尋ね得たるなり。何の疑かあらむ。さは申すともはや焼きて見給へ」といへば、火



の中うちちくべて焼かせ給ふにめらめらと焼けぬ。「さればこそ。こともの、皮なりけり」といふ。おとゞこれを見給ひて御顔は草の葉の色して居給へり。かぐや姫はわなうれしと喜びて居たり。かよみ給へる歌のかへし、箱に入れてかへす。

「なごりなくもゆと知りせばかは衣おもひの外におきて見ましを」とぞわりける。されば歸りいましにけり。世の人々「安倍のおとゞは火鼠のかはごろもをもていましてかぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」など問ふ。或人のいはく「かはごろもは火にくべて焼きたりしかば、めらめらと焼けにしかば、かぐや姫逢ひ給はず」といひければ、これを聞きてぞ、とげなきものをばあへなしとはいひける。』大伴のみゆきの大納言は、我が家にありとある人を召し集めての給はく「龍の首に、五色の光ある玉あるなり。それをとりて奉りたらむ人には、願はむことをかなへむ」とのたまふ。をのことも仰せの事を承りて申さく「仰の事はいとも尊し。たゞし此の玉たはやすくえとらじを、況や龍の首の玉はいかゞとらむ」と申しわへり。大納言のたまふ「君の使といはむものは、命を捨て、も己が君の仰せ事をばかなへむとこそ思ふべけれ。この國になき天竺唐土の物にもあらず。この國の海山より龍はおりのぼるものなり。いかに思ひてか汝等難き物と申すべき」。をのことも申すやう「さらばいかゞはせむ、難きものなりとも、仰事に従ひてもとめにまからむ」と申す。大納言見笑ひて「汝等君の使と名を流しつ。君の仰せ事をばいかゞは背くべき」との給ひて、龍の首の玉とりにとて出したて給ふ。この人々の道のかてくひものに、殿の内の絹綿錢などあるかぎりとり出て、そへて

遣はす。「此の人々ども歸るまでいもひをして我は居らむ。この玉とり得では家に歸りくな」との給はせけり。おのおの仰承りて罷りいでぬ。龍の首の玉とり得ずば歸りくなとのたまへば、いづちもいづちも足のむきたらむかたへいなむとす。かゝるすきごとをし給ふことゝ、しりあへり。賜はせたる物はおの分けつゝとり、或は己が家にこもりむ或はおのがゆかまほしき所へいぬ。「親君と申すともかくつきなきことを仰せ給ふこと」とことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり。「かぐや姫するむには例のやうには見にくし」とのたまひて麗しき屋をつくり給ひて、漆を塗り蒔繪をし、いろへしたまひて、屋の上には糸を染めていろいろに葺かせて、内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に繪を書きて、まごとはりたり。もとのめどもは皆追ひ拂ひて、かぐや姫を必わはむと設けして獨明し暮したまふ。遣し、人は夜晝待ち給ふに、年越ゆるまでも音もせず、心もとながりて、いと忍びてたゞ舍人二人めしつぎとしてやつれ給ひて、難波におはしまして問ひ給ふことは「大伴の大納言の人や、船に乗りて龍殺して、そが首の玉とれるとや聞く」と問はするに、船人答へていはく、怪しきことかなと笑ひて「さるわざする船もなし」と答ふるに、おぢなきことする船人にもあるかな、え知らでかくいふとおぼして「我が弓の力は、龍わらばふと射殺して首の玉はとりてむ。遅く来るやつばらを待たじ」とのたまひて、船に乗りて、海ごとによりき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎいで給ひぬ。いかゞしけむ、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてわろく。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべくふさま



はして、浪は船にうちかけつゝ、まさに入れ、神は落ちかゝるやうにひらめきかゝるに、大納言は感ひて「まだかゝるわびしきめは見ず。いかならむとするぞ」とのたまふ。かちとり答へてまうす「こゝら船に乗りてまかりわりくに、まだかくわびしきめを見ず、御船海の底に入らずば神落ちかゝりぬべし。もしさいはひに神の助あらば、南海にふかれおはしぬべし。うたてあるぬしのみ許につかへまつりて、すゝろなる死にをすべかめる」とて揖取なく。大納言これ聞きてのたまはく「船に乗りては揖取の申すことをこそ高き山ともたのめ。などかくたのもしげなきことを申すぞ」とあをへどをつきてのたまふ。揖取答へてまうす「神ならぬばなにわざをか仕う奉らむ。風吹き浪はげしけれども、神さへいたいに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求め給ひさふらへばかくあなり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り給へ」といへば、よきことなりとて「揖取の御神さこしめせ。おぢなく心幼く龍を殺さむと思ひけり。今より後は毛一筋をだに動かし奉らじ」とよごとをはなちて、たちぬなくなく呼び給ふこと、千たびばかり申し給ふけにやあらむ、やうやう神なりやみぬ。少しあかりて、風はなほはやく吹く。揖取のいはく「これは龍のしわざにこそありけれ。この吹く風はよき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よき方に赴きて吹くなり」といへども、大納言は是を聞き入れ給はず。三四日ありて吹き返しよせたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言南海の濱に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息つき臥し給へり。船にあるをのことも國に告げられたれば國の司詣で訪らふにも、えおきあがり給はで船底にふし給へり。松原

にみ席敷きておろし奉る。その時にぞ南海にあらざりけりと思ひて、辛うじて起きあがり給へるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝを二つつけたるやうなり。これを見奉りてぞ、國のつかさもはゝゑみたる。國に仰せ給ひて、たごし作らせたまひて、によふによふになはれて家に入り給ひぬるを、いかで聞きけむ、遣しゝをのことも参りて申すやう「龍の首の玉をえとらざりしかばなむ殿へもえ参らざりし。玉のとり難かりしことを知り給へればなむ、勘當あらじとて参りつる」と申す。大納言起き出でゝのたまはく「汝等よくもて來ずなりぬ。龍はなる神の類ひにてこそありけれ。それが玉をとらむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、またこともなく我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。をのこともゝなありきそ」とて家に少し残りたりけるものどもは、龍の玉とらぬものどもにたびつ。これ聞きて、離給ひしものうへは、腹をさりて笑ひ給ふ。糸をふかせて作りし屋は、鳶鳥の巢に皆くひもていにけり。世界の人のいひけるは「大伴の大納言は、龍の首の玉やとりて坐したる」「いなさもあらず、みまなこ二つにすもゝのやうなる玉をぞ添へていましたる」といひければ「あな堪へがた」といひけるよりぞ世にあはぬ事をばあなたへがたとはいひ始めける。『中納言石上の鷹は、家につかはるゝをのことも許に「つばくらめの巢くひたらば告げよ」とのたまふを、承りて「何の料にかあらむ」と申す。答へてのたまふやう「燕のもたる子安貝とらむ料なり」との給ふ。



をのことも答へて申す、「燕を數多殺して見るだにも腹になきものなり。たゞし子産む時なむいかでが出すらむ。はら〜かと人だに見れば失せぬ」と申す。又人の申すやう「大炊寮のいひ炊ぐ屋の棟のつくの穴毎に燕は巢くひ侍り。其にまめならむをのこともをみてまかりてわぐらをゆひて上げて窺はせむにそこの燕子うまざらむやは。さてこそとらしめ給はめ」と申す。中納言喜びたまひて「をかしき事にもあるか奇。もとも得知らざりけり。興あると申したり」とのたまひて、まめなるをのことも二十人ばかり遣して、あな、ひに上げすゑられたり。殿よりつかひひまなく給はせて子安貝とりたるかと問はせ給ふ。燕も人の數多のぼり居たるにおぢて、巢にのぼりこず。かゝるよしの御返り事を申しければ、聞き給ひて、いかゞすべきとおぼしめし煩ふに、かのつかさの官人くらつ鷹とまうす翁申すやう「子安貝をとらむと思しめさば、たばかり申さむ」とて御前に参りたれば、中納言ひたひを合せてむかひ給へり。くらつ鷹が申すやう「この燕の子安貝は、悪しくたばかりてとらせ給ふなり。さでは得とらせ給はじ。あな、ひにおどろおどろしく、廿人の人ののぼりて侍れば、あれて寄りまうで來すなむ。せさせ給ふべきやうは、このあな、ひを毀ちて、人皆退きてまめならむ一人をあらこに載せすゑて、綱をかまへて、鳥の子産む間に綱を釣りわけさせて、ふと子安貝をとらせ給はむよかるべき」と申す。中納言のたまふやう「いとよきことなり」とてあな、ひを毀ちて、人皆歸りまうできぬ。中納言くらつ鷹にのたまはく「燕はいかなる時にか子を産むと知りて、人をばわぐべき」とのたまふ。くらつ鷹申すやう「燕は子うまむと

する時は、尾をさへげて七たびめぐりてなむ産み落すめる。さて七たびめぐらむをりひき上げて、そのをり子安貝はとらせ給へ」と申す。中納言喜び給ひて、萬の人にも知らせ給はで、みそかにつかさにいまして、をのこともの中にまじりてよるを晝になしてとらしめ給ふ。くらつ鷹かく申すをいと痛く喜び給ひての給ふ、「こゝに使はるゝ人にもなきに願ひをかなふることの嬉しさ」といひて、おんぞぬぎてかづけ給ひつ。更に夜さりこのつかさにまうでこのたまひて遣はしつ。日暮れぬれば、かのつかさにおはして見給ふに、まことに燕巢作り。くらつ鷹申すやうに尾をさへげてめぐるに、荒こに人を載せて釣りわけさせて燕の巢に手をさし入れさせて探るに「物もなし」と申すに、中納言「悪しく探ればなきなり」と腹たちて、誰ばかりおぼえむにとて「我のぼりて探らむ」とのたまひて、籠にのりてつられのぼりて窺ひ給へるに、燕尾をさへげていたくめぐるに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめるものさはる時に「われ物握りたり。今はおろしてよ。翁しえたり」とのたまひて、集りてとおろさむとて、綱をひきすぐして綱絶ゆる即ち、やしまの鼎のうへにのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていきいで給へるに、また鼎の上より、手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて「御心ちいかおぼるさるゝ」と問へば、息の下にて「ものは少し覺ゆれど腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば嬉しく覺ゆるなり、まづ去そくさしてこ。この貝顔みむ」と御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに、燕のまりおける古くそを握り



給へるなりけり。それを見給ひて「あなかひなのわざや」とのたまひけるよりぞ、思ふにたがふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらずと見給ひけるに、御こゝちもたがひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず。御腰は折れにけり。中納言はいはけたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給ひけれど、それを病にていと弱くなり給ひにけり。具をえとらずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに病み死ぬるよりも、人ぎゝ耻かしく覺え給ふなりけり。これをかぐや姫聞きてとぶらひにやる歌、

「年を経て浪立ちよらぬすみよしのまつかひなしと聞くはまことか」とあるをよみて聞かす。いと弱き心ちに頭もたげて、人に紙をもたせて、苦しき心ちにからうじてかき給ふ。

「かひはかくありけるものをわびはて、死ぬる命をすくひやはせぬ」と書きはて、絶え入り給ひぬ。これを聞きて、かぐや姫少しあはれとおぼしけり。それよりなむ少し嬉しきことをばかひありとはいひける。』さてかぐや姫かたち世に似ずめでたきことを、帝きこしめして、内侍中臣のふさ子にの給ふ。「多くの人の身をいたづらになしてあはざるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、罷りて見て参れ」との給ふ。ふさ子承りてまかれり。竹取の家にかしこまりて請じ入れてあへり。姫に内侍のたまふ、「おほせごに、かぐや姫のかたちいうにおはすとなり、能く見てまゐるべきよしのたまはせつるになむ参りつる」といへば、さらばかくと申し侍らむ」といひて入りぬ。かぐや姫に「はや御使に對面し給へ」といへば、かぐや姫「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」といへば「うたてものたまふかな。帝の御

使をばいかでかおろかにせむ」といへば、かぐや姫答ふるやう「帝の召してのたまはむことかしこしとも思はず」といひて、更に見ゆべくもあらず。うめる子のやうにはあれど、いと心耻しげにおろそかなるやうにいひければ、心のまゝにもえ責めず。姫内侍の許に歸り出で、「口をしくこの幼きものはこはく侍るものにて對面すまじき」と申す。内侍「かならず見奉りてまゐれと、仰せ事ありつるものを、見奉らではいかでか歸り参らむ、國王のおほせごを、まさに世に住み給はむ人の承り給はではありなむや。いはれぬことなし給ひそ」と詞はづかしくいひければ、これを聞きて、ましてかぐや姫さくべくもあらず。「國王のおほせごを背かばはや殺し給ひてよかし」といふ。この内侍歸り参りて、このよしを奏す。帝きこしめして「多くの人を殺してける心ぞかし」とのたまひて止みけれど、猶おぼしめしおはしまして、この女のたばかりにやまけむと思しめして竹取の翁を召して仰せたまふ、「汝が持ちて侍るかぐや姫を奉れ。かはかたちよしときこしめして、御使をたびしかど、かひなく見えすなりにけり。かくたいたいしくやはならはすべき」と仰せらる。翁かしくまりて御かへりごと申すやう「このめのわらはは、絶えて宮仕つかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりと罷りて仰せ給はむ」と奏す。是を聞き召して仰せ給ふやう「なごて翁の手におはしたてたらむものを、心に任せざらむ、この女もし奉りたるものならば、翁にかうぶりをなごかたばせざらむ」。翁喜びて家に歸りて、かぐや姫にかたらふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はぬ」といへば、かぐや姫答へていへば「もはらさやうの宮づかへ



つから奉らじと思ふを、強ひてつからまつらせ給は、消え失せなむす。みつかさかうぶりの  
 からまつりて死ぬばかりなり。翁いらふるやう「なしたまひを、つかさかうぶりも、我が子  
 を見奉らでは何にかはせむ。さはありともなどか宮つかへをし給はざらむ。死に給ふやうや  
 はあるべき」といふ。「なほそらごとかと、仕うまつらせて死なずやあると見給へ。おまたの  
 人の志おろかならざりしを空しくなしてしこそわれ、昨日今日帝のたまはむことにつか  
 ひ、人さゝやさし」といへば。翁答へていはく「天の下の事はとありともかゝりとも、御命の  
 わやふさこそ大きなるさはりなれ。猶仕うまつるまじきとをまゐりて申さむ」とて参り申す  
 やう「仰の事のかしこさに、かのわらはを参らせむとて仕うまつれば、宮仕にいだしたてな  
 ば死ぬべしと申す。造麿が手にうませたる子にてもあらず、むかし山にて見つけたる。か  
 ければ心ばせも世の人に似ずを侍る」と奏せさす。帝おほせ給はく、「造麿が家は山本ちかゝ  
 なり。御狩の行幸したまはむやうにて見てむや」とのたまはず。造麿が申すやう、「いとよき  
 ことなり。何か心もなく侍らむに、ふと行幸して御覽せられなむ」と奏すれば、帝俄に目を  
 定めて、御狩にいであまひて、かぐや姫の家に入り給ひて見給ふに、光満ちてけうらにて居  
 たる人あり。これならむとおぼして、近くよりせ給ふに、逃げて入る。袖をとらへ給へば、お  
 もてをふたぎてさふらへど、はじめよく御覽じつれば、たぐひなくおぼえさせ給ひて、許さ  
 じとすとてゐておはしませむとするに、かぐや姫答へて奏す、「おのが身はこの國に生れて  
 侍らばこそつかひ給はめ、いとゐておはし難くや侍らむ」と奏す。帝「などかさあらむ」、猶率

ておはしませむ」とて御輿を寄せたまふに、このかぐや姫と影になりぬ。はかなく口をし  
 とおぼして、げにたい人にはあらざりけりとおぼして、「さらば御供にはゐていかじ。もとの  
 御かたちとなり給ひぬ。それを見てだに歸りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫もとのかたち  
 になりぬ。帝なほめでたくおぼし召さるゝことせきとめがたし。かく見せつる造麿を悦びた  
 まふ。さて仕うまつる百官の人々に、あるじいかめしうつかうまつる。帝かぐや姫を留めて  
 歸り給はむことを、飽かず口をしおぼしけれど、たましひを留めたる心ちしてなむ歸らせ  
 給ひける。御輿に奉りて後にかぐや姫に、

「かへるさのみゆきものうくおもはえてそむきてとまるかぐやひめゆゑ」。御かへりこと  
 を、

「葎はふ下にもとしは経ぬる身のなにかはたまのうてなをもみむ」。これを帝御覽じてい  
 とし歸り給はむそらもなくおぼさる。御心は更に立ちかへるべくもおぼされざりけれど、さ  
 りとて夜を明し給ふべきにもあらねば、歸らせ給ひぬ。常に仕うまつる人を見給ふに、かぐ  
 や姫のかたはらに寄るべくだにあらざりけり。こと人よりはけうらなりとおぼしける人の、  
 かれにおぼしあはずれば人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝりて、たゞ一人すぐしたま  
 ふ。よしなくて御方々にも渡り給はず、かぐや姫の御許にぞ御文を書きて通はさせ給ふ。御  
 返事さすがに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき木草につけても、御歌を詠みてつかは  
 す。』かやうにて御心を互に慰め給ふ程に、三年ばかりありて、春の初よりかぐや姫月のおも



しろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の月の顔見るは忌むこと、制しけれども、ともすればひとまには月を見ていみじく泣き給ふ。ふみづきのもちの月にいで居て、せちに物思へるけしきなり。近くつかはるゝ人々、竹取の翁に告げていはく「かぐや姫例も月をわはれがり給ひけれども、この頃となりてはたゞごとにも侍らざめり。いみじくおぼしなげくことあるべし。よくよく見奉らせ給へ」といふを聞きて、かぐや姫に「うやうやあでふ心ちすればかく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に」といふ。かぐや姫「月を見れば世の中こゝろばそくわはれに侍り。なでふ物をかなげき侍るべき」といふ。かぐや姫のある所に至りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「わが佛何事を思ひ給ふぞ。おぼすらむこと何事ぞ」といへば「思ふともなし。物なむ心ばそく覺ゆる」といへば、翁「月な見給ひそ。これを見給へば物おぼすけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずてはあらむ」とて、なほ月出づれば、いで居つゝなげき思へり。夕暗には物思はぬけしきなり。月の程にありぬれば、獨時々はうちなげきなきなどす。是をつかふものども、「猶物おぼすことあるべし」とさゝやけど親を始めて何事とも知らず。はつきもちばかりの月にいで居て、かぐや姫といたく泣き給ふ。人めも今は包み給はず泣き給ふ。これを見て、親ども、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫なくなくいふ、「ささげきも申さむと思ひしかども、かならず心感はし給はむものぞと思ひて、今まですゞし侍りつるなり。さのみやはとてうち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契なりけるによりて

なむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりなければ、この月のもちに、かのもとの國より迎へに人々まうでこむず。さらずまかりぬべければ、おぼしなげかむが悲しきことを、この春より思ひなげき侍るあり」といひていみじく泣く。翁こはなでふことをの給ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、なたねの大きさはせしを、我たけたち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「我こそ死なめ」とて、泣きのゝしるといと堪へがたげなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時のまとしてかの國よりまうでこしかども、かくこの國には數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心ちもせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする」といひて諸共にいみじう泣く。つかはるゝ人々も年頃ならひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかに美しくしかりつることを見ならひて、戀しからむとの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心になげかしかりけり。この事を帝きこしめして、竹取が家に御使つかはさせ給ふ。御使に竹取いで逢ひて、泣くと限りなし。この事を歎くに、髪も白く腰もかいまり目もたれにけり。翁今年は五十十ばかりなりけれども、物思には片時になむ老になりけり元と見ゆ。御使仰せごととて翁にいはく「いと心苦し物思ふなるはまどにかと仰せ給ふ」。竹取なくなく申す、「このもちになむ月の都よりかぐや姫の迎へにまうでくなる。たふとく問はせ給ふ。このもちには人々たまはりて、月の都の人まうで來ば捕へさせむ」と申す。御使かへり參りて、翁のありさ



ま申して奏しつる事ども申すを聞き召してのたまふ。「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに明暮見馴れたるかぐや姫をやりてはいかと思ふべき」。かのもちの目つかさづかさにおほせて、勅使には中將高野の大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて二千人の人を竹取が家につかはす。家に罷りてついでの上に千人屋の上に千人、家の人々と多かりけるに合せ、あけるひまもなく守らす。この守る人々も弓矢を帯して居り。もやの内にはをうなども番にするて守らす。姫塗籠の内にかぐや姫をいだきて居り。翁もぬりごめの戸をさして戸口に居り。翁のいはく、かばかり守る所に、天の人にもまけむや」といひて屋の上に居る人々にいはく「露も物空にかけらばふと射殺し給へ」。守る人々のいはく「かばかりして守る所にかははり一つだにあらば、まづ射殺してとにさらさむと思ひ侍る」といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きてかぐや姫は「さしこめて守り、戦ふべきしたぐみをしたりと、あの國の人をえ戦はぬなり。弓矢して射られじ。かくさしこめてありとも、かの國の人とは皆あきなむとす。相戦はむとすとも、かの國の人來きは猛き心つかふ人よもあらじ」。翁のいふやう、「御迎にこむ人をば、長き爪してまなこをつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さむ。さが尻をかき出で、こらのおほやけ人に見せて耻見せむ」と腹だちをり。かぐや姫いはく「これだかになのたまひそ。屋の上ををる人どもの聞くに、いとまきなし。いますかりつる志どもを、思ひも知らで罷りなむすることの口をしう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親たちのかへりみをいさゝか

だに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじきに、月ごろもいで居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむかく思ひなげき侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人はいとけうらにて、老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。さる所へまからむするもいみじくも侍らす。老い衰へ給へるさまを見奉らざらむこそ戀しからめ」といひて泣く。翁「胸痛きことなしたまひそ。麗はしき姿したる使にもさはらじ」とねたみをり。かゝる程に宵うちすぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りておりきて、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢をとりたてむとすれども、手に力もなくなりてなえかまはりたる中に、心さかしきもの念じて射むとすれども、外さまへいさければ、あれも戦はで、心ちたゞしれに守りあへり。立てる人どもはさう束のさよらなること物にも似ず。とぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に造磨まうで」といふに、たけく思ひつる造磨も、物に酔ひたる心ちしてうつぶしに伏せり。いはく「汝をさなき人、聊かなる功徳を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほど、てくだしゝを、そこの年頃そこの金賜ひて、身をかへたるが如くなりたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かくいやしきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、



翁は泣き歎く、わたしはぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ることとはたとせあまりになりぬ。片時とのたまふに怪しくなり侍りぬ。またことどころにかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ」といふ。こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へばえ出でおはしますまじ」と申せば、その返どはなくて、屋の上にとぶ車をよせて、「いざかぐや姫、きたなき所にいかで久しくおはせむ」といふ。立てこめたる所の戸即ちたゞあきにあきぬ。格子ども、人はなくしてあきぬ。姫いだきて居たるかぐや姫とにいぬ。えといひまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。竹取心まどひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、のぼらむをだに見送り給へ」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。我をばいかにせよとて棄て、は昇り給ふぞ。ぐしてゐておはせぬ」と泣きて伏せれば、「御心まどひぬ。文を書きおきてまからむ。戀しからむをりをりとり出で、見給へ」とてうち泣きて書くことは、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎわかれぬること、返す返すはいなくこそおぼえ侍れ。脱ぎおくきぬをかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりもおちぬべき心ちす」とかきおく。あまびとの中にもたせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。ひとりの天人いふ「壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの聞こしめしたれば、御心ちあしからむものぞ」とて、もてよりたれば、聊か骨め給ひて、少しかたみとて、脱ぎおくきぬに包まむとすれば、あるあま人つゝませず、おんぞをとり出で、させむとす。その時にかぐや姫

「しばし待て」といひて「きぬ着つる人は心ことになるなり。物ひとこといひおくべき事あり」といひて文かく。あま人「おそし」と心もとながり給ふ。かぐや姫「物知らぬことなの給ひそ」とて、いみじくしづかにおほやけに御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。「かく數多の人をたまひてといめさせ給へど、許さぬ迎へまうできて、とりゐてまかりぬれば、口をしき悲しきこと、宮仕つかうまつらすなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ずおぼしめしつらめども、心強くらけたまはらずなりにしこと、なめげなるものにおぼし召しといめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる」とて、

「今はとて天のはごろもさるをりぞ君をおはれとおもひいでぬる」とて、壺の薬をへて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將にあま人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しとおぼしつるとも失せぬ。このきぬ着つる人は物思もなくなりければ、車に乗りて百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁姫、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書きおさし文を讀みて聞かせけれど「何せむにか命も惜しからむ。たがためにか何事もようもなし」とて薬もくはず、やがておさもあがらず病みふせり。中將人々をひき具してかへり参りて、かぐや姫をえ戦ひ留めずなりぬることをこまごまとそうす。薬の壺に御文をへてまゐらす。ひろげて御覽じて、いたくおはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣かんだちめを召して「いづれの山か天に近き」とはせたまふに、ある人奏す「駿河の國にある山なむ、この都も近く天もちかく侍る」と奏す。これを



きかせ給ひて、

「おふことも涙にうかぶわが身にはしなぬくすりも何にかはせむ」。かの奉る不死の薬の壺に、御文具して御使にたまはず。勅使にはつきの岩笠といふ人を召して、駿河の國にわなる山のいたゞきにもて行くべきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせたまふ。御文不死の薬の壺ならべて、火をつけてもやすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をふじの山とは名づけける。そのけぶりいまだ雲の中へたちのぼるとぞいひ傳へたる。

### 竹取物語

終

### 伊勢物語

むかし、男、うひからうぶりして奈良の京春日の里にゑるよしして狩にいにけり。その里にいとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。おもほえずふる里にいとはしたなくてありければ心ちまどひにけり。男の着たりける狩ぎぬの裾をきりて歌をかきてやる。その男玄のぶずりの狩ぎぬをなむきたりける。

「春日野のわかむらさきのすり衣玄のぶのみだれかぎりえられず」

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことゝもや思ひけむ。

「みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれそめにまわれならなくに」

といふ歌の心ばへなり。昔人はかくいちはやきみやびをなむしける。

昔、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定らざりけるときに、西の京に女ありけり。その女、世の人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。それをかのみめ男うち物かたらひて、かへり来ていかゞ思ひけむ、時はやよひのついたち、雨をぼふるにやりける。

「おさもせずねもせで夜をあかしては春のものとながめくらしつ」。

昔、男ありけり。けさうとける女のもとに、ひじきもといふものをやるとて、



「おもひわらば葎の宿にねもしなむひしきものには袖をしつゝも」  
二條のきささの、まだみかどもつかうまつり給はで、たゞ人にておはしける時のことなり。

昔、ひんがしの五條に、おほきさいの宮おはしましける西の對にすむ人ありけり。それをほいにはあらで、志深かりける人ゆきとぶらひけるを、むつきの十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、猶愛しと思ひつゝなむありける。またの年のむつきに梅の花盛にこぞをこひていきて、立ちて見居て見みれど、こぞに似るべくもわらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾ぶくまでふせりて、こぞを思ひ出でよめる。

「月やわらぬ春やむかしのはるならぬ我が身ひとつはもとの身にして」  
とよみて、夜のはのぼのと明くるに、なくなくかへりにけり。

昔、男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、わらはべのふみあけたるついでくづれより通ひけり。人しげくもあらぬど、たび重りければ、あると聞きつけて、そのかよひぢに夜ごとに人をすゑて守らせければ、いけどもえ逢はでかへりけり。さてよめる。

「人しれぬわがかよひ路の關守はよひよひごとらうちもねなむ」  
とよみけるを聞き、いといたうゑんじけり。あるじゆるしてけり。二條のきささにまのび

て参りけるを、世のきこえありければ、せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ。

昔、男ありけり。女のえう一掃まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて女心あはせてぬすみ出で、いとくらしきにきけり。あくた川といふかはをぬすみいざければ、草のうへにおきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひけるを、ゆくさきおほく夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さ人といみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あばらなるくらに、女をば奥におし入れて、男は弓やなぐひを負ひて戸口に居り。はや夜も明けなむと思ひつゝ居たりけるに、鬼はや女をば一口にくひてけり。「あなや」といひけれど、神の鳴るさわざにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに見れば、来て來し女もなし。足すりをして泣けどもかひなし。

「まら玉かなにぞと人のとひしとき露とこたへてけなましものを」。

これは二條のきささの、いとこの女御の御許に仕うまつるやうにて居給へけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御せうと堀河のおとゝ、太郎國經の大納言、まだげらうにて内へおわり給ふは、いみじうなく人あるを聞きつけて、とよめてとり返し給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいとわかうで、たゞはおはしける時とぞ。

昔、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、



浪のいと白くたつを見て、

「いとくしく過ぎにしかたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな」となむよめりける。

むかし、男ありけり。京や住みうかりけむ、あづまのかたにゆきてすみ所もとむとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の國、淺間の岳にけぶりの立つを見て、

「信濃なる淺間のたけに立つけぶりをちかた人の見やはとがめぬ」

昔、男ありけり。その男、身をよくなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき國をもとめにとてゆきけり。もとより友とする人、一人二人してもるともにいさけり。道知れる人もなくて惑ひいさけり。三河の國やつはしといふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは水ゆく河のくもてなれば橋を八つわたせるによりてなむ八橋とはいひける。その澤のほとりの木の蔭におり居てかれいひくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、「かきつばたいといふいつ文字を句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめ」といひければ、よめる、

「唐衣きつゝなれにしつましあればはるばる來ぬる旅をしぞおもふ」

とよめりければ、みな人かれいひのうへになみだ落してほとびにけり。ゆきゆきて駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、我がいらむとする道はいとくらうほそきに、つたかづらはまげりて物心ばそく、すゞろなるめを見ること、思ふに、すぎやうじやあひたり。「かゝる

道<sup>御</sup>はいかでおはする」といふを見れば見し人なりけり。京にその人の御もとにとて、文書きてつく。

「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人におはぬなりけり」。

富士の山を見れば、さつきのおつどもりに雪いと白うふれり。

「時まらぬ山はふじのねいつとてかかのことまだらに雪のふるらむ」。

その山はこゝにたとへば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむほどして、なりは鹽尻のやうになむありける。なほゆきゆきて、武藏の國とまもつふさの國との中にいと大きな川あり、それを隅田川といふ。その河のはとりにむれ居て「思ひやればかぎりなく遠くも來にけるかな」とわびあへるに、わたしもり「はや船に乗れ。日もくれぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人あきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥のはしと足と赤き鳴の大ききなる、水のうへに遊びつゝ、いををくふ。京には見えぬ鳥なれば皆人見しらす。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

「名にしおはゞいざことゝはむみやこ鳥我がおもふ人はありやなしやと」

とよめりければ、船こぞりてなきにけり。むかし、男、武藏の國までまどひありきけり。さてその國にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心づけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人と思ひける。この婿がねによみておこせたりける、住む



ところなむ、いるまの郡みよし野の里なりける。

「みよし野の田のむの雁もひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる」。婿がねかへし、

「我がかたによると鳴くなるみよし野の田のむの雁をいつかわすれむ」となむ。ひとの國にても、なほかゝることなむやまざりける。

むかし、男あづまへ行さけるに、友だちに道よりいひおこせける、

「わするなよほどは雲ぬになりぬともそらゆく月のめぐりあふまで」。

昔、男ありけり。人のむすめをぬすみて武藏野へゐて行くほどに、盗人なりければ、國の守にからめられにけり。女をばくさむらのなかに隠しおきて逃げにけり。道くる人、「この野は盗人わなり」とて、火つけむとす。女わびて、

「武藏野は今日はな焼きそわか草のつまもこもれりわれもこもれり」とよみけるを聞きて、女をばとりて共にゐていにけり。

昔、武藏なる男、京なる女のもとに、「聞ゆればはづかし、聞えねは苦し」とかきてうはがさに「むさしわぶみ」と書きておこせてのちおともせずなりにければ、京より女、

「武藏鑑さすかにかけてたのむには訪はぬもつらしとふもうるさし」とあるを見てなむ、堪へがたき心ちしける。

「訪へばいふとはねばうらむ武藏わぶみかゝるをりにや人はまぬらむ」。

むかし、男、みちの國にすゝるにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちにおもへる心なむありける。さてかの女、

「なかなかに戀に死なすはくはこにぞなるべかりける玉の緒ばかり」。

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、いきてねにけり。夜ふかく出でにければ、女、

「夜も明けばさつにはめなでゆくたかけのまだきになきてせなをやりつる」といへるに、男京へなむまかるとて、

「栗原のわねははのまつの人ならばみやこのつとにいざといはましを」といへりければよるこぼひておもひけらしとぞいひ居りける。

むかし、みちのくににて、なでふ事なき人のめに通ひけるに、わやしうさやうにてあるべき女ともわらず見えければ、

「まのぶ山まのびてかよふ道もがな人のこゝろのおくも見るべく」。

女限りなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見てはいかいはせむ罪。

昔、紀の有常といふ人ありけり。みよのみかどにつからまつりて、時にあひけれど、後は世かはり時うつりにければ、世の常の人のごとくあらず。人がらは心うつくしうあてはかなるとを好みて、こと人にも似ず貧しくてもなほ昔よかりし時の心ながら、世の常のことも知らず、年頃あひなれたるめ、やうやうとこはなれて、つひに尼になりて、姉のさきだちて尼にな



りたるところへ行くを、男、誠にむつまじき事こそなかりけれ、今はとて行くを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、ねんごろに相語らひける友だちの許に、「かうかう今はとてまかるを、何事も聊なる事もえせでつかはずこと」と書きて、おくに、

「手ををりておひ見しことをかぞふれば十といひつゝよつはへにけり」。

この友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、夜のもので贈りてよめる、

「年だにも十とてよつは経にけるをいくたび君をたのみさぬらむ」。

かくいひやりたりければよつは経にけるをいくたび君をたのみさぬらむ、

「これやこのおまの羽ごろもうべしこそ君がみけしとたてまつりけれ」。

「秋やくる露やまがふとおもふまであるは涙のふるにぞわりける」。

「あだなりと名にこそたてれさくら花年にまれなる人も待ちけり」。

かへし、

「けふこそは明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや」。

「くれなゐににはほふはいづらゑら雪の枝もとを、に降るかともみゆ」。

男、あらずよみに詠みける、

「くれなゐににはほふがうへのしら菊はをりける人の袖かとも見ゆ」。

むかし、男、宮づかへしける女の方に、ごたちなりける人をあひしりたりける、ほどもなくかれにけり。おなじ所なれば、女のめには見ゆるものから、男はあるものかとも思ひたらず、女、

「天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから」

とよめりければ、男かへし、

「ゆき返り空懸のみにみしてふることはわがゐる山の風はやみなり」

とよめりけるは、あまたまた男ある女になむわりける。

むかし、男、大和にある女を見てよばひてあひにけり。さてほどへて、宮づかへする人なりければ、かへりくる道に、やよひばかりにかへでの紅葉のいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる、

「君がためたをれる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ」

とてやりたりければ、返どは京につきてなむもてきたりける。

「いつの間にもうつろふ色のつきぬらむ君がさとはは春なかるらし」。

むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるをいかゞわりけむ、さる



さかなる事につけて、世の中をうしとおもひて、出で、いなむと思ひてかゝる歌をなむよみてものに書きつけゝる。

「いで、いなば心かるしといひやせむ世のありさまを人はしらねば」とよみおきて出で、いにけり。この女かく書きおきたるを見てけしう心おくべきこともおぼえぬを、何によりてかかゝらむと、いといたううち泣きて、いづ方にもとめ行かむと、門に出で、とみかうみ見けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

「思ふかひなき世なりけりとし月をわたにちきりてわれやすまひし」といひてあがめ居り。

「人はいさ思ひやすらむ玉かづらおもかげにのみいで、見えつゝ、この女いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせたり。

「今はとてわする、草のたねをだに人のこゝろにまかせずもがな」かへし、

「わすれ草植うとだにきくものならば思ひけりとは知りもまなまし」。又々ありしよりけいにいひかはして、男、

「忘るらむと思ふこゝろのうたがひにありしよりけにものぞ悲しき」かへし、

「中空にたちゐる雲のわともなく身のはかなくもなりぬべきかな」

とはいひけれど、おのが世々になりにければ、うとくなりけり。

昔、はかなくて絶えにける中、なほや忘れざりけむ、女のもとより、

「うきながら人をばえしも忘れねばかつらみつゝ、なほぞこひしき」といへりければ、さればよといひて、男、

「あひは見で心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞおもふ」とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきの事どもなどいひて、

「秋の夜のちよを一夜になすらへて八千夜しねばや飽く時のあらむ」かへし、

「秋の夜の千夜をひと夜になせりともことば残りてとりやなきなむ」いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出で、遊びけるを、おとなにありにければ、

男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めとおもひ女もこの男をこそと思ひつゝ、親のあはすることも聞かやむありける。さてこのとなりの男のもとよりかくなむ、

「つゝ、おづ、井筒にかけしまろがたけ過ぎいにけらしなむ見ざるまに」女かへし、

「くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐせむ」と、

かくいひいひて、つひにはいのことくあひにけり。さて年ごろふる程に、女の親なくありて



たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、かふちの國高安の郡にいき通ふ所いで來にけり。さりけれどこのもとの女、悪しと思へるけしきもなくして出しやりければ、男、ことごとくありて、かゝるにやあらむと思ひ疑ひて、前裁の奇かにかくれ居て、かふちへいぬるがほにて見れば、この女いとうけさうじて、うちながめて、

「風吹けば沖つしらなみたつた山よはにや君がひとり越ゆらむ」

とよみけるを聞き、かぎりなくかなしと思ひ、河内へもいかずなりにけり。まれまれかの高安に來て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、髪をかしらにまきわけて、おもながやかなる女の手づからいひがいをとりて、けこのうつはものに盛りけるを見て、心うがりていかずなりにけり。さりければ、かの女大和のかたを見やりて、

「君があたりみつゝを居らむ生駒山雲なかくしそあめは降るとも」

といひて見いだすに、辛うじて大和人こむといへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

「君こむといひし夜ごと過ぎぬれば頼まぬもの、戀ひつゝぞふる」

といひけれど、男すますなりにけり。

昔、男女片田舎にすみけり。男宮づかへしにとて、別を惜みてゆきにけるまゝに、三年來ざりければ待ちわたりけるに、いと戀にいひける人に、今宵わはむと契りたりけるに、この男きたりけり。「この戸あけたまへ」と叩きけれど、あけで歌をなむよみて出したりける。

「あらたまのとしの三とせを待ちわびてたゞこよひこそにひ枕すれ」  
といひ出したりければ、

「あづさゆみま弓つき弓としを経てわがせしがごとうるはしみせよ」

といひていなむとしければ、女、

「梓ゆみひけどひかねどむかしよりこゝろは君によりにしものを」

といひけれど、男かへりにけり。女いとかなしくて、しりにたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そこなりけるいはに、およびの血して書きつけ、

「あひ思はでかれぬる人をとめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる」

とかきてそこに徒らになりにけり（經字）。

むかし、男ありけり。逢はじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとにいひやりける、

「秋の野にさゝわけし朝の袖よりもわはでぬる夜ぞひぢまさりける」。

色このみなる女、かへし、

「みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなであまの足たゆくる」。

むかし、男、五條わたりなりける女をえ得ずなりにけることゝ、わびたりける人の返事に、  
「おもほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし船のよりしばかりに」。

むかし、男、女の許に一夜いきて、またもいかずなりにければ、女の親腹立ちて、手洗ふ所に、ぬきすをとりて投げすてければ、たらひの水に泣くかげの見えけるを、みづから、



「我ばかり物思ふ人はまたもむらじとおもへば水のしたにもありけり」とよめりけるを、來ざりける男ききて、

「みなくちにわれや見ゆらむかはづさへ水の下にてもろこゑになくむかし、色ごのみなりける女出でいにければ、いふかひなくて、男、

「などてかく逢ふをかたみになりぬらむ水漏さじと契りしものを」。

むかし、春宮の女御の御かたの、花の賀に召しあげられたりけるに、このゑづかさなりける人、

「花にあかぬなげきはいつもせしかども今日のこよひに似る時はなし」。

むかし、男、はつかなりける女のもとに、

「逢ふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながく見ゆらむ」。

むかし、男、宮の内にて、あるごたちの局の前をわたりけるに、何のあだにか思ひけむ、「よしや草葉よならむさがみむ」といひければ、男、

「罪もなき人をうけへばわすれ草おのがうへにぞおふといふなる」といふを、ねたう女もおもひけり。

昔、物いひける女に年ごろありて、

「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」といへりけれど、何とも思はずやありけむ。

昔、男、津の國うばらの郡に通ひける女、このたびいきてはまたは來じと思へる氣色なれば、男、

「蘆邊よりみち來る潮のいやましに君にこゝろをおもひますかな」とかへし、

「こもりえに思ふこゝろをいかでかは船さす棹のさしてしるべき」。

田舎人のことばにては、よしやあしや。

むかし、男、つれをかりける人のもとに、

「いへばえにいばねば胸にさわがれて心ひとつになげくころかな」。

おもなくていへるなるべし。

昔、男、心にもあらで絶えたる人のもとに、

「玉の緒をわををによりてむすべれば絶えての後もわはむとぞおもふ」。

昔、男、忘れぬるなめりととひごとしける女のもとに、

「谷せばみ峰まではへる玉かづら絶えむと人をわがおもはななくに」。

むかし、男、色好みなりける女にあへりけり。うしろめたくや思ひけむ、

「われならで下紐とくなあさがはの夕かげまたぬ花にはありとも」。

かへし、

「二人して結びし紐を一人してあひ見るまではとかじとぞおもふ」。



むかし、紀の有常がりいきたるにありきておそくさけるによみてやりける。  
「君によりおもひならひぬ世の中の人はこのをやこひといふらむ」  
かへし、

「ならばねば世の人ごとに何をかも戀とはいふと問ひしわれしも」。

昔、西院の帝と申すみかどおはしましけり。その帝のみこに、たかいこと申すいまそかりけり。そのみこうせたまひておはんはふりの夜、その宮の隣なりける男御はふり見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しうゐるいで奉らず、うち歎きて止みぬべかりけるあひだに、あめの下の色ごのみ源の至といふ人、これもものみるに、この車を女車と見て、寄り來てとかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむ、ともしけちなむとすとて乗れる男のよめる、

「いで、いなばかぎりなるべみともしけち年経ぬるかとなく聲をさけ」。  
かの至かへし、

「いとあはれなくぞきこゆるともしけち消ゆるものとも我は知らずな」。

天の下の色好の歌にてはなほぞありける。至はまたがふがおほぢなり。みこのほいなし。昔、わかき男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらすする親ありて、思ひもぞつくとして、この女をほかへおひやらむとす。さこそいへ、まだ逐ひやらす。人の子なれば、またこゝろいきほひなかりければとむむるいきほひなし。女もいやしければすまふ力なし。さるあひだにおもひ

はいやまさりにまさる。俄に親この女を逐ひうつ。男血の涙をちがせども、とむむるよしなし。むて出で、いなば新入女かへし人につけて、

「いづこまでおくりはしつと人といはわかぬわかれのちみだ川まで」。  
男なくなくよめる、

「いで、いなば新入女たれか別のかたからむありしにまさる今日はかなしも」。

とよみて絶え入りにけり。おやおあわてにけり。なほ新入女思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、まことにたえ入りにければ、惑ひて願などたてけり。今日の入相ばかりに絶え入りて、またの日のいぬの時ばかりになむからうじていきいでたりける。むかしのわか人は、さるすける物おもひをなむしける。今のおきなまさしに新入女なんや。

むかし、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男の貧しき、一人はあてなる男の徳あるもたりけり。賤しき男もたる、まはすのつごもりに、うへのきぬを洗ひて手づからはりけり。志はいたしけれど、さる賤しきわさもならはざりければ、うへのきぬの肩をはりやりてけり。せむかたもなく、たいなきになきけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いと清らなるろうさうのうへのきぬを、新入女見いで、やるとて、

「むらさきの色濃きときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」。

武蔵野のこゝろなるべし。  
むかし、男、色好とえるまゐる女をわひいへりけり。されどにく、はたあらざりけり。まばまば



いさけれと猶いとうしろめたく、さりとていかではたえわらざりける中なりければ、二日三日ばかりさほる事ありて、えいかでかくなむ、

「いで、ゆくあどだにいまだかはらぬに誰が通路と今はなるらむ」  
物うたがはしさによめるなりけり。

むかし、かやのみこと申すみこおはしましけり。そのみこ女をおぼしめして、いとかしこく惠みつかう給ひけるをひとなまめきてありけるを、若き人はゆるさざりけり。我のみと思ひけるを、また人聞きつけて、文やるとて、郭公のかたをかきて、

「郭公がなく里のあまたあればなほうとまれぬおもふものから」  
といへり。この女けしきをとりて、

「名のみたつまでのをさはけさぞ鳴く庵あまたとうとまれぬれば」。  
時はさつきになむありける。男かへし、

「いほりおほききでの田長はなはたのむわがすむ里に聲したえすは」。

むかし、をとこ、わがたへゆく人に、馬のはなむけせむとて呼びて、疎き人にしわらざりければ、いへとうじにて俵と蓋さへせて、女のさう束かつけむとす。あるじの男歌よみてものこしにゆひつけさす。

「いで、ゆく君がためにと脱ぎつれば我さへもなくなりぬべきかな」。

このうたはあるがなかにおもしろければ心とめてよます。はらにあぢはひて拜禮。

昔、男ありけり。人のむすめのかしづくをいかでこの男にもいはむと思ひけり。うちいでむこと難くやありけむ、ものやみにありて死ぬべきときには、かくこそおもひしかといひけるを、親聞きつけて、なくなく告げたりければ、まどひ來たりけれど、死にければ、つれづれと籠りをりけり。時はみなつきのつごもりいと暑きころはひに、宵はあそび居りて、夜ふけてや、涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。この男見ふせりて、

「ゆくははたる雲のうへまでいぬべくは秋かせふくとかりにつげこせ」。

「暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこと、なくものを悲しき」。

むかし、男、いとうるはしき友ありけり。片時去らずあひ思ひけるを、ひとの國へいさけるを、いとわはれと思ひてわかれにけり。月日経ておこせたる文に、「あさましく對面せで月日の經にけること、忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人、心は、めかるれば忘れぬべきものにこそあめれ」といへりければ、よみてやる、

「めかるともおもほえなくに忘らるゝときしなれば面かげにたつ」。

むかし、男ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されどこの男をあだなりと聞きて、つれなさのみまさりつゝいへる、

「大ぬさのひく手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」。

かへし、男、

「大ぬさと名にこそたてれ流れてもつひによる瀬はありといふものを」。



昔、男ありけり。馬のはなむけせむとて人を待ちけるに、來ざりければ、

「今ぞしるくるしきものと人またむ里をばかれず訪ふべかりけり。」

むかし、男、妹うとのいとをかしげなるを見居りて、

「うらわかみぬよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞおもふ」ときこえけり。かへし、

「初草のなごめづらしきことの葉ぞうらなくものをおもひけるかな。」  
むかし、男ありけり。怨むる人をうらみて、

「鳥の子を十づゝとをはかさぬともおもはぬ人を思ふものは」といへりければ、

「朝露は消えのこりてもありぬべしたれかこの世をたのみはつべき。」  
また、男、

「ふくかせにここの櫻は散らすともあなたのみがた人のこゝろは。」  
また、女かへし、

「ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり。」  
また、男、

「ゆく水とすぐるよはひとちる花といづれまててふことをさくらむ」  
あだくらべかたみにしける男女の、忍びありさしける事をいふなるべし。

むかし、男、人の前裁に菊うゑけるに、

「植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへかれめや。」  
むかし、男ありけり。人のもとよりかざりちまきをおこせたりける返事に、

「わやめかり君は沼にぞ感ひけるわれは野にいで、かるぞわびしき」とて、雉をなむやりける。

昔、男、おひがたき女にあひて物語するほどに、とりの鳴きければ、  
「いかでかくとりの鳴くらむ人しれす思ふこゝろはまだ夜ふかきに。」

昔、男、つれなかりける女にいひやりける、  
「ゆきやらぬ夢路をたどるたもとは天つそらなるつゆやおくらむ。」

昔、男、おもひかけたる女のえうまじうなりての世に、  
「思はずはありもすらめど言の葉のをりふしごとにしたのまるゝかな。」

昔、男、臥して思ひ起きておもひ、おもひあまりて、  
「わが袖は草のいはりにあらぬぞもくるれば露のやどりなりけり。」

昔、男、人しれぬ物おもひけり。つれなき人のもとに、  
「戀ひわびぬあまのかるもに宿るてふわれから身をも碎きつるかな。」

昔、心つきて色好なる男、長岡といふ所に家造りて居りけり。そこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ田からむとて、この男のあるを見て、いみじのすきもの



のしわざやとて、集りていり來ければ、この男逃げて、奥にかくれにければ、女、

「おれにけりおはれいく世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ」。

といひて、このみやに集りきゐてありければ、この男、

「葎おひて荒れたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」。

となむ出したりける。この女ども穂ひろはむといひければ、

「うちわびて落穂ひろふときかませば我も田づらにゆかましものを」。

昔、男、京をいかゞ思ひけむ、ひんがし山にすまはむと思ひ入りて、

「すみわびぬ今はかぎりとし山里に身をかくすべきやどもとめてむ」。

かくてもものいたく病みて死にいたりたりければ、おもてに水を、ぎなどして、いさいで、

「わがうへに露をおくなるあまの川とわたるふねの櫂のしづくか」。

となむいひていき出でたりける。

昔、男ありけり。宮づかへいそがしく、心もまめならざりけるほどのいへとうじまめに思は

むといふ人につきて、ひとの國へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある國の玄そ

うの官人のめにてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらすは飲まじ」とい

ひければ、かはらけとりて出したりけるに、着なりける桶をとりて、

「さつさまつはなたちばなの香をかけばむかしの人のそでの香ぞする」。

といひけるにぞ、おもひ出で、尼になりて山に入りける。

昔、男、筑紫までいきたりけるに、「これはいろこのむなるすきもの」と、すだれのうちなる人  
のいひけるを聞きて、

「そめ川をわたらむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」。

女かへし、

「名にしおはいあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬきるといふなり」。

昔、後元年年ごろ音づれざりける女、心かしくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、

ひとの國なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで来て、ものくはせなどえけり。長

き髪をさぬの袋に入れて、遠山摺のながきわををぞ着たりける行旅。夜さり「このありつる人

たまへ」と、あるじにいひければ、おこせたりけり。男、「我をば知らずや」とて、

「いにしへのにはひはいづら櫻花こけるかごともなりにけるかな」。

といふを、いとばつかしと思ひて、いらへもせで居たるを、「ちどいらへもせぬ」といへば「涙

のこぼるゝに目も見えずものもいはれず」といふ。

「これやこのわれにあふ身をのがれつゝ年月ふれどまさりがはなき」

といひて、さぬぬぎてとらせけれどすて、逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

昔、世と、ろつける女、いかでこゝろなさけわらむ男にわひ見てしがなと思へど、いひ出で

ひたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。子みたりを呼び集めてかたりけり。二人の子

は、なさけなくいらへて止みぬ。三郎なりける子なむ「よき御男ぞめてこむ」とおはするに、



この女けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中將にわはせてしがなと思ふこゝろあり。狩しありきけるにいきわひて、道にて馬の口をとりて、かうかうなむ思ふといひければ、あはれがりていきてぬにけり。さて後、男見えざりければ、女、男の家にいきてかいまみけるを、男はのかに見て、

「もゝとせにいとせたらぬつくも髪われを戀ふらしおもかげに見ゆ」

といひて、馬に鞍おかせて出でたつけしきを見て、うばらからたちにかゝりて家に來てうちふせり。男、この女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女歎きてぬとて、

「さむしろにころもかたしき今宵もやこひしき人にわばわがねむ」

とよみけるを、男あはれと思ひて、その夜はねにけり。世の中のれいとして、おもふをば思ひ、おもはぬをばおもはぬものを、この人はおもふをもおもはぬをもけぢめ見せぬ心なむありける。

むかし、男女、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづくなりけむ、あやしきによめる、

「ふく風にわが身をささば玉すだれひまもとめつゝ入るべき程ものを」。

かへし、

「とりとめぬ風にはありとも玉すだれ誰が許さばかひまもとむべき」

とて止みにけり。

昔、おほやけおぼしてつかうたまふ女の、色ゆるされたるありけり。おほみやすんどころと

ていますかりける御いとこなりけり。殿上に候ひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女がたゆるされたりければ、女のある所に来てむかひ居りければ、女、いとかたはなり。身もほろびなむ。かくなせそ」といひければ、

「思ふには忍ぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ」

といひて、曹司におり給へれば、れいのこのみさうしには、人の見るをもしらでのぼりぬければ、この女思ひわびて里へゆく。されば何のよきことと思ひて、いき通ひければ、皆人聞きてわらひけり。つとめてとのもづかさの見るに、くつをとりに奥に投げ入れてのぼりぬ。かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに亡びぬべしとて、この男「いかにせむ。我がかゝる心やめ給へ」と、佛かみにも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつゝ、なほわりなく戀しうのみおぼえければ、おんやうしかんなぎ呼びて、戀せじといふ祓への具してなむいさける。はらへけるまゝに、いとかなしきことかすまさりてありしよりけに戀しくおぼえければ、

「戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」

といひてなむいにける。

このみかどは、御かほかたちよくおはしまして、佛の御名を御こゝろに入れて、御こゑはいと尊くてまうし給ふを聞きて、女はいたうなきけり。かゝる君に仕らまつらで、すくせつたなく悲しきこと、この男にはだされてとてなむ泣きける。かゝるほどに帝聞し召しつけて、



この男をば流し遣してければ、この女のいとこの御息所女をばまかですせて、倉に籠めてまをり給うければ、倉にこもりてなく。

「あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ」

となきをれば、この男ひとの國より夜ごとに来つゝ、笛をいとおもしろく吹きて、聲はいとをかしてぞあはれにうたひける。かゝればこの女は倉にこもりながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

「さりとともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身をば知らずて」

とおもひ居り。男は女しあはねば、かくしありきつゝ、人の國にありてうたふ。

「いたづらにゆきては來ぬるものゆゑに見まくほしさに誘はれつゝ」。

水尾の御時なるべし。おほみやすんどころも染殿の後なり。五條の後とも、

むかし、男、津の國に知る所ありけるに、あにのおとゝとも達などひきゐて、難波のかたにいさけり。渚を見れば船どものあるを見て、

「難波津をけふをこそみつの浦ごとこれやこの世をうみわたる船」。

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

むかし、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の國へささらぎばかりにいさけり。河内の國生駒の山を見れば、くもりみはれみ、たちぬる雲やます。あしたより曇りてひる晴れたり。雪としろう木の末にふりたり。それを見て、かのゆく人のなかにたゞ一人よみける、

「きのふけふ雲のたちまひかくるふは花のはやしをうしとなりけり」。

昔、男、和泉の國へいさけり。津の國住吉の郡住吉の里住吉の濱をゆくに、いとおもしろければおろむつゝ、行く。ある人「住吉の濱をよめ」といふ。

「雁鳴きてさくのはなさく秋はあれどはるのうみべにすみよしの濱」

とよめりければ、皆人々よますなりにけり。

昔、男ありけり。その男、伊勢の國に狩の使にいさけるに、かのいせの齋宮なりける人のおや「常に使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、おやのいふことなりければ、いとねんごろにいたはりけり。且には狩に出し立て、やり、夕さはかへりつゝ、そこに來ざりけり。かくてねんごろにいたはりけり。一日といふ夜、男「わかれてあはむ」といふ。女もはたあはじとも思へらず。されど人めまげればえあはず。つかひざねとある人なれば遠くもやどさず。女のねやも近くありければ、女、人をまづめて、ねひとつばかりに男のもとにきたりけり。男、はた、ねられざりければ、とのかたを見出して臥せるに、月のおぼろなるに、人のかげするを見れば、ちひさきわらはを先に立て、人たてり。男いと嬉しくて、我がぬる所におて入りて、ねひとつより丑三つまであるに、まだ何事もかたらはぬに歸りにけり。男、いとかなしくてねすなりにけり。つとめていぶがしけれど、我が人をやるべきにしむあらねば、いと心もとなくて待ち居れば、明け離れてしばしあるに、女のもとよりことばはなくて、

「君やこしわれやゆきけむおもほえず夢かうつゝ、かねてかさめてか」。



男、いといたう泣きてよめる、

「かさくらす心のやみにまどひに夢うつとはこよひはさだめよ」とよみてやりて狩に出でぬ。野にありけど心はそらにて、こよひだに人しづめて、いとくわはむと思ふに、國の守、いつきのみやのかみかけたる、狩の使ありと聞きて夜ひと夜酒飲みしければ、もはらわひこともえせで、明けば尾張の國へたちなむとすれば、男も女も三十一人しれず血の涙を流せどえわはず。夜やうやうあけなむとするほどに、女のかたよりいだす盃のうらに、歌を書きて出したり。とりて見れば、

「かち人のわたれどぬれぬえにしあれば」

とかきて末はなし。その盃のうらに、ついまつのすみして歌の末をかきつく。

「またあふさかの關は越えなむ」

とて明くれば、尾張の國へ越えにけり。齋宮は、水尾の御時、文徳天皇の御むすめ、これたかのみこのいもうとなり三十一。

むかし、男、狩の使よりかへりさけるに、大淀のわたりに宿りていつきのみやのわらはべにいひかけ、る、

「みるめかるかたやいづこぞ棹さして我にをしへよあまのつりふね」。

むかし、男、伊勢の齋宮に御使にて参れりければ、かの宮にすぎごとといひける女、私事にて、「ちはやぶる神のいがきもこえぬべし大みや人の見まくほしさに」。

男伊勢へと、

「戀しくばきても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに」。

むかし、男、伊勢の國なりける女を、またはえ逢はで隣の國へいくとて、いみじううらみければ、女、

「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな」。

むかし、そこにはありと聞けど、せうそこをだにいふべくもあらぬ女のあたりをありきて男の思ひける、

「目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君にぞわりける」。

むかし、男、女をいたううらみて、

「岩根ふみかさなる山はへだてねどわはぬ日おほくこひわたるかな」。

むかし、男、伊勢の國にゐていきてあらむといひければ、女、

「大淀の濱に生ふてふみるからにこゝろはなぎぬかたらはねども」

といひて、ましてつれなかりければ、男、

「袖ぬれて蟻のかりはすわたつらみのみるをあふにてやまむとやする」。

女、

「岩間より生ふるみるめしつれなくばしほひしほみちかひもあらなむ」。

また男、



「なみだにぞぬれつゝしるる世の人のつらきこゝろは袖のしづくか」。

世にあふことかたき女になむ。

むかし、二條のきささの、まだ春宮のみやすん所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛づかさにはさぶらひける翁、人々の祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける、

「大はらやをしほの山嶽も今日こそは神代のこともおもひいづらめ」とて、心にも悲しとや思ひけむ。いかにおもひけむ秘傳知らずかし。

昔、田村の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、たかき子とまうすいまそかりけり。それうせ給ひて安祥寺にてみわざしけり。やよひのつごもりにしけり。人々さゝげもの奉りけり。奉り集めたるもの、ちさゝげばかりあり。そこばくのさゝげものを木の枝につけて堂の前に立てたれば、山もさららに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。それを右大將にいまそかりける藤原の常行と申すいまそかりて、講のをはるほどに歌よむ人々を召し集めて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右の馬のかみなりけるおきな、目はたがひながらよみける、

「山のみなうつりて今日に逢ふことは春のわかれをとふとなるべし」とよみけるを、今見ればよくもわらざりけり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

むかし、たかき子と申す女御おはしましけり。うせたまひて、な、七日のみわざ安祥寺にてしけり。右大將藤原の常行といふ人いまそかりけり。その御わざにまうで給ひて、かへさに山科の禪師のみこおはしますその山科の宮に瀧おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうで給うて、「年ごろよそにはつかうまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。今宵はこゝに候はむ」と申し給ふ。みこよろこび給うて、よるのおましの設けさせ給ふ。さるにかの大將いで、人にたばかり給ふやう「宮仕のはじめに、たいなはやはあるべき。三條のおほみゆきさせし時、紀の國の千里の濱にありけるとおもしるき石奉れりき。おほみゆきの後奉れりしかば、或人のみざうしの前の溝にすゑたりしを、鳥このみ給ふ君なり。この石を奉らむ」とのたまひて、みずぬんとねりしてとりにつかはす。いくばくもなくもて來ぬ。この石聞きしよりは見るはまされり。これをたゞに奉らばすゑなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。右の馬の頭なりける人のをなむ、青き苔をさざみて蒔繪のかたにこの歌をつけて奉りける、

「あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ」となむよめりける。

昔、うぢのなかにみこ生れ給へりけり。御うぶやに人々歌よみけり。御おほぢがたなりける翁のよめる、

「わが門に千ひろある蔭を植ゑつれば夏冬たれかかくれざるべし」。



これは貞敷のみこの時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言ゆきひらのむすめのはらなり。

昔、おとろへたる家に藤の花植ゑたる人ありけり。いとおもしろうさけりけり。やよひのつごもりはその日雨をばふるに、人のもとへ折りて奉るとてよめる、

「ぬれつゝぞしひて折りつるとしのうちに春はいくかもあらじとおもへば」。

昔、左のおほいまうちぎみいませかりけり。賀茂川のはとりに六條わたりに家をいとおもしろく造りて住み給ひけり。かみなつきのつごもりがた、菊の花うつろひてさかりなるに紅葉の千種に見ゆるをり、みこだちおはしまさせて、夜ひと夜酒飲みあそびて、夜明けもてゆくはどに、この殿のおもしろさをほむる歌よむ。そこにありけるかたぬおきな、板敷のしたにはひありき人にみなよませはて、よめる、

「鹽竈にいつか來にけむあさなぎにつりする船はこゝによらなむ」

となむよみける。みちの國にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々おほかりけり。わがみかと六十餘國の中に、鹽竈といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁さらんこをめで、鹽竈にいつか來にけむとはよめりける。

昔、惟喬のみこと申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を常にゐておはしましけり。時世へて久しくなりにければその人の名わすれにけり。狩はねんご

ろにもせで酒を飲みのみつゝやまと歌にかゝれけり。今狩する交野の渚の家その院の櫻こにおもしろし。その木のもとにおり居て、枝を折りてかざしにさして、かみなかしもみな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる、

「世の中に絶えて櫻のなかりせばはるのこゝろはのどけからまし」となむよみたりける。また、人の歌、

「ちればこそいと櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき」

とて、そのこのもとは立ちてかへるに日暮になりぬ。御供なる人酒をもたせて野よりいできたり、この酒を飲んでむとて、よき所をもとめ行くに天の川といふ所にいたりぬ。みこに、馬の頭おほみきまゐる。みこののたまひける、「交野をかりて、天の川のはとりに至るを題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける、

「かりくらししたなばたつめに宿からむ天のがはらにわれはきにけり」

ときこえければ、この歌をみこかへすがへすずし給うて、かへし、えしたまはず。紀の有常御供につかう奉れり。それがかへし、

「一年にひとたびきまます君までばやどかす人もあらじとぞ思ふ」。

かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒のみ物がたりして、あるじのみこ酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる、

「わかなくにまださき月の隠るゝか山のはにげて入れずもあらなむ」。



みこに代り奉りて紀の有常、

「おしなべて峰もたひらになりな、む山の端なくば月もいらじを」。

昔、水無瀬に通ひたまひし惟喬のみこ、例の狩しにおはします。供に馬の頭なるおきなつかうまつれり。日ごろ經て宮にかへり給うけり。御おくりしてとくいなむと思ふに、大みきたまひ祿たまはむとて遣さるりけり。この馬の頭心もとながりて、

「枕とて草ひきむすぶこともせじあきの夜とだにたのまれなくに」

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。みこ大殿籠らであかし給ひてけり。かくしつづまうで仕うまつりけるを、思ひの外に御ぐしおろさせ給ひてけり。むつきにをがみ奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いとたかし。強ひてみむろにまうで、拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、や、久しく候ひて、いにしへの事など思ひ出てきこえ得けり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとにもありければ、え候はで夕暮にかへるとて、

「わすれては夢かとおもふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは」  
とてなむなく來にける。

昔、男ありけり。身はいやしなながら、母亦むみやになりける。その母長岡といふ所にすみ給ひけり。子は京に宮づかへしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。ひとり子にさへありければ、いと悲しうし給ひけり。さる程に志はずばかりに、とみの事とて御文あり。驚き

て見れば、歌あり。

「老いぬればさらぬ別の世ありといへばいよいよみまくほしき君かな」

となむありける。これを見て、うまにも乗りあへず。まゐるとてうち泣きて、みちすがら思ひける、

「世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため」。

昔、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御ぐしおろし給うてけり。むつきには必ずまうでけり。おほやけの宮仕しければ常にはえまうです。されどもとの心失はでまうでけるになむありける。昔仕うまつりし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集まりて、むつきなれば、ことだつとて大みきたまひけり。雪こぼすがごと降りてひぬもすに止まず。みな人酔ひて、雪に降りこめられたりといふを題にて歌ありけり。

「おもへども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我がこゝろなる」

とよめりければ、みこいといたうわはれがり給うて、御ぞ脱ぎてたまへりけり。  
むかし、いとわかき男、わかき女をあひいへりけり。おのおの親ありければ、つゝみていひさして止みにけり。年ごろへて女のもとに、なほこゝろざしはたさむとや思ひけむ、男歌をなむよみてやれりけり。いかにおもひけむ、

「今までにわすれぬ人は世にもあらじおのがさまま年のへぬれば」  
とて止みにけり。男も女も、あひはなれぬ宮仕にあむいでにける。



昔、男、津の國うばらの郡あしやの里にしるよししていききて住みけり。むかしの歌に、

「蘆の屋のなだのしほやさいとまなみつけの小櫛もさゝすきにけり」

とよみけるはこの里をよめるなりけり。こゝをなむ蘆屋のなだとはいひける。この男、なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府のすけども集まりきにけり。この男のこのかみも衛府のかみなりけり。その家の前の海のはとりに遊びあちきて「いざこの山のかみにありといふ布引の瀧見にのぼらむ」といひてのぼりて見るに、その瀧ものよりことなり。高さ二十丈廣さ五丈ばかりなる石のおもてに、まらぎぬにいはを包めらむやうになむありける。さる瀧のかみに、わらふたのおほきさしてさし出でたる石あり。この石のうへに走りかゝる水は、せうかうじ、栗の大さにてこぼれ落つ。そこなる人に、みな瀧の歌よます。かの衛府のかみまづよむ。

「わが世をばけふかあすかと待つかひの涙のたきといづれたかけむ」。

「ぬきみだる人こそあるらししら玉のまなくも散るか袖のせばきに」

とよめりければ、かたへの人笑ふことにやありけむ、この歌にめで、止みにけり。かへりくる道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前をくるに日暮れぬ。やどりの方を見やればあまのいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ。

「はる、夜のほしか川邊の螢かもわがすむかたのあまのたく火か」

とよみて家にかへりきぬ。その夜南の風吹きて浪いとたかし。つとめてその家のめのこともいで、浮みるの浪によせられたるをひろひて家の内にもてきぬ。女がたよりそのみるをたかつきに盛りて、かしはをおほひていだしたり。その柏にかくかけり。

「わたつ海のかざしにさすといはふ藻も君がためには惜まざりけり」。

田舎人の歌にては、あまれりやたらすや。

むかし、いとわかきにはあらぬこれかれ友たちども集まりて月を見てそれがなかにひとり、昔、賤しからぬ男、我よりはまさりたる人を思ひかけて年経ける。

「人しれずわれ戀ひ死なばあぢきまきいづれの神になき名おほせむ」。

むかし、男、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれと思ひけむ、「さらば明日物さしにてもといへりけるを、かぎりなく嬉しく、また疑はしかりければ、おもしろかりける櫻につけて、

「さくら花けふこそかくは匂ふともあなたのみがたあすの夜のこと」といふ心ばへもあるべし。

むかし、月日のゆくをさへなげく男、やよひのつごもりがたに、

「をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなりにけるかな」。

聞き知る人もなしや結。



むかし、男、戀しさに來つゝかへれど、女にせうそこをだにえせでよめる、  
「あしへ漕ぐ棚なし小ぶねいくそたびゆきかへるらむ知る人もなみ」。

むかし、男、身は賤しくていと赤き人を想ひかけたりけり。少しも頼みぬべきさまにやありけむ、臥しておもひ起きておもひ、おもひわびてよめる、

「おふなおふな思ひはすべしなごへなくたかき賤しきくるしかりけり」。

むかしもかゝることは世のことわりによりやありけむ。  
昔、男女ありけり。いかゞありけむ、その男すまずなりにけり。のちに男ありけれど、子あるなかなりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。女かたに繪かくひとなりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすとして、一日二日おこせざりけり。かの男いとつらく、「おのが聞ゆることをば今まで給はぬはことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、よみてやりける、時は秋になむありける。

「秋の夜は春日わするゝものなれやかすみにさりやちへまざるらむ」となむよめりける。女かへし、

「千々の秋ひとつの春にむかはめやもみぢも花もともにこそ散れ」。

昔、二條の後に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを常に見かはしてよばひわたりけり。「いかでものをしにだに對面して、おぼつかなく思ひつめたること少しはるかさむ」といひければ、女いと忍びて物どしにわひにけり。ものがたりなどして、男、

「ひこぼしにこひはまさりぬ天の川へだつるせきを今はやめてよ」。

この歌にめで、逢ひにけり。

むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。いはきにしあらねば心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。その頃みなつきのもちばかりなりければ、女身にかさ一つ二ついできにけり。女いひおこせたる、「今は何のこゝろもなし。身にかさも一つ二ついできにけり。時もいとあつし。少し秋風吹き立ちなむとき必ずあはむ」といへりけり。秋まつころほひにこゝかしこよりこの人のもとへいなむずなりとてくせちいできにけり。さりければこの女のせうと、俄にむかへにきたりければ、女かへではつ紅葉をひろはせて、歌をよみて書きつけておこせたり。

「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ」

とかきおきて、「かしこより人おこせばこれをやれ」とていぬ。さてやがて後つひにけふまでしらす、善くてやあるらむ、悪しくてやあるらむ、いにし所も知らず。かの男は天の逆手をうちてなむのろひをる。「むくつけきこと、人ののろひ事は負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ、今こそは見め」とぞいふなる。

昔、堀河のおほいまうちぎみと申すいませかりけり。四十の賀九條の家にてせられける日、中將なりけるおきな、

「さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに」。



昔、おほきおほいさらちきみときこゆるおはしけり。つかうまつる男ながつきばかりに、梅のつくりえだに雉をつけて奉るとて、

「我がたのむ君がためにとをる花はときしもわかぬものにぞありける」  
とよみて奉りたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿たまへりけり。

昔、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の、したすだれよりほのかに見えければ、中將なりける男のよみてやりける、

「見ずもわらず見せぬ人の戀しくはあやなく今日やながめくらさむ」  
かへし、

「知るしらぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ」  
のちは誰としりにけり。

むかし、男、後涼殿のはざまをわたりければ、あるやんごとなき人の御局より「忘草を忍草とやいふ」とてさし出させ給へりければ、たまはりて、

「わすれ草生ふる野邊とは見るらめどこはしのぶなりのちもたのまむ」。

昔、左兵衛のかみなりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞き、うへにありける人々飲まむとてきたりけり。左中辨藤原のまさ近といふ人をなむ、まらうどざねにて、其日はあるじまうけしたりける。なさけある人にてかめに花をさせり。その花のなかにあやしき藤のはなありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを題にて

よむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけ給ふと聞きてきたりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければすまひけれど、強ひてよませければかくなむ。

「咲く花のまたにかくる、人おほみありしにまさる藤のかけかも」。

「などかくしもよむ」といひければ「おほきおとりの榮華の盛にみまそかりて、藤氏の殊に榮ゆるを思ひてよめる」となむいひける。皆人そしらすなりにけり。

昔、男ありけり。歌はよまざりけれど世の中を思ひしりたりけり。あてなる女の尼になりて、世の中をおもひらんじて、京にもあらず遙なる山里にすみけり。もとまたしかりければよみてやりける、

「背くとて雲には乗らぬものなれど世のうきことをよそになるてふ」  
となむいひやりける。齋宮の宮なり付註

昔、男ありけり。いとまめにさちやうにてあだなる心なかりけり。深草の帝になむつかうまつりける。心あやまりやしたりけむ、みこたちのつかひ給ひけるひとをあひいへりけり。さてあしたにいひやる。

「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」  
となむよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。

むかし、ことなる事なくて尼になれりける人ありけり。かたちをやつしたれど物やゆかしか



りけむ、賀茂の祭見にいでありけるを、男歌よみてやる、

「世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよもたのまるゝかな」。

これは齋宮の物見給ひけるくるまにかくきこえたりければ、見さしてかへり給ひにけりとなむ。

むかし、男「かくては死ぬべし」といひやりたりければ、女、

「しらつゆはけなばけなむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじを」

といへりければ、ねたしと思ひけれど、志はいやまさりけり。

むかし、男、みこたちの逍遙したまふ所にまうで、立田川のはとりにて、

「ちはやぶる神代もさかすたつた川からくれなるに水くゝるとば」。

むかし、あてなる男ありけり。そのをとこのもとなりけるひとを内記なる藤原の敏行といふ

人よばひけり。されど若ければ文もをさをさしからず、ことばもいひ知らず、いはむや歌は

よまさりければ、かのあるじなる人、案を書きてかゝせてやりけり。めでまどひにけり。さて

男のよめる。

「つれづれのながめにまさる涙川そでのみひぢて逢ふよしもなし」。

かへし、例の男、女にかはりて、

「あさみこそ袖はひづらめなみだ川身さへ流るときかばたのまむ」

といへりければ、男といたうめで、いま、はでまきてはふばこに入れもてありとなむいふ

なる。男文おこせたり。えて後の事なりけり。「雨の降りぬべきになむ見煩ひ侍る。身さいはひあらばこの雨は降らじ」といへりければ、例の男、女に代りてよみてやらす。

「かずかずに思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」

とよみてやれりければ、篋も笠もとりあへでしと、に濡れてまどひ來にけり。

むかし、女、人のこゝろをうらみて、

「風吹けばとはになみこそ岩なれやわがころも手のかわくときなき」

と、常のことぐさにいひけるを、聞きおぼびける男、

「よひごとにかはづのあまたなく田には水こそまされ雨はふらねど」。

昔、男、友だちの人を失へるか許にやりける、

「花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきにこひむとか見し」。

昔、男、みそかにかよふ女ありけり。それがもとより、「今宵夢になむ見え給ひつる」といへりければ、男、

「思ひあまりいでにし魂のあるならむ夜深く見えばたまむすびせよ」。

昔、男、やんどとなき女のもとに、なくなりけるをとぶらふやうにていひやりける、

「いにしへはありもやしけむ今ぞしるまだ見ぬ人をこふるものとは」。

かへし、

「下紐のしるしとするもとけなくにかたるかどとはこひすぞあるべき」。



又かへし、

「こひしとはさらにもいはじ下紐のとけむをひとはそれと知らなむ」。

むかし、男、ねんごろにいひ契れる女の、ことざまになりければ、

「須磨のあまの鹽やくけぶり風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり」。

むかし、男、やもめにて居て、

「なが、らぬ命のはどにわする、はいかにみじかさこゝろなるらむ」。

昔、仁和の帝、せり川に行幸したまひける時になまおきなの今はさること似げなく思ひけれ

ど、もとつきにけることなれば、大鷹の鷹飼にて候はせ給ひける、摺かりぎぬの袂に鶴のかたをつくりて書きつけゝる、

「翁さび人などがめそかりごろもけふばかりとぞたづもなくなる」。

おはやけの御氣色あしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりや。

昔、みちの國にて男女すみけり。男「京へいなむ」といふ。この女いと悲しうて、馬のはなむけをだにせむとて、興の井都嶋といふ所にて酒のませてよめる、

「おきのゐて身を焼くよりもかなしきは都島へのわかれなりけり」。

とよめりけるに、めでとまりにけり。

「浪間より見ゆるこ島の濱びさしひさしくなりぬ君にあひみで。

何事も皆よくなほりにけり」となむいひやりける。

昔、みかど、住吉に行幸したまひけり。

「我れ見てもひさしくなりぬ住吉のさしのひめ松いく代へぬらむ」。

おほん神げぎやうしたまひて、

「むつまじと君はしらなみ瑞垣の久しき世よりいはひそめてき」。

昔、男、久しく音もせで忘るゝ心もなし。「参り來む」といへりければ、女、

「玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬこゝろのうれしげもなし」。

むかし、女のあだなる男のかたみとて、おきたるものどもを見て、

「かたみこそ今はわたなれこれなくば忘るゝときもあらましものを」

昔、男、女のまだ世にへずとおぼえたるが、人の御もとにしのびて、物聞えて後ほどへて、

「近江なる筑摩のまつりとくせなむつれなき人のなべのかすみむ」

昔、男、梅壺より雨にぬれて人のまかり出づるを見て、

「うぐひすの花をぬふてふ笠もがなぬるめる人にきせてかへさむ」。

かへし、

「鶯のはなをぬふてふかさはいなおもひを告げよほしてかへさむ」。

昔、男、契れることあやまれる人に、



「山城の井でのたま水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり」といひやれど、しらへもせず。

昔、男ありけり。深草にすみける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かゝる歌をよみけり。

「年を経てすみこしさをいで、いなばいと、深草野とやなりなむ」女、かへし。

「野とならば鶉となりてなきをらむかりにだにやは君はござらむ」とよめりけるにめで、ゆかむと思ふ心なくなりけり。

昔、男、いかなりけることを思ひけるをりにか、よめる、

「おもふこといはでぞたいに止みぬべき我とひとしき人しなれば」。

昔、男わづらひて、心ち死ぬべくおぼえければ、

「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを」。

### 伊勢物語 終

### 堤中納言物語

#### 花櫻折る少將

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ちかへらむも遠きはどなれば、やうやう行くに、小家などにれい音なふものも聞えず、隈なき月に、所々の花の木ども、ひとへにまがひぬべくかすみたり。今少し過ぎて見つる所よりも、おもしろく過ぎがたき心ちして、

「そなたへと行きもやられず花櫻にはふ木かげにたび立たれつ」とうちずんじて、早くこゝに物言ひし人ありと思ひ出で、立ちやすらふに、ついでくづれより、白きものゝいたうしはぶきつゝ、出づめり。おはれげにわれ人げなき處なれば、こゝかしこのぞけど咎むる人なし。このありつるものをよびて「此所に住み給ひし人はいまだおはすや。山人に物聞えむといふ人ありと、物せよ」といへば「その御方は此所にもおはしませず。何とかいふ處になむ、住ませ給ふ」ときこえつれば、おはれのことや、尼などにやなりたるらむとうしろめたくて、「かのみつとほに逢はじや」などほゝゑみてのたまふほどに、妻戸をやはらかいはなつ音すなり。をのことも少しやりて、すいがいのつらなる、むらすゝの繁き下に隠れて見れば、「少納言の君こそわけやしぬらむ。出で、見給へ」といふ。よきほどなるわらはのやうだいを



かしげなる、いたうなえ過ぎて、とのぬすがたなる蘇芳にやあらむ、つやゝかなるあこめに、うちすきたる髪の手すそ小袿にはえてなまめかし。月のわかき方に、扇をさしかくして、「月と花とを」と口ずさみて、花の方へ歩みくるに、驚かさまほしけれど、暫し見れば、おとなしき人の「みつすゑはなか今まで起きぬぞ。辨の君こそこゝなりつる、参り給へ」といふは物へまうづるなるべし。ありつるわらははとまるあるべし。佗しくこそ覺ゆれ。「さばれ唯御供に参りて、近からむ所に居てみ社へは参らじ」などいへば、「物ぐるはしや」などいふ。皆去立て、五六人ぞある。おるゝ程もいと惱ましげに、これぞしうなるらむと見ゆるをよく見れば、きぬ脱ぎかけたるやうだい、さゝやかにいみじうこめいたり。物言ひたるも、らうたきものゝいういうしく聞こゆ。嬉しくも見つるかなと思ふに、やうやう明くれば歸り給ひぬ。ひさしわかる程に起き給ひて、よべの所にふみ書き給ふ。「いみじう深う侍りつるも、ことわりなるべきみけしきに出で侍りぬるは、つらさもいかにばかり」など、青きうすえふに柳につけて、「さらざりしいにしへよりも青柳のいとゞ今朝はおもひみだるゝ」とて遣り給へり。かへりごとめやすく見ゆ。

「かけざりしかたにぞはへし糸なれば解くと見し間にまた亂れつゝ」とあるを見給ふほどに、源中將、兵衛佐、小弓もたせておはしたり。「よべはいづくに隠れ給へりしぞ。うち御遊ありて召し、かども、見つけたてまつらでこそ」とのたまへば、「此所にこそ侍りしを、怪しかりける事かな」とのたまふ。花の木どもの咲きみだれたる、いと多く散るを見て、

「あかで散る花みるをりはひたみちに」とあれば、佐、

「わが身にかつはよわりにしかな」とのたまふ。中將の君、「さらばかひなくや」とて、

「散る花ををしみとめても君なくばたれにか見せむやどのさくらを」とのたまふ。戯ぶれつゝ諸共に出づ。かの見つる處尋ねばやとおぼす。ゆふかた殿にまうで給ひて、暮れゆくほどの空、いたうかすみこめて、花のいとおもしろく散り亂るゝ夕ばえを、御簾巻き上げてながめ出で給へる御かたち、いはむかたなく光みちて、花のにはひも、むげにけおさるゝ心ちぞする。琵琶を黄鐘調にしらべて、いとどのどやかにをかしく弾きたまふ御手つきなど、限なき女もかくはえあらじと見ゆ。このかたの人々召し出で、さまざまうち合せつゝ遊び給ふ。みつする、「いかゞ女のめでたてまつらざらむ。近衛のみかどわたりにこそ、めでたくひく人われ。なにごとにもいとゆゑづきてぞ見ゆる」と、おのがどち言ふを聞きたまひて、「いづれこの櫻多くて荒れたるやと、わらはいかでか見し。我に聞かせよ」とのたまへば、「猶たよりありて、罷りたりしになむ」と申せば、「さる所は見しぞ。こまかに語れ」とのたまふ。かの見しわらははに物いふありけり、「こ源中納言のむすめになむ。まことにをかしげにぞ侍るなる。かの御をぢの大將なむ、迎へて内に奉らむと申すなる」と申せば、「さらざらむ光に、猶たばかれ」とのたまふ。「さ思ひ侍れどいかでか」とて立ちぬ。夕さりかのわらははゝものいとよくいふものにて、とよくかたらふ。「大將殿の常に煩はしく聞え給へば、人の御文傳ふることだに、をばうへいみじくのたまふものを」と、同じ處にて、めでたからむ事などのたまふ



うち、殊に責むれば、若き人の思ひやりすくなきにや、「善き折あらば今」といふ。御文はことさらに、けしき見せじとて傳へず。みつすゑ参りて、「言ひ趣けて侍る。今宵ぞよく侍るべき」と申せば、喜び給ひて少し夜更けておはす。みつすゑが車にておはしぬ。はるばるけしき見ありきて入れ奉りつ。火は物のうしろへ取りやりたればはのかなるに、も屋にいとちひさやかにてうつ臥し給へるを、かきいだきて乗せたてまつり給ひて、車を急ぎてやるに、「こは何ぞ何ぞ」とて、心得ずあさましうおぼさる。中將のめのと聞き給ひて「をばうへのうしろめたがり給ひて、臥し給へるになむ。もとよりちひさくおはしけるを、老い給ひて、法師にさへなり給へば、頭さむくて、おんぞを引きかづきて臥し給へるなむそれと覺えけるもことわりなり。車よするほどにふるびたる聲にて、「いなやこはたれぞ」とのたまふ。その後いかゞ、をこがましうこそ、御かたちはかぎりなかりけれど。

このついで

春のものとしてながめさせ給ふ晝つ方、臺盤所なる人々「宰相中將こそ参り給ふなれ。れいの御にはひ、いとしく」などいふほどに、つゐ給ひて「よべより殿に候ひしほどに、やがて御使になむ。ひんがしのたいの紅梅の下にうつさせ給ひしたきもの、今日のつれづれに試みさせ給ふとてなむ」として、えならぬ技に、しろがねの壺二つ附け給へり。中納言の君の、みちやらの内に参らせ給ひて、御火取あまたして、若き人々やがて試みさせ給ひて、少しさしのぞかせ給ひて、みちやらのそばのおましにかたはらふさせ給へり。紅梅の織物のおんぞに、

たゝなはり御ぐしのすそばかり見えたるに、これかれそこはかとなき物がたり、忍びやかにして暫し居給ふ。中將の君、この御ひとりのついでに、あはれと思ひて「人の語りしこそ、思ひ出でられ侍れ」とのまたへば、おとなだつ宰相の君「何事にか侍らむ。つれづれに思しめされて侍るに、申させ給へ」とそゝのかせば「さらばつい給はむとやする」とて「ある君達に忍びて通ふ人やありけむ。いと美しくしきちごさへ出で來にければ、哀れとおもひ聞えながら、さびしき片つ方やありけむ、たえまがちにてある程に、思ひも忘れず、いみじうしたふがうつくしうて、時々はある所に渡しなどするをも、今なども言はでありしを、ほど經て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、珍らしくや思ひけむ、かき撫でつゝ見居たりしを、え立ちとまらぬ事ありて出づるをならひにければ、例のいたう慕ふがあはれにおぼえて、暫し立ちとまりて、さらばいざよとて、掻き抱きて出でけるを、いと心苦しげに見おくりて、前なる一人を手まさぐりにして、

子だにかくあくがれ出でばたきものゝひとりやいととおもひこがれむと忍びやかにいふを、屏風のうしろにて聞きて、いみじう哀におぼえければ、ちごもかへして、そのまゝになむられにし」と、いかばかり哀と思ふらむと、「おぼろげならじ」と言ひしかど、誰とも言はでいみじ、笑ひまぎらはしてこそ止みにしか。「いづら、今は中納言の君」とのまたへば、「あいなき事のついでをも聞えさせてけるかな。あはれ只今の事は、聞えさせ侍りなむかし」とて「こぞの秋ぞるばかりに、清水に籠りて侍りしに、かたはらに屏風ばかりを、ものはかな



げに立てたるつばねの、にはひいとをかしう、人すくななるけはひして、折々うち泣くけはひなどしつゝ、行ふを、誰ならむと聞き侍りしに、明日出でなむとの夕つ方、風いと荒らかに吹きて、木の葉はろほると、谷のかたざまにくづれ、色濃き紅葉など、つばねの前にはひまなく散り敷きたるを、このなかへだての屏風のつらに寄りて、こゝにもながめ侍りしかば、いみじうしのびやかに、

いとふ身はつれなきものをうきことを嵐にちれる木の葉ありけり。風の前なると聞ゆべき程にもなく、聞きつけて侍りしほどの、まことにいとあはれに覺え侍りながら、さすがにふといらへにくゝ、つゝましくこそ止み侍りしか」と言へば、「いとさしもすこし給はざりけむとこそ覺ゆれ。さてまことならば口惜しきは御物つゝみありや。いづら少將の君」とのたまへば「さかしう物も聞えざりつるを」と言ひながら「をばなる人の、ひんがし山わたりに行ひて侍りしに、暫しまたひて侍りしかば、あるじの尼君の方に痛う口惜しからぬ人々のけはひ、敷多志侍りしを紛らはして人に忍ぶにやと見え侍りしも隔てのけはひのいとけ高う唯人とはおぼえ侍らざりしに、ゆかしうて、ものはかなきさうじの紙のあなたへ出で、のぞき侍りしかば、すだれに几帳をへて、清げなる法師二三人ばかり、すべていみじくをかしげなりし人、几帳のつらに添ひ臥して、この居たる法師近くよびて物いふ。何事ならむと聞き分くべき程にもあらねど、尼にならむと語らふけしきにやと見ゆるに、法師やすらふけしきなれど、なほなほせちにいふめれば、さらばとて、几帳のはころびより、櫛のはこのふ

たに、たけに一尺ばかり餘りたるにやと見ゆる、髪すぢ、すそつさいみじう美しくさを、わげいれて押しいだす。傍に今少し若やかなる人の、十四五ばかりにやと見ゆる、髪たけに四五寸ばかりあまりて見ゆる、うす色のこまやかなる一かさねかいねりなどひきかさねて、顔に袖をおしあて、いみじうあく。弟なるべしとぞ推し量られ侍りし。又若き人々二三人ばかり、薄色の裳ひきかけつゝ居たるも、いみじうせきあへぬけしきなり。めのとだつ人などはなきにやとあはれにおぼえ侍りて扇のつまにいとちひさく、

おぼつかならうき世そむくは誰とだに知らずながらもぬる、袖かなとかきて、幼き人のさむらひしてやりて侍りしかば、この弟にやと見えつる人を書くめる。さて取らせられたれば持て來たり。かささまゆゑゆるしう、をかしかりしを見しにこそ、くやしうなりて「などいふほどに、うへ渡らせたまふ御氣色なれば、まぎれて少將の君も隠れにけりとぞ。

蟲めづる姫君

蝶めづる姫君の住み給ふかたはらに、あせちの大納言の御むすめ、心にくゝなべてならぬさまに、親だちかしづき給ふ事限なし。この姫君ののたまふ事「人々の花や蝶やとめづるこそ、はかなうあやしけれ。人はまことありはんぢ尋ねたるこそ、心ばへをかしけれ」とてよろづ蟲の恐ろしげなるを取りあつめて、これが成らむさまを見むとて、さまざまなるこばこどもに入れさせ給ふ。中にもかは蟲の、心深きさましたるこそ心にくけれとて、あけくれはみ、はさみをして、手のうちにそへ伏せてまほり給ふ。若き人々はおぢ惑ひければ、をのわらは



の物おぢせず、いふかひなきを召し寄せて、箱の蟲ども取らせ、名を問ひ聞き、今新しきには名をつけてけうじ給へば、すべてつくるふ所あるはわろしとて、まゆ更に抜き給はず、齒黒更にうるさしたなしとてつけ給はず、いとしろらかにゑみつゝ、この蟲どもをあしたゆふべにわいし給ふ。人々おぢわびて逃ぐれば、その御方は、いと怪しくなむのしりける。かくおづる人をば「けしからずばうぞくなり」とていとまゆぐるにてなむにらみ給ひけるに、いと心ちなむ感ひける。親だちはいと怪しく、さまことにおはするこそとおぼしけれど、おぼし取りたる事ぞあらむや、怪しきことぞと思ひて、問ゆる事は深くさはらへ給へば、いとぞかしこきやと、これをもいと耻かしとおぼしたり。「さはありとも、お恥とぎ、わやしや。人はみめをかしき事をこそ好むなれ。むくつけいなるかは蟲をけらすなると、世の人の聞かむも、いと怪し」と聞え給へば「苦しからず。よろづの事どもを尋ねて、すゑを見ればこそ事はゆゑあれ。いとをさなき事なり。かは蟲の蝶とはなるなり」。そのさまのなり出づるを取り出で、見せ給へり。「きぬとて人の着るも、蠶のまだ羽つかぬにまいたし、蝶になりぬれば、いと袖にて、あだになりぬるをや」との給ふに、言ひ返すべうもあらずあさまし。さすがに親たちにもさしむかひ給はず「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」とわんど給へり。も屋のすだれを少し巻き上げて、几帳をへて立て、かくさかしく言ひいだし給ふなりけり。これを若き人々聞きて、いみじくさがし給へど、心ちこそ感へ、この御遊び物よ、いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむとて、兵衛といふ人、

「いかで我とかむかたないてし黠なるかは蟲ながら見るわざはせし」といへばこだいふといふ人笑ひて、

「うらやまし花や蝶やといふめれどかはむしくさき世をも見るかな」などいひて笑へば、「からしや。まゆはしもかは蟲だちためり。さてはくさきこそ皮のむけたるにやあらむ」とて左近といふ人、

「冬くればころもたのもし寒くともかはむしおほく見ゆるあたりは。きぬなど着ずともわらむかし」などいひあへるをとかがしき女聞きて「わかうと達は何事いひおはさうするぞ。蝶めで給ふなる人もはらめでたうも覺えず。けしからずこそ覺ゆれ。さて又かは蟲並べ、蝶といふ人ありなむやは。唯それがぬくるぞかし。その程を尋ねてし給ふぞかし。それこそ心深けれ。蝶は捕ふれば手にさりつきていとむづかしきものぞかし。又蝶は捕ふれば、わらはやみせさすなり。あなゆゝし」といふにいとくさ増りていひあへり。この蟲ども捕ふるわらはへにはをかしき物、かれがほしがる物を賜へば、さまさまに恐しげなる蟲どもを取り集めて奉る。かは蟲は毛などはをかしげなれど、覺えねばさうさうして、いぼじり、かたつぶりなどを取り集めて、歌ひのしらせて聞かせ給ひて、我も聲をわけて「かたつぶりのつもの、わらそふや」などといふとをすんじ給ふ。わらはへの名は例のやうなるはわびしとて蟲の名をなむつけ給ひたりける。けらを、ひさまろ、いなかだち、いなごまろ、あまひこなむなどつけて召しつどひ給ひける。かゝる事世に聞えて、いとうたてある事をいふ中に、あ



るかんだちめの御聲、うちはやりて物おぢせず、わいぎやうつきたるわり。この姫君の事を聞きて「さりともこれには恐ぢなむ」とて帯のはしのいとをかしげなるに、くちなはのかたをいみじく似せて、動くべきさまなどしつけて、いろこだちたる懸け袋に入れて、結び附けたる文を見れば、

「はふはふも君があたりにしたがはむ長きころのかぎりなき身は」とあるを、何心なく御まへに持て参りて「袋などあくるだに怪しく重たきかな」とて、ひきあけたれば、くちなは首をもたげたり。人々心まどはしてのしるに、君はいとのどかにて「なもあみだぶつなもあみだぶつ」とて「さうせん親ならむ、な騒ぎそとうちわな、かし、かは、かやうになまめかしきうちしも、けちえむに思はむぞ、怪しき心なるや」とうちつぶやきて、近く引き寄せ給ふもさすがに恐ろしくおぼえ給ひければ、たちどころるどころ蝶の如く、せみごゑにのたまふ聲の、いみじうをかしければ、人々逃げさわぎて笑ひいれば、まかじかと聞ゆ。「いとあさましく、むくつけき事をも聞くわざかな。さるもの、あるを見るみる、皆立ちぬらむ事ぞ怪しきや」とておとゝ太刀をひきさげもて走りたり。よく見給へばいみじうよく似せて作り給へりければ手に取り持ちて、「いみじう物よくしける人かなとかしこがり譽め給ふと聞きてしたるなめり。返事をして、早く遣り給ひてよ」とて渡り給ひぬ。人々作りたるを聞き、「けしからぬわざしける人かな」と言ひにくみ、「返事せずば覺束なかりなむ」とて、いとこはくすくよかなる紙に書きたまふ。かなはまだかき給はざりければ、かたかんなに、

「ちぎりあらばよき極樂に行きあはむまつはれにくし蟲のすがたは。ふくちの園に」とある。右馬のすけ見給ひていと珍らかにさま殊なる文かなと思ひて、いかで見してしがなと思ひて、中將と言ひ合せて、怪しき女どものすがたを作りて、按察使の大納言の出で給へるほどにおはして、姫君の住み給ふ方の、北おもてのたてじとみのもとにて見給へば、をのわらはの、異なることなき草木どもにたゝすみありきて、さていふやうは「この木にすべていくらもありくはいとをかしきものかな。これ御覽せよ」とて、すだれを引き上げて、「いとおもしろきかは蟲こそ候へ」といへば、さかしきこゑにて、「いとけうあることかな。こちもてこと」のたまへば、「取り別つべくも侍らず。唯こゝもとにて御覽せよ」といへば、荒らかに踏みて出づ。すだれを押しはりて枝を見はり給ふを見れば、頭へさぬ着あげて、髪もさがりば清げにはあれどけづりつくるはねばにや、まふげに見ゆるを、眉いとくろく花々とあざやかに、涼しげに見えたり。口つきもあひぎやうづきて清げなれど齒黒つけねばいとよづかず、けさうじたらば清げにはありぬべし、心うくもあるかなと覺ゆ。かくまでやつしたれど見にく、などはあらで、いとさまことに、あざやかにけだかく、花やかなるさまぞわたらしき。練色の綾の袴一かさね、はたおりめのこうちき一かさね白き袴を好みてき給へり。この蟲をいとよく見むと思ひて、さし出で、「あなめでたや。日にあぶらるゝが苦しければ、こなたさまに來るなり。これをひとつもおとさでおひおこせよ童へ」との給へば、突きおとせば、はらはらと落つ。白き扇の墨ぐろに、まなの手習ひしたるをさし出で、「これに拾ひ入れよ」とのた



まへばわらはへ取りいづる。みな君達もあさましう、さいなんあるわたり、こよなくもわるかなと思ひて、この人を思ひて、いみじと君は見給ふ。わらはのたてる怪しと見て、「かのためとみのもとに添ひて、清げなる男のさすがに姿つき怪しげなるこそ、のぞき立てれ」と言へば、この大夫の君といふ「あないみじ。おまへには例の蟲けうじ給ふとて、わらはにやおはすらむ。告げ奉らむ」とてまゐれば、例のすだれのおはして、かは蟲のしりて、拂ひおとさせ給ふ。いと恐ろしければ近くは寄らで「入らせ給へかし。あらはなり」と聞えさすれば、これを制せむと思ひていふとおぼえて「それさばれ、物耻しからず」とのたまへば、「あなこゝろう、そらごと、おぼしめすか。たてじとみのつらに、いと耻しげなる人侍るなるを、おくに御覽せよ」といへば、「けらを、かして出で見て」との給へば、立ち走りていき「まことに侍るなりけり」と申せば、立ち走り、かは蟲は拾ひ入れて、走り入り給ひぬ。たけだちよきほどに、髪もうちさばかりにていと多かり。すそもそがねば、ふさやかならぬと、とのほりてなかなか美しくしげなり。かくまであらぬも、世の常の人さまはひもてつけぬは口惜しうやはある、まことにうとましかるべきさまなれど、いとさよげにはたかう煩はしきけを異なるべき、あなくちをし、などかいとむくつけき心ならむ、かばかりなるさまをとおぼす。右馬のすけ、唯歸らむはいとさうぞうし、見けりとだに知らせむとて、たう紙に草の汗して、

「かはむしの毛深きさまを見つるよりとりもちてのみ守るべきかな」とて扇して打ち叩

き給へば、わらはへ出で來たり。「これ奉れ」とて取らすれば、大夫の君といふ人、「このかしこに立ち給へる人のおまへに奉れとて」と言へば、取りて「あないみじ。右馬のすけのしわざにこそあめれ。心うげなる蟲をしもけうじ給へる御顔を見給ひつらむよ」とてささま聞ゆれば、「出で給ふ事は思ひとけば物なむ耻かしからぬ。人はいめまぼろしのやうなる世に、誰かとまりて悪しきことをも見、善きことをも見給ふべき」とのたまへば、言ふかひなくて、若き人々、おのがじ、心憂がりあへり。この人々、かへらでやはあるとて、暫し立ち給へれどわらはへをも皆呼び入れて、「心憂し」といひあへり。或人々は、心づきたるもあはるべし。さすがにいとほしとて

「人に似ぬこゝろのうちかはかは蟲の名を問ひてこそいはまほしけれ」。右馬のすけ、

「かは蟲にまざるまゆの毛の末にあたるばかりの人はなきかな」と言ひわびてかへりぬめり。二の巻にあるべし。

ほどほどの懸想

祭の頃は、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ。怪しき小いへのはじとみも葵などかざして心地よげなり。わらはへのあこめ袴清げに着てささまの物忌ども附けけさうして、我も劣らじといとみたる氣色どもにて、行き違ふはをかしく見ゆるを、ましてそのきはの小舎人隨身などは、殊に思ひ答むるもことわりなり。とりどりに思ひわけつゝ、物言ひ戯るゝも、なにかかりはかばかしき事ならじかしと數多見ゆる中に、いづくにかあらむ、うず色着たる髪は



きはりある、頭つきやうだいなどもいとをかしげなるを、とうの中將の御小舎人わらは思ふさまなりと見て、いみじくなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

「梅が香にふかくぞたのむおしなべてかざす葵のねも見てしかな」といへば、

「老めの中の葵にかゝるゆふかづらくれど寝がたきものと知らなむ」とおしはないて言ふもざれたり。「あな聞きにくや」とてさくして走り打ちたれば、そよそのなげきの森のもとかしければぞかし「などはどほどにつけては、かたみにいたしなど思ふべかめり。その後常に行き逢ひつゝも語らふ。いかになりにけむ、亡せ給ひにし式部卿の宮の姫君の中になむ候ひける。宮など疾くかくれ給ひにしかば、心ぼそく思ひなげきつゝ、老もわたりに入すくなにてすぐし給ふ。うへは、宮のうせ給ひけるをり、さまかへ給ひにけり。姫君の御かたち、例の事と言ひながら、なべてならずねびまさり給へば、いかにせまし、うちなどにおぼし定めたりしを、今はかひなくなどおぼしなげくべし。このわらはきつゝ見るごとに、たのもしげなく、宮の内もさびしくすおげなる氣色を見て語らふ。「まろが君を、この宮に通はし奉らばや。まだ定めたる方もなくておはしますに、いかによからむ。程遙になれば、思ふまゝにも参らねば、おろかなるともおぼすらむ。又いかにとうしろめたき心ちも添へて、さまさま安けなきを」といへば、「更に今はさやうの事もおぼし給はずとこそ聞け」といふ。「御かたちめでたくおはしますすらむや。いみじきみこたちなりとも、飽かぬ所おはしますむはいと口惜しからむ」といへば「あなあさまし。いかにで見奉らむ。人々のたまふは、よろつむづかしきも、

とせんにだに参れば、慰みぬべしとこそたまへ」と語らひて明けぬればいぬ。かくといふほどに年もかへりにけり。君の御方に若くて侍ふ男、このまじきにやあらむ、さだめたる所もなく、このわらはにいふ、「その通ふらむ所はいづくぞ。さりぬべからむや」といへば、「八條の宮になむ、知りたる者候ふなれども、殊にわかうどあまた候ふまじ。唯中將侍従の君などいふなむかたちもよげなりと聞き侍る」といふ。「さらばそのしるべして傳へさせよ」とてふみとらすれば、「はかなの御けさうかな」と言ひて、もていきて取らすれば、「あやしの事や」と言ひて、もてのぼりて、しかじかの人とて見す。手も清げなり。柳につけて、

「したにのみ思ひみだる、青柳のかたよる風はほのめかさずや。知らずはいかに」とある「御返事なからむは、いとふるめかしからむ。今やうは、なかなかはじめのをぞし給ふなる」などを笑ひてもどかす。少し今めかしき人にや、

「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさぞみだるらむ」。今やうの手の、かどあるに書きみだりたれば、をかしと思ふにや、守りて居たるを、君見給ひて、うしろより俄にうばひ取り給へる。「たがぞ」とつみひねり問ひ給へり。「しかじかの人のもとになむ。おはざりにや侍る」ときこゆ。我もいかで、さるべからむたよりもがなとおぼすあたりなれば、目とまりて見ゆ。「同じくはねんごろに言ひおもむけよ。物のたよりも契らむ」などのたまふ。わらはを召して、ありさまくはしく問はせ給ふ。ありのままに、心細げなる有様を語り聞ゆれば、あはれ故宮のおはせましかば、さるべき折はまうでつゝ、つゝみしにもよろづ思ひ合せ



られ給ひて、「よのつねは」などひとりごたれ給ふ。我が御うへも、はかなく思ひつゞけられ給ふ。いと世もあぢきなく覺え給へど、又いかなる心のみだれにかあらむとのみ、常にもよほし給ひつゞ、歌など詠みて問はせ給ふべし。いかでいひつきしなどおぼしけるとかや。

逢坂こえぬ權中納言

さつさまちつけたる花橋のかも、昔の人戀しう、秋の夕に劣らぬ風のうち匂ひたるは、をかしうもわはれにも思ひ知らるゝを、山ほとゝぎすも里馴れて語らふ、三日月の影はのかなるは、折から忍びかたくて、例の宮わたりにおとなはまほしうおぼさるれど、かひあらじとうちなげかれて、あるわたりの猶なさけわまりなるまでとおぼせど、そなたは物憂きなるべし、いかにせむとながめ給ふ程に、「うちに御遊始まるを只今参らせ給へ」とて藏人の少將参り給へり。「待たせ給ふを」などそゝのかし聞ゆれば、物うながら「車さし寄せ」などのたまふを、少將「いみじうふさはぬみけしきのさぶらふは、たのめさせ給へる方のうらみ申すべきにや」と聞ゆれば「かばかり怪しき身を、うらめしきまで思ふ人は誰か」など言ひかはして参り給ひぬ。琴笛など取りちらして、調べまうけて待たせ給ふなりけり。ほどなき月も雲がくれぬるを、星の光に遊ばせ給ふ。この方つきなきてんじやうびとなぞは、ねぶたげにうちあくびつゞ、すさまじげなるぞわりなき。御遊はて、中納言、中宮の御方にさしのぞき給ひつれば、若き人々心地よげにうち笑ひつゞ、「いみじきかたうと参らせ給へり。あれをこそ」など言へば「何事させ給ふぞ」との給へば「あさて根おはせ侍りしを、いづ方にかよからむと

おぼし召す」と聞ゆれば。「あやめも知らぬ身なれども、引きとり給はむ方にこそは」とのたまへば、「あやめも知らせ給はざなれば、右にはふようにこそは。さらばこなたに」とて、小宰相の君、押し取り聞えさせつれば「御心もよるにや、かう仰せらるゝ折も侍りけるは」とて、にくからずうち笑ひて出で給ひぬるを、例のつきなき御氣色こそわびしけれ。かゝる折は、うちも亂れ給へかしとぞ見ゆる。右の人「さらばこなたには三位の中將を寄せ奉らむ」と言ひて、てんじやうに呼びにやり聞えて「かゝる事の侍るを、こなたに寄らせ給へと、頼み聞ゆる」と聞えさせれば「事にも侍りぬ。心の及ばむ限こそは」とたのもしうのたまふを、「さればこそ、この御心は、底ひ知らぬこひぢにもおりたち給ひなむ」とかたみに羨むも、宮はをかしう聞かせ給ふ。中納言、さこそ心にいらぬけしきなりしかど、その日になりて、えも言はぬ根ども引き具して参り給へり。小宰相のつばねにまづおはして「心をさなく取りよせ給ひしが心苦しさに、わかわかしき心地すれど、淺香の沼を尋ねて侍り。さりとも、まけ給はじ」とあるぞたのもしき。いつの間に思ひよりける事にか、言ひすすぐすべくもあらず、「右の中將おはしたんまり。いづこや、いたう暮れぬ程ぞよからむ。中納言はいまだ参らせ給はぬにや」と、まだきにいとまじげなるを、少將の君「あなをこがまし。おまへこそ、御聲のみ高くておぞかめれ。彼はしのゝめより入り居て、とゝのへさせ給ふゆり」などいふほどにぞ、かたちより始めて同じ人とも見えす、耻しげにて「などゝよこの翁な痛ういどみ給ひそ。身も苦し」とて歩み出で給へる、御年のほどぞ廿に一つ二つばかりあまら給ふらむ。「さらばとくし給へかし。



見侍らむ」とて人々参り集ひたり。かたうどのてんじやうびと、心々に取りいづる根の有様、いづれもいづれも劣らず見ゆる、中にも左のは、猶なまめかしきけさへ添ひてぞ、中納言の玄出で給へる。合せもて行くほどに、ぢにやならむと見ゆるを、左のはては取り出でられたる根ども、更に心及ぶべうもあらず。三位中将、いはむ方なく守り居給へり。左勝ちぬるなめりと、かたうどのけしきしたりがほに心地よげなり。根あはせはて、歌のをりになりぬ。左の講師左中辨、右のは四位の少將讀みあぐるほど、宰相の君などいかに心つくすらむと見えたり。四位少將いかにおくすやと、あいなう、中納言うしろみ給ふほどねたげあり。左

「君が代の長きためしにあやめ草ちひろにあまる根をぞひきつる」。右

「なべてのと誰か見るべき菖蒲草淺香の沼の根にこそありけれ」とのたまへば、少將更におとらじものをとて、

「いづれともいかにわくべき菖蒲草おなじよどのに生ふる根なれば」との給ふ程に、うへ聞かせ給ひて、ゆかしうおぼし召さるれば、忍びやかにて渡らせ給へり。宮の御覽する所に寄らせ給ひて、「をかしき事の侍りけるを、なかか告げさせ給はざりける。中納言三位などかたわかるゝは戯ぶれにはあらざりけることにこそは」とのたまはずれば、心によるかたのあるにや、わくとはなけれど、さすがにいとまじげにぞ」などさこえさせ給ふ。「小宰相、中将が氣色こそいみじかめれ、いづれ勝ち負けたる。さりとて中納言は負け」となど仰せらるゝやはの聞ゆらむ。少將、御簾の中うらめしげに見やりたるしり目も、らうらうしくあいぎやう

づき、人より殊に見ゆれど、あまめかしうはづかしげなるは猶たぐひなげなり。「むげにかくて止みなむも、名残つれづれなるべきを、琵琶の音こそ戀ひしきほどになりたれ」と中納言辨をそゝのかし給へば、「その事とあさいとまなさに、皆忘れにて侍るものを」といへど、遁るべうもあらずのたまへば、盤渉調にかい調べて、はやりかに掻きならしたるを、中納言絶えずをかしうやおぼさるらむ、わごんとり寄せて弾き合せ給へり。この世の事もさこえず。三位よこ笛、四位少將ひやうし取りて、藏人の少將伊勢の海うたひ給ふ。聲まざれずうつくし。うへはさまざまおもしろく聞かせ給ふ。中にも中納言は、かくうち解け、心に入れて弾き給へる折は少なきを珍しうおぼしめす。明日は御物忌なれば、夜更けぬさきにとくかへらせ給ふとて、左の根の中に、殊に長きをためしにもとて持たせ給へり。中納言まかで給ふとて「はしのもとのおさうび」とうちずんじ給へるを、若き人々はわかず慕ひぬべくめでさこゆ。かの宮わたりにも、覺束なきほどになりけるを、おとなはまほしう覺せど、いたうふけぬらむとて、うち臥し給へれどまどろまされず。「人はものをや」とぞ言はれ給ひける。又の日、あやめも引き過ぎぬれど、名残にや、さうぶの紙あまた引き重ねて、

「昨日こそひきわびにしか菖蒲草ふかきこひぢにおり立ちし間に」とさこえ給ひつれど、例のかひなきをおぼし歎くほどに、はかなくさつさも過ぎぬ。つちさへ割れて、照る日にも袖はすよなよおぼしくづはるゝ。十日宵の月くまなきに、宮にいと忍びておはしたり。宰相の君にせうそくし給ひつれば「耻かしげなる御有様に、いかで聞えさせむ」といへば「さり



とて物のほど知らぬやうにや」とて妻戸押し開け對面したり。うち匂ひ給へるに、よそながらうつる心地をする。なまめかしう心深げに聞えつゞけ給ふ事どもは、「おくのゑびすも思ひ知りぬべし。例のかひなくとも、かくと聞きつばかりの御言の葉をだに」と責め給へば、「いざや」と打ち歎きて入るにやをらつゞきて入りぬ。臥し給へる所にさし寄りて、「時々ははしつ方にて涼ませ給へかし。あまりうもれ居たるも」とて「例のわりなき事こそ、えも言ひ知らぬ御氣色、常よりもいとほしうこそ見奉り侍れ。唯ひとこと聞え知らせまほしくてなむ。野にも山にもとかこたせ給ふこそ、わりなく侍る」と聞ゆれば、「いかなるにか、心地の例ならず覺ゆる」との給ふ。「いかゞ」と聞ゆれば、「例は宮にをしふるとて、動き給ふべうもあらねば、かくなむ聞えむ」とて立ちぬるを、聲をしるべにて尋ねおはしたり。おぼし惑ひたるさま心苦しければ「身のほど知らず、なめげにはよも御覽せられじ。唯ひとことを」と言ひもやらず、涙のこぼるゝさまぞ、さまよき人もなかりける。宰相の君、出で見れど人もなし。かへりごと聞きてこそ出で思はめ、人に物のたまふなめりと思ひて、暫し待ち聞ゆるに、おはせずなりぬれば、なかぢかかひなき事は聞かじなどおぼして、出で給ひにけるなめり。いとほしかりつる御氣色を、我ならばやと思ふらむ、おぢさなく打ちながめて、うちをば思ひよらぬぞ心後れたりける。宮はさすがにわりなく見え給ふものから、心強くて明け行く氣色を、中納言も、えぞあられだち給はざりける。心のはどもおぼし知れとにや、わびしとおぼしたるを、立ち出で給ふべき心地せねど、見る人あらば、事ありがほにこそはと、人の御ためいとほし

くて、今より後だにおぼし知らずがはならば、心憂くなむ、猶つらからむとやおぼしめす。人はかくしも思ひ侍らじとて、

「うらむべきかたこそなけれ夏衣うすきへだてのつきなさまやなど」。

かひあはせ

あがつきの有明の月にさそはれて、藏人の少將、さしぬきつきづきしく引き上げて、唯一人小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ちかくしつべく、ひまなげなるに、をかしからむ所の、あきたらむもがなと言ひて歩み行くに、こたちをかしき家に、さんの聲ほのかに聞ゆるに、いみじう嬉しくなりて、めぐるかどのわきなど、くづれやあると見けれど、いみじくついでなどまたきに、なかなかわびしく、いかなる人のかくひき居たるならむとよりなくゆかしけれど、すべきかたもおぼえで、例の聲出させて、隨身にうたはせ給ふ。

「行くかたも忘るゝばかりあさばらけひきといむめる琴の聲かな」とうたはせて、まことに暫しうちより人やと、心時めさし給へど、さもあらねば、くち惜しくて歩み過ぎたれば、いと好ましげなるわらはべ四五人ばかり走りちがひ、小舎人童をのこなど、をかしげなるこわらはやうの物を捧げ、をかしき文袖のうへにうち置きて出で入る家あり。なにわざするならむとゆかしくて、人め見はかりて、やをらはひりていみじく繁きすゝきの中に立てるに、八つ九つばかりなるをんなのいとをかしげなる、うす色のあこめ紅梅などみだれ着たる、ちひさき具を瑠璃の壺に入れて、あなたより走るさまのあわたししげなるを、をかしと見給ふ



に、直衣の袖を見て、「こゝに人こそあれ」と何心もなくいふに、わびしくなりて、「あなさま。聞ゆべき事ありて、いと忍びて参り來たる人ぞ」と。「寄り給へ」といへば「あすの事思ひ侍るに、今より暇なくて、そゝきはんべるぞ」とさへづりかけて、いぬべく見ゆめり。をかしければ「なにごとのさいそがしくはおぼさるゝぞ。まろをだにおぼさむとあらばいみじうをかしき事も人はえてむかし」と言へば名残なく立ちとまりて「この姫君とうへの御方の姫君と、貝合せさせ給はむとて、月ごろいみじく集めさせ給ふに、おなたの御方は大夫の君、侍従の君と貝合せさせ給はむとて、いみじくもとめさせ給ふなり。まろがおまへは、たゞ若君一とて、いみじくわりなく覺ゆれば、只今も姉君の御もとに人遣らむとて、罷りなむ」といへば「その姫君たちのうち解け給ひたらしむ。格子のはざまなどにて見せ給へ」といへば「人に語り給はし、母もそのたまへ」とおづれば「物ぐるばし。まろは更に物言はぬ人ぞよ。唯人に勝たせ奉らむ勝たせ奉らじは心ぞよ。いかなるにかひとものふち」とのたまへばよろづおぼえて「さらば歸り給ふなよ。隠れ作りてす奉らむ。人の起さぬさきにいざ給へ」とて、西の妻戸に屏風押した、み寄せたる所にすゑ置くを、ひがひがしくやうやうなり行くを、幼き子を頼みて見もつけられたれば、よしなかるべきわざどかしなど、思ひ思ひはざまより覗けば、十四五ばかりの子ども見えて、いと若くさびはなるかぎり、十二三ばかりありつるわらはのやうなる子どもなどして、殊に小箱に入れ、物の蓋に入れなどして、持ちちがひさわぐ中に、母屋のすだれに添へて立てたる、几帳のつまうち上げて、さし出でたる人、わづか十

三ばかりにやと見えて、ひたひがみのかゝりたる程より始めて、この世のものとも見えす美くしきに、萩がさねの織物の鞋、紫苑色など押し重ねたる、つらづゑをつきて、いと物悲しげなる、何事ならむと、心苦しと見れば、十ばかりなるをのこに、栲葉の狩衣、二藍の指貫、まどけなく着たる、同じやうなるわらはは、硯の箱よりは見おとりなる、紫檀の箱のいとをかしげなるに、えならぬ貝どもを入れてもて寄る。見するまゝに思ひよらぬ隈なくこそ。「そきやう殿の御方などに参り聞えさせつれば、これをぞ求め得て侍りつれと侍従の君の語り侍りつるは、大夫の君は、藤壺の御方より、いみじく多く賜はりにけり。すべて残る隈なくいみじげなるを、いかにせさせ給はむすらむと、道のまゝも思ひまうで來つる」とて顔もつと赤くなりて言ひ居たるに、いと姫君も心細くなりて、「なかなかなる事を言ひ始めてけるかな。いとかくは思はざりしを、ことごとしくこそ求め給ふなれ」とのたまふに「なかかもとめ給ふまじき。うへは内大臣殿のうへの御もとまでこひ奉り給ふところはいひしか。これにつけても、母のおはせましかば、あはれかくは」とて涙もおとしつべき氣色とも、をかしと見るほどに、このありつるわらはは、「ひんがしの御方渡らせ給ふ。それ隠させ給へ」と言へば、塗女籠めたる所に、皆取り置きつれば、つれなくて居たるに、初の君よりは、少しおとなびてやと見ゆる人、山吹、紅梅、薄栲葉、あはひよからずふくだみて、髪いと美しくしげにて、たけに少し足らぬなるべし。こよなくおくれたると見ゆ。若君のもておはしつらむは、など見えぬ。かねて求めなどはすまじとため給ふにすかされ奉りてよろづはつゆこそもとめ侍らずな



りにけれど、いと悔しく、少しさりぬべからむものは、分け取らせ給へ」などいふさま、いみじくしたり顔なるに、にくくなりて、いかでこなたを勝たせてしがなと、そらに思ひなりぬ。この君「こゝにもほかまでは求め侍らぬものをわか君は何をかは」といらへて、居たるさま美しく。うち見まはして渡りぬ。このありつるやうなるわらは、三四人ばかりつれて「我が母の常に讀み給ひし観音經わがおまへ負けさせ奉り給ふな」。唯この居たる戸のもとにしも向きて、念じあへる顔をかしけれど、ありつるわらはや、言ひ出でむと思ひ居たるに、立ちはしりてあなたにいぬ。いとほそき聲にて、

「かひなしとぞに歎くらむしら浪も君がかたにはこゝろよせてむ」と書きたるを、さすがに耳とく聞きつけて「今かたへに聞き給ひつや。これはたがいふべきぞ。観音の出で給ひたるなり。うれしのわざや。姫君のお前に聞えむ」と言ひて、さいひがてら恐ろしくやありけむ、つれて走り入りぬ。やうなき事を言ひて、このわたりをや見顯さむと、胸つぶれてさすがに思ひ居たれど、唯いとわたくししく「かうかう念じつれば、佛のたまへる」とかたれば、いと嬉しと思ひたる聲にて「まことかはとよ恐ろしきまでこそおぼゆれ」とて、つらづあつみやみて、うち赤みたるまみ、いみじく美しくしげなり。「いかにそのくみいれのうへよりふと物の落ちたらば、まことの佛の御功德とこそは思はめ」などいひあへるをかし。疾くかへりて、いかでこれを勝たせばやと思へど、晝は出づべき方もなければ、すゝろに能く見暮して、夕霧に立ち隠れて、出で、そえならぬ洲濱の三つばかりなるを、うつぼに作りて、いみじき

小箱をすゑて、いろいろの貝をいみじく多く入れて、うへにはこがねまろがねの蛤、うつせ貝などをひまなくまかせては、いとちひさくて、

「まら浪にこゝろをよせて立ちよらばかひなきならぬ心よせなむ」とて、ひき結びつけて、例の隨身に持たせて、まだあかつきに、かどのわたりをたすめば、昨日の子しも走る。うれしくて「かうぞばかり聞えぬよ」とてふところよりをかしき小箱を取らせて「誰がともなくてさし置かせてき給へよ。さて今日のありさまの見せ給へよ。さらば又々も」と言へば、いみじく喜びて、「唯ありし戸口、そこはまして、今日は人もやあらじ」とて入りぬ。洲濱、南のかららんに置かせてはひりぬ。やをら見とほし給へば、唯同じ程なる若き人ども、二十人ばかりにさうぞきて、格子あけそいくめり。この洲濱を見つけて、あやしく「たがしたるぞたかしたるぞ」といへば「さるべき人こそなけれ。おもひえつ。このさのふの佛のし給へるなめり。あはれにおはしけるかな」とよろこびさわぐさまの、いと物ぐるほしければ、いとをかしくて見る給へりとや。

思はぬかたにとまりする少將

昔物語などにぞ、かやうの事は聞ゆるを、いとありがたきまで、あはれに淺からぬ御ちぎりのほど見えし御事を、つくづくと思ひつゝくれば、年の積りにけるはども、哀に思ひ知られけん。大納言の姫君二人ものし給ひし、まことに物語に書きつけたる有様に劣るまじく、何事につけても生ひ出で給ひしに、故大納言も母上も、うち續きかくれ給ひにしかば、いと心



細きふるさとに、ながめずとし給ひしかど、はかばかしく御めのとだつ人もなし。唯常に侍ふ侍従辨などいふ若き人々のみさぶらへば、年に添へて、人目まれにのみなりゆく故郷にいと心細くておはせしに、右大将の御子の少將、知るよしありて、いとせちに聞えわたり給ひしかど、かやうのすぢはかけてもおぼしよらぬ事にて、御かへりごととちとおぼしかけざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたよりもなく、二所おぼとのごもりたる處へ、導き聞えてけり。もとより御志ありけることにて、姫君をかき抱きて、みちやうの内へ入り給ひにけり。おぼしあされたるさま、例の事なれば書かず。おし耻ぢ給ふにしもすぎて、おはれにおぼさるれば、ちう忍びつゝ、通ひ給ふを、ち、殿聞き給ひて、「人のほどなど、口惜しかるべきにはあらねど、何かはいと心細き所に」きど許しなくのたまへば、思ふ程にもおはせず。君も暫しこそ忍びずとし給ひしか、さすがにさのみはいかゞおはせむ。さるべきにおぼし慰めて、やうやうち靡き給へるさま、いとらうたく哀なり。晝などおのづから寝すとし給ふを、見奉り給ふに、いとわてにらうたく、うち見るより心苦しきさまし給へり。何事もいと心憂く、人目稀なる御すまひに、人の御心もいと頼みがたく、いつまでとのみながめられ給ふに、四五日いぶせて積りぬるを、思ひし事かなと心ばそきに、御袖たゞならぬを、我ながらいつ習ひけるぞと思ひ知られ給ふ。

「人でゝる秋のしるしの悲しきにかれ行くほどのけしきなりけり」など、手習に馴れにし心なるらむなどやうにうち歎かれて、やうやう更け行けば、唯うたゝねに、みちやうの前に

うち臥し給ひにけり。少將内より出で給ふとておはして、うちたゞき給ふに人々驚きて中の君起し奉りて我が御方へ渡し聞えなどするに、やがて入り給ひて、大将の君のあながちいぎなひ給ひつれば、泊瀬へ参りたりつる程の事など語り給ふに、ありつる御手習のあるを見給ひて、

「常磐なる軒のしのぶを知らずして枯れゆく秋のけしきとや思ふ」と書き添へて見せ奉り給へば、いと耻かしうて、御かは引き入れ給へるさま、いとらうたくこめきたり。かやうにて明し暮し給ふに、中の君の御めのとなりし人はうせにしが、むすめ一人あるは、右大臣の少將の御めのとこの、左衛門の尉といふがめなり。たぐひなくおはするよしを語りけるを、かの左衛門の尉、少將に「しかじかなむおはする」と語り聞えければ、あせちの大納言の御許には心とゞめ給はず、あくがれありき給ふ君あれば、御文などねんごろに聞え給ひけれどつゆあるべき事とも覺したらぬを、姫君も聞き給ひて、「思ひの外にあははしき身のありさまをだに、心憂く思ふ事にて侍れば、まことにつよきよすがおはすなる人を」などのたまふもあはれなり。さるはいくほどのこのかみにもおはせず。姫君は、二十に一つなどや餘り給ふらむ、中の君は、今三つばかりや劣り給ふらむ。いとたのもしげなき御さまどもなり。左衛門、あながちに責めければ、うづまさに籠り給へる折を、いとよく告げ聞えてければ、何のつつましき御さまなければ、ゆくりなく入り給ひにけり。姉君も聞き給ひて、我が身こそわらめ、いかでこの君をだに人々しくもてなし聞えむと思へるを、さまさまにさすらふも世の人



聞き思ふらむ事も心憂く、なきかげにもいかに見給ふらむと、はづかしう契くち惜しうおぼ  
 ざるれど、今はいふかひなき事なれば、いかゞはせむにと見給ふ。これもいと愚ならずお  
 ぼさるれど、あせちの大納言、さゝたまはむ所をぞ、父殿さまに諫め給へば、今ひとかたより  
 は、いとまぢどほに見え給ふ。この右大將殿の少將は、右大臣の北の方の御せうとにもものし  
 給へば、少將たちもいと親しくおはする。かたみにこのしのび人も知り給へり。右大臣の少  
 將をば、この少將とぞ聞ゆる。あせちの大納言の御許にこの三年ばかりおはしたりしかど  
 も、こゝろとゞめ給はず世と共にあくがれ給ふ。しのび御事も大將殿におはするなど思  
 はせ給へり。いづれもいとをかしく御ふるまひを、あながちに制し聞え給へば、いといたく  
 忍びて、大將殿へ迎へ給ふをりもあるを、いとかるがるしうつゝましき心地のし給へど、今  
 のたまはむことをたがへむもあいなき事や。あるまじき所へおはするにてもなしなど、さ  
 かしだちて進め奉る人々多かれば、我にもあらず時々おはする折もありけり。權少將は大將  
 殿のうへの御風のけおはするにことつけて、例のとまり給へるに、いと物さわがしくまらう  
 どなど多くおはする程なれば、いと忍びて御車奉り給ふに、左衛門の尉も侍はねば、時々も  
 かやうの事に、いとつゞまじき事なれば、御車に奉り給ふ。大將殿のうへ、例  
 ならず物し給ふほどにて、いたくまざるれば、御文もなきよしをのたまふ。夜いたく更けて、  
 かしこにまうで、少將殿よりとて「忍びて聞えむ」といふに、人々皆寢にけるに、姫君の御方  
 の侍従の君に「少將殿より」とて御車奉り給へるよしを言ひければ、ねほけにける心地に、い

づれぞと尋ぬる事もなし。例も参る事なればと思ひて、かうかうと君に聞ゆれば、「文なども  
 なし。風にや例ならぬなど言へ」とのたまへば「御使こち」といはせて、妻戸をあけたれば、寄  
 り来るに、「御文あども侍らねば、いかなる事にか。又御風のけの物し給ふと」といふに「大  
 將殿のうへ御風のけのむつかしくおはして、人騒しく侍る程なればこのよしを申せ、ささぎ  
 き御使に参り侍る人も候はぬ程にてなど、返す返す仰せられつるに、空しく歸り参りては必  
 ずさいなまれ侍りなんす」といへば参りて、しかじかと聞えて進め奉れば、例の人のまゝな  
 る御心にて、うす色のなよやかなるが、いとまみ深かうなつかしき程なるを、いと心苦し  
 げにしせ侍てのりたまひぬ。侍従ぞまゐりぬ。御車寄せておろし奉り給ふを、いでであら  
 ぬ人とはおぼさむ。限なくなつかしう、なめやかなる御けはひは、いとよくかよひ給へれば、  
 少しもおほしめわかぬほどに、やうやうわらぬと見なし給ひぬる心まどひぞうつゝとは覺  
 えぬや。かの昔夢見し始よりも、なかなか恐ろしうあさましきに、やがて引きかづき給ひぬ。  
 侍従こそは、いかにと侍る事にか」と、「これはあらぬ事になむ。御車寄せ侍らむ」となくなく  
 いふを、さばかり色なる御心には許し給ひてむや。寄りて引き放ち聞ゆべきならねば、なく  
 なく几帳のうしろにゐたり。男君はたゞにはあらず、いかに覺さるゝ事もやありけむ、いと  
 嬉しきに、いたう泣き沈み給ふ氣色もことわりながら、いとなれがほに、かねてしも思ひあ  
 へたらむ事めきて、さまざま聞え給ふ事もあるべし。へだてなくさへなりぬるを、女は死ぬ  
 ばかりぞ心憂くおぼしたる。かゝる事は、例のわはれも淺からぬにや、たぐひなくぞおぼさ



る。わざわざしき事は、いま一人の少將の君も、母上の御風よろしきさまに見え給へば、か  
しこへとおぼせど、夜などさきと尋ね給ふ事もあらむに、をりふしなからむとおぼして、御  
車奉り給ふ。これはさきさきも、御文なきをりもあれど、何とものたまはず。例のさきよする參  
りて、「御車」といふを、申し傳ふる人も一所はおはしぬれば、疑なく思ひてかくと申すに、こ  
れもいと俄にはおぼせど、今少し若くおはするにや、何とも思ひいたりもなく、人々御ぞ  
など着せかへ奉りつれば、我にもあらでおはしぬ。御車よせに、少將おはして物などの給ふ  
に、あらぬ御けはひなれば、辨の君「いとあさましくなむ侍る」と申すに、君も心とく心得給  
ひて、日ごろも、いとにほひやかに見まほしき御さまの、おのづから聞き給ふ折もありけれ  
ば、いかに思ふとだにもなど、人知れず思ひ渡り給ひける事なれば、「何かあらずとて疎くお  
ぼすべき」とてかき抱きておろし給ふに、いかにはすべき。さりとて我さへ捨て奉るべきな  
らぬば辨の君もおりぬ。女君唯わなゝかれて動きだにし給はず。辨いと近うつととらへた  
れど、「何とかはおぼさむ。今は唯さるべきにおぼしなせ。世に人の御爲あしき心は侍らじ」と  
とて、几帳おし隔て給へればせむ方なくて泣き居たり。これもいとあはれかぎりなくぞ覺え  
給ひける。おのおの歸り給ふ曉に、御歌どもあれど、例のもらしにけり。男も女もいづかたに  
唯同じ御心の中に、あいなう胸ふたがりてぞおぼさる。さりとて、又もとをおろかにはあ  
らぬ御思ひどもの、珍しきにも劣らず、いづかたも限なかりけるこそ、なかきか深きしも苦  
しかりけれ。ごんの少將殿よりとて御文あり。起きもあがられ給はねど、人目あやしさに、辨



欠

MISSING



の君ひろげて見せ奉る。

「おもはずに我が手になる、あづさ弓深き契のひけばなりけり」。あはれと見いれ給ふべきにもあらねば、人め怪しくて、さりげなくつゝみて出しつ。今一かたにも少將殿よりとてあれば、侍従の君胸つぶれて見せたてまつれば、

「淺からぬちぎりなればぞ涙川おなじながれに補ぬらすらむ」とあるを、いづかたにもおるかに仰せられむとにや、返す返す唯同じさまある御心のうちどものみぞ、心苦しうとぞほんにも侍る。劣り優るけじめなくさまさま深かりける御志ども、はてゆかしうこそ侍れ。猶とりどりなりける中にも、珍しきは猶立ちまさりやわりけむに、見馴れ給ふにも、年月もあはれなるかたは、いかゞ劣るべきと、ほんにもほんのまゝまことと見ゆ。

はなだの女御

其のころの事と、あまた見ゆる人まねのやうに、傍らいたけれど、これは聞きし事なればなむ。賤しからぬすきものゝいたらぬ所なく、人に許されたるやんごとなき所にて、もの言ひけさうせし人は、このころ里にまかり出で、あなれば、まことかといきてけしき見むと思ひて、いみじく忍びて、唯小舎人童一人して來にけり。近きすいがいのせんざいに隠れて見れば、夕暮のいみじくあはれげなるに、すだれ巻き上げて、只今は見る人もあらじと、おもひ顔にうちとけて、皆さまさまにゐて、よろづの物語しつゝ、人のうへいふなどもあり。はやりかにはうちさゝめきたるも、又耻しげにのどかなるも、數多たはぶれ亂れたるも、今めかしうを



かしきほどかな。「かのせんぎいどもを見たまへ。池のはちすの露は玉とぞ見ゆる」と言へば、前に濃きひとへ、志をんいろの桂、うす色の裳ひさかけたるは、或人の局にて見し人なめり。わらはの大きなる小きなど椽に居たる、皆見し心地す。「御方こそこの花はいかゞ御覽する」といへば「いざ人々に讐へ聞えむ」とて「命婦の君が折るはちすの花はまるが女院のわたりにこそ似奉りたれ」との給へば、大君「下草の龍膽はさすがなんめり。一品の宮と聞えむ」。中の君「ぎばうしはだいの王の宮にもなどか」。三の君「紫苑の華やかなれば、くわうごうの御さまにもがな」。四の君「中の君は、父おとゞ常に桔梗をよませつゝ、いのりがちなめれば、それにもなどか似させ給はざらむ」。五の君「四條の宮の女御、露草のつゆにうつろふとかや、あけくれのたまはせしこそ、まことに見えしか」。六の君「かきはのなでしこは帥殿と聞えまし」。七の君「刈萱のなまめかしきさまにこそ、弘徽殿はおはしませ」。八の君「宣耀殿は菊と聞えさせむ。宮の御おほえなるべきなめり。麗景殿は、花すゝきと見え給ふ御さまぞかし」。九の君といへば神十の君「淑景は朝顔の昨日の花と歎かせ給ひしこそことわりと見奉りしか」。五郎の君「みくしげ殿は野邊の秋萩とも聞えつゝかめり」。ひんがしの御方は「淑景の御おとゞの三の君、誤りたる事はなけれど、くわさうにぞ似させ給へる。いとこの君ぞ、その御おとゞの四の君は、くさのからといざ聞えむ」。姫君「右大臣殿の中の君は、見れども飽かぬ女郎花のけはひこそし給ひつれ」。西の御方「その宮の御うへは、さまにや似させ給へる」。をば君「左大臣の姫君は、われもからに劣らじ顔にぞおはします」などいひおはさう

すれば、尼君「齋院こえう神と聞え侍らむか。渡らせ給はざんめればよつみを離れむとてかゝるさまにて、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方「さて齋ぐらうをば、何とか定め聞え給ふ」といへば、小命婦の君「をかしきは皆取られ奉りぬれば、さんばれのきばのやますげに聞えむ。まことはまるが見奉るその宮のうへをば、ばせを葉とさこえむ。よめの君「中づかさの宮のうへをば、まねく尾花と聞えむ」など聞えおはさうする程に、日暮れぬれば、燈ろに火ともさせて添ひ臥したるも、華やかにめでたくもおはしますものかなと、あはれしはしはめでたかりしことぞかし。

「世の中のうきを知らぬと思ひしにこは日に物は歎かしきかな」。命婦の君は「はちすのわたりこの御かたちもこの御方などいづれ勝りて思ひ聞え侍らむ。にくき枝おはせかし。はちす葉の心ひろさのおもひにはいづれと分かす露ばかりにも」。六の君は、はやりかなる聲にて、「なでしこをとこなつにおはしますといふこそうれしけれ。

とこなつに思ひしげしと皆人はいふなでしこと人は知らなむ」とのたまへば、七の君「たりがほにも、  
「刈萱のなまめかしさのすがたにはそのなでしこも劣るとぞ聞く」とのたまへば、皆人々もわらふ。「まるがきくの御かたこそ、ともかくも人に言はれ給はね。  
殖系しよりしげりましにし菊の花人におとらで咲きぬべきかな」とあれば、九の君「う

らやましくもおぼすなるかな。



秋の野のみだれてまねく花すゝき思はむかたになびかざらめや。十の君「まろが御前こそ怪しき事にて、くらされて」などいとはかなくて、

「朝顔のとくしばみぬる花なれど明日も咲くはとたのまるゝかな」とのたまふにおどろかれて、五の君うち臥したれば、はや寝入りにつけり。「何事のためへるぞ。まろははなやかなる所に侍らはねば、よろづ心ぼそくおぼゆるかな。」

たのむ人露草ごとに見ゆれば消えかへりつゝなげかるゝかな」とねおびれたるこゑにて、又ぬるを人々笑ふ。女郎花の御方、「いたく暑くこそあれ」とて扇をつかふ。「いかにとて参りなむ。戀しくこそおはしませ。」

「みな人もわかぬはひも女郎花よそにていとゞなげかるゝかあ」。夜いたく更けぬれば、皆寝入りぬるけはひを聞きて、

「秋の野のちぐさの花によそへつゝなど色ごとに見るよしもがな」とうちうそぶきたれば「あやし。たれかいふぞ。覺えなくこそ」といへば「人は只今はいかゝあらむ。ぬえの鳴きつるにやあらむ。思むなるものを」といへば、はやりかなる聲にて「をかしくもいふかな。ぬえは、いかでかかくもうそぶかむ。いかにぞや聞き給ひつや」。所々聞き知りてうち笑ふめり。やゝ久しくありて、ものいひやむほど、

「思ふ人見しも聞きしもあまたありておぼめく聲はありと知りぬる」。このすきものたゞけり。「あなかま」とて物も言はねば、すのこに入りぬめり。「あやし。いかなるぞ。ひと所だに

わはれとのたまはせよ」などいへば、いかにおもふにかあらむ、絶えていらゝもせぬほどに、あかつきになりぬる空の氣色なれば、「まめやかに見し人もおぼしたえぬ御なげきともかな。みも知らぬぬるめかしうもてなし給ふものかな」とて、

「百かさね濡れなれにたる袖なれど今宵やまさりひびてかへらむ」とて出づる氣色なり。例のいかになまめかしうやさしき氣色ならむ、出でやせましと思へど、あぢきなく、一所にとぞ思ひける。このむすめたちの親卑しからぬ人なれど、いかに思ふにか、宮仕に出したて、とのばら、みやばら、にようごたちの御許に、一人づゝ参らせたるなりけり。同じはらからともいはせで、ことびとの子になしつゝぞありける、このとのばらの女御たちは、皆いとませ給ふ御なかに、同じはらからの別れて侍ふを怪しきや。皆おぼして侍ふは、知らせ給はぬにやあらむ。すきものばらの御有様ども、聞き嬉しと思ひ至らぬ處なれば、この人ども、知らぬにしもあらず。かの女郎花の御方と言ひし人は、聲ばかりを聞きし、志深く思ひし人なり。なでしこの御人といひしは、睦まじくもありしを、いかなるにか、見つともいふなとちかはせて、又も見ずなりにし。刈萱の御人は、いみじくけしきだちて、物言ふいらへをのみして辛うじて年經つべきをりは、いみじくすかし謀る折のみあれば、いみじくねぶたしと思ふなりけり。菊の御人は、言ひなどはせしかど、殊にまはにはあらで、たれとまやまを元とばかりはのかに言ひてぬざりいりしけはひなむいみじかりし。はなすゝきの御人は、思ふ人も又ありしかば、いみじくつゝみて唯夢のやうなりし宿世の程もあはれにおぼゆ。はちすの御人



は、いみじくしたのめぢらばと契りしに、騒しき事のありしかば、引き放ちて入りしを、いみじと思ひぢがら許してき。しをんの御人は、いみじく語らひて、今にむつましかるべし。朝顔の人は、若うにはひやかにかにわいぎやうづぎて、常に遊びがたきにてはあれど、名残なくこそ。桔梗は常に恨むれば、さわがぬ水ぞと言ひたりしかば、澄まぬに見ゆなど言ひし、にくからず。いづれも知らぬは少くぞありける。その中にも、女郎花のいみじくをかしく、ほのかかりし末ぞ、今にいかで、たゞよそにて語らひむと思ふに、心に、今ひとたびゆかしさを、いかならむと思ひもさだめたる心なくぞありくなる。至らぬ里へなどは、いともて離れて、言ふ人をばいとをかしく言ひ語らひ、はらからといひ、いみじく語らへば、しばしこそあれ、顔かたちの見るになどかくはある。もの言ひたるありさまなども、この人には、かゝる人いとなかり。宮づかへびと、さならぬ人のむすめなども謀らるゝあり。うちにも参らでつれづれなるに、かの聞きし事をぞ、そとの女御の宮とてのどかにはかの君こそかたちをかしかんなれなど、心に思ふ事歌など書きつゝ、手ならひにしたりけるを、又人の取りて書き寫したれば、怪しくもあるかな。これら作りたるさまも覺えず、よしなき物のさまかな。そらごとにもあらず、世の中にそら物語多ければ、まともや思はざるらむ。これ思ふこそねたけれ。多くはかたちしつらひなどもこの人の言ひ心がけたるなめり。誰ならむ、この人を知らばや。殿上には、只今これをぞ、怪しくをかしと言はれ給ふなる。かの女たちは、此處にはまばまばおぼしくて、かく一人づゝ参りつゝ、心々に任せて逢ひてかな。をかしく殿の事、言ひでたる

こそをかしけれ。それもこのわたり、いと近くぞあんなるも、知り給へる人あらは、その人と書きつけ給ふべし。

はいすみ

まもわたりに、しないやしからぬ人の、ことか、なはぬ人をにくからずおもひて、年ごろ経るほどに、親しき人の許へいき通ひけるほどに、むすめを思ひかけてみそかに通ひありきけり。珍しければにや、初の人よりは志深く覺えて、人目もつゝ、ます通ひければ、親聞きつけて年ごろの人をもち給へれどもいかゞはせむとてゆるして住ます。もとの人聞きて、いまはかぎりなめれ、かよはせてなともよもあらせじと思ひわたる。いくべきところもがな、つらくなりはてぬさまに離れなむと思ふ。されどさるべき所もなし。今の人の親などは、おし立ちて言ふやう「めなどもなき人の、せちに言ひしにわはすべきものを、かくはいにもあらで、坐しそめてしを、くち惜しけれど、いふかひなければ、かくてあらせ奉るを、世の人々はめするたまへる人をおもふと、さいふとも家にするたるひとこそやどとなくおもふにはあらめなどいふもやすからず。げにさる事に侍る」など言ひければ、をとこ「ひとかすにこそ侍らねど、志ばかりは勝る人あらじと思ふ。かしこには渡し奉らぬを、おろかにおぼさば、只今も渡し奉らむ。いとことやうになむ侍る」といへば、親「さだにあらせたまへ」と推し立ちていへば、男あはれかれも、いづち遣らましと覺えて、心のうち悲しけれども「今のがやどとなければ、かく」など言ひて、気色も見むと思ひて、もとの人のがりのいぬ。見ればあてにこしき人



の、日ごろ物を思ひければ少しおも瘠せていとわはれげなり。うち耻ぢまらひて例のやうに物も言はでまめりたるを心苦しう思へど、さういひつれば言ふやう「志ばかりは變らぬど、親にも知らせで、かやうにまかりそめてしかば、いとほしさに通ひ侍るを、つらしとおぼすらむかしと思へば何とせしわざと今なむ悔しければ、今もえかき絶ゆまじうなむ。かしてつちをらすべきを、こゝに渡れとなむいふを、いかにおぼす。はかへやいなむとおぼす。何かは苦しからむ。かくながら端つ方に坐せよかし。忍びて忽ちにいつちかはおはせむ」などいへば、女、こゝに迎へむといふなめり。これは親などあれば、此處に住まはずともありなむかし、年ごろ行く方もなしとみるみるかくいふよと、心うしと思へど、つれなくいらふ。「さるべき事にこそ。はや渡し給へ。いつちもいつちもいなむ。今までうくてつれなく、うき世を知らぬ氣色こそ」といふ。いとほしき男「なごかうの給ふらむ。やがてにてはあらず。たゞ暫しの事あり。かへりあは又迎へ奉らむ」と言ひ置きて出でぬる後、女つかふものと、さし向ひて泣きくらす。「心憂きものは世なりけり。いかにせまし。おし立ちてこむには、いとかすかにて出で見えむいとみぐるし。いみじげに怪しうこそはあらめ。かの大原のいまこが家へいがむ。かれより外に知りたる人なし」。かくいふはもとつかふ人なるべし。「それは片時おはしますべくも侍らざりしかども、さるべき所の出でこむまでは、まづおはせ」など語りひて、家の内清げにはかせなどする。心ちもいと悲しければ、なくなはづかしげなるものやかせなどする。今の人あすあむ渡さむとすれば、この男に知らすべくもあらず。車なども誰

にか借りむ、送れとこそは言はめと思ふも、をこがましけれと言ひ遣る。「こよいなむ物へ渡らむと思ふに、車暫し」となむ言ひやりたれば、男、あはれいつちとか思ふらむ、いかむさまをだに見むと思ひて、今こゝへ忍びてきぬ。女待つとてはしに居たり。月の明きに泣く事かぎりなし。

「我が身かくかけはなれむと思ひさや月だにやどをすみはつる世に」と言ひて泣く程に、來ればさりげなくて、うちそばむきて居たり。「車は牛たがひ馬なむ侍る」といへば、「唯近き所なれば車は所せし。さらばその馬にても、夜の更けぬさきに」と急げば、いとわはれと思へど、かしてには皆あしたにと思ひたれば、遁るべうもなければ、心苦しう思ひ思ひ、馬牽きいださせて、すのこに寄せたれば、乗らむとて立ちいでたるを見れば、月のいと明きかげに、有様いとさゝやかにて、髪はつやゝかにて、いともいと美しくしげにてたけばかりなり。男手づから乗せて、こゝかしこひきつくらふに、いみじう心憂けれど、ねんじて物も言はず。馬に乗りたるすがた頭つき、いみじくをかしげなるを哀と思ひて「おくりにも我も參らむ」といふ。「唯こゝもとなる所なればあへなむ。馬は只今かへし奉らむ。その程は此處におはせ。見苦しき所なれば、人に見すべき所にも侍らず」といへば、さもあらむと思ひて、とまりて尻うちかけて居たり。この人は、供に人おほくはなくて、昔より見馴れたる、小舎人童一人をぐしていぬ。男の見つる程こそかくしてねんじてつれ、かどひき出づるより、いみじく泣きて行くに、このわらはいみじく哀に思ひて、このつかふ女をしるべにて、はるばるとさして行けば、唯



こゝもとに仰せられて「人もぐせさせ給はで、かく遠くはいかに」といふ。山里にて人もありかねば、いと心細く思ひて泣きて行くを、男もわかれたる家に、唯一人ながめて、いとをかしげなりつる女さまの、いと戀しく覺ゆれば、人やりならず、いかに思ひぬたらむと思ひ居たるに、やゝ久しくなり行けば、すのこに、足まもにさしおろしながら寄り臥したり。この女は、いまだ夜中ならぬさまにいきつきぬ。見ればいと小さき家なり。このわらは、「いかにかかる所には、おはしまさんずる」と言ひて、いと心苦しと見居たり。女は「はや馬ゐて参りぬ。待ち給ふらむ」といへば、「いつこにかとまらせ給ひぬると、仰せさふらは、いかに申さんずる」といへば、なくなく「かやうに申せ」とて、

「いづこにかおくりはせしと人間は、心はゆかぬなみだ川まで」といふを聞きて、わらはもなくなく馬にうち乗りて、ほどもなくいきつきぬ。男うち驚きて見れば、月もやうやう山のは近くなりたり。わやしく遅くかへるものかな、遠き所へ往きけるにこそと思ふも、いとわはれなれば、

「住み馴れし宿を見すて、ゆく月の影におほせて戀ふるわざかな」といふにぞ、わらはかへりたる。「いとわやし。など遅くは歸りつるぞ。いづくなりつる所ぞ」と問へば、ありつる歌をかたるに、をどいと悲しくてうち泣かれぬ。此處にて泣かざりつるはつれなしをつくりけるにこそと、わはれなれば、いききて迎へ返してむと思ひて、わらはに「さまでゆしき所へいくらむとこそ思はざりつれ。いとさる所にては、身もいたづらになりなむ。猶迎

へ返してむとこそ思へ」と言へば「道すがらをやみなくなむ泣かせ給ひつる」と「あたら御さまを」といへば、男明けぬさまにとて、このわらはともにていとくいき着きぬ。げにいとちひさくわはれたる家なり。見るより悲しくて、打ちたけければ、この女はさつきにしより、さうに泣き臥したる程にて「たぞ」と問はずれば、この男の聲にて、

「涙川そことも知らずつらき世をゆきかへりつゝ、ながれ來にけり」といふを、女いと思はずに、似たる聲かなとまであさましうおぼゆ。「わけよ」といへば、いとおぼえなけれど、わけ入れたれば、臥したる所に寄り來て、なくなくをこたりを言へど、いらへをだにせで泣くこと限なし。「更に聞えやるべくもなし。いとかゝる所とは思はでこそいだし奉りつれ。返りては、御心のいとつらくあさましきなり。よろづはのどかに聞えむ。夜の明けぬ前に」とてかさ抱きて馬にうち乗せていぬ。女いとあさましく、いかに思ひなりぬるにかと、あきれていき着きぬ。おろしふたり臥しぬ。萬に言ひ慰めて「今よりは更に彼處へ罷らじ。かくおぼしける」とてまもなく思ひて、家に渡さむとせし人には「こゝなる人の煩ひければ、折あしかるべし。怪しかるべし。この程をすこして、迎へ奉らむ」と言ひやりて、唯こゝにのみありければ、父母思ひなげく。この女はいめのやうに嬉しと思ひけり。この男いとひきゝりなりける心にて、あからさまにとて、今の人のもとにひるまに入り來るを見て、女俄に「殿おはすや」といへば、うちとけて居たりける程に心さわぎて「いつら、いつこにぞ」と言ひて櫛の箱を取り寄せて、しるきものをつくると思ひたれば、取りたがへて、はひすみ入りたるたゝ紙を



取り出で、鏡も見すうちさうぞきて、女はそこにて「暫しな入り給ひそといへ」とてせひも知らずきしつくる程に男「いとしくもうとみ給ふかな」とてすだれをかき上げて入りぬれば、たゞう紙を隠して、おろおろになどして、うち口おほひて、夕まぐれにしたたりと思ひて、まだらにおよひかたにつけて、目のさろさろとしてまたゝ居たり。男見るに、あさましく珍らかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄りて「よし今しばしありて参らむ」とて、暫し見るもむくつけければいぬ。むすめの父母、かくきたりと聞きてきたるに、「はや出で給ひぬ」といへば、いとあさましく、「名残なき御心かな」とて、姫君の顔を見ればいとむくつけくなりぬ。おびえて父母も倒れふしぬ。むすめ「などかくはのたまふぞ」といへば、「その御顔はいかになり給ふぞ」ともえいひやらす。「あやしく、などかくはいふぞ」とて、鏡を見るまゝに、かゝればわれもおびえて鏡投げ捨て、「いかになりたるぞやいかになりたるぞや」とて泣けば、家の内の人もゆすりみちて、「これをば思ひ疎み給ひぬべき事をのみかしてにはし侍るあるに、おはしたれば御顔のかくなりたる」とて、陰みやう師呼び騒くほどに、涙の落ちかゝりたる所の例のはだになりたるを見て乳母、紙おしもみてのごへば、例のはだになりたり。「かゝりけるものを、徒になり給へる」とて、騒ぎけるこそ返す返すをかしけれ。

よしなしごと

人のかしづくむすめを、ゆゑだつ僧、忍びて語らひけるほどに、年のはてに山寺に籠るとて、「旅のぐに、菴、壘、たらひ、はんざう貸せ」と言ひたりければ女ながむしろ何やかや一つやり

たりける。それを女の師にしける僧の聞きて、我ももの借りにやらむとて書きてありける文の詞のをかしさに、書き寫して侍るなり。世づかすあさましきことなり。「もろこししらぎに住む人、さてはとこよの國にある人、我が國にはやまかつしなつくの戀せろなどや、かゝる詞は聞ゆべき。それだにも、すたれあみのおきなは、かしこ太子のむすめに、名立ち賤しき中にも、心のおひさきはんべりけるになむ。それにも劣りたりける心かなとは思すともわりなき事の侍りてなむ。世の中の心細く悲しうて、見る人聞く人は、あしたの霜と消え、ゆふべの雲とまがひて、いとわはれなる事がちにて、あるはすくなく、なきは數添ふ世の中と見え侍れば、我が世や近くとながめくらすも、心地すむしがたき事がちにて、猶世こそいなびかりよりもほどなく、風の前の火より消え易きものなれども、うら悲しく思ひ續けられ侍れば、吉野の山のあなたに家もがな。世の憂き時のかくれがにと、きはだかく思ひ立ち侍るをいづこにこもり侍らまし。富士のたけと淺間の峰とのはざまならずは、かまど山と日のみさきとのたえまにまれ、さうすば、白山とたち山とのいさあひの谷にまれ、又あたと比叡の山との中あひにもあれ、人のたはやすく通ふまじからむ所に、跡を絶えて籠り居なむと思ひ侍るなり。この國にはなほ近し、もろこしの五臺山、新羅の峰にまれ、それも猶け近し。天竺の山に、みははとりの峰の岩屋にまれ籠り侍らむ、それも猶つち近し、雲の上にはらき登りて、月日の中にまじり霞の中にとびすまばやと思ひたちて此の頃出で立ち侍るを、いづちまかれとも身をすてぬものなればいるべきものども多く侍る。誰にかは聞えさせむ。年頃も御



覽じて久しくなりぬ。なさけある御心とは聞き渡りて侍れば、かゝるをりだに聞えむとてなむ。旅のぐにしつべき物どもやはんべる。貸させ給へ。まづ入るべき物ども、よる雲の上にひらぎのぼらむれうに、あまの羽衣一ついとれうにはべる。求めてたまへ。それならでは、たゞのあこめ、ふすま、せめてならば、布のやれあをにても又は十よ間のひはだや一つ、廓、寢殿、大殿、車宿りもよう侍れど遠きはどは所せかるべし。唯腰にゆひつけてまかるばかりのれうに、やかた一つ。疊などや侍る。錦はし、高麗端、うげん、紫端の疊、其侍らずは、布べりさしたらむやれ疊にてまれ貸し給へ。たまえにかゝるまこもにまれ、逢ふとかたの、原にあるすがごもにまれ、唯わらむを貸し給へ。とふの菅薦な給ひそ。むしろはありそらみの浦にうつるなる出雲むしろにまれ、いさの松原のはとりにいでくなる筑紫むしろにまれ、みるをが浦に刈るなるみるぶさむしろにまれ、底いる入江に刈るなるたなみむしろにまれ、七條の繩むしろにまれ、侍らむを貸させ給へ。またさなくばやれむしろにても貸させ給へ。屏風もよう侍る。唐繪、大和繪、布屏風にても、もろこしのこがねをへりに磨きたるにもあれ、新羅の玉をくぎに打ちたるにまれ、これらなくば網代屏風のやれたるにもあれ貸し給へ。疊や侍る。まろ疊にまれ、うち疊にもあれ貸し給へ。それなくばかけ疊にまれ貸し給へ。けふりが崎に鑄るなるのがなへにてもあれ、まつちがはらに作るある讃岐釜にもあれ、いそのかみにあなる大和鍋にてもあれ、つくまの祭に重ねる近江鍋にてもあれ、くすばのみまきに作るなる河内鍋にまれ、いちかと畑にうつなるさかりにまれ、とむ片岡に鑄るなるかき鍋にもあれ、飴

鍋にもあれ貸し給へ。多く世に作るなる火桶をしきもいるべし。まがらぎの大笠、あめの下の川狩籠も大せちなり。いま手箱、筑紫かはごもほしく侍る。せめては浦島の子が皮ごにまれ、そでの皮袋にまれ貸し給へ。わびしき事なれど、露の命絶えぬ限は食物もよう侍る。めう新かくしの信濃梨、斑鳩山の枝栗、三方の郡の若狭鮪、あまの橋立のたこめ、出雲の浦の甘海苔、みのはしのかもさかり、若江の郡のかうちかぶと、やすくろ本の近江もちひ、小松が本のいかほしうり、かけたみねの松の實、みちくの島のけあけび、こ山の柑子橋、これら侍らずば、やもめのわたりの熬豆などやうの物賜はせよ。いでやいるべき物どもいと多くはべる。せめてはたゞ足鍋一つなり、むしろ一つら、盃一つなむいるべき。もしこれら貸し給はば、心ならむ人にな賜ひそ。こゝに仕ふわらはおほそううのかける二、うみの水のあらそいふ二人のわらはべに賜へ。出で立つ所は、しなどの橋のかみの方に、天の川のはとり近く、かさゝぎの橋づめにも侍る。そこに必ず贈らせ給へ。これら侍らずは、え罷りのぼらましきなめり。世の中に物の哀知り給ふらむ人は、これらをもとめて賜へ。猶世を憂しと思ひ入りたるを、もろごゝろにいそがし給へ。かゝる文など人に見せさせ給ひそ。ふくつけたりけるものかなと見る人もぞ侍る。御かへりはうらによ。ゆめゆめ。つれづれに侍るまゝに、よしなしごといも書きつくるなり。きくことのありしに、いかにいかにぞやおぼえしかは、風のおと、鳥のさへづり、蟲の音、浪のうち寄せし聲に、たゞそへ侍りしぞ。冬ごもる空の景色に、まぐるゝたびにかさくもる袖のはれまは、秋より殊にかわくまなき



に、むら雲晴れゆく月の殊に光さやげきは、木の葉がくれだになければにや、なほしのばれぬなるべし。あくがれ出で給ひて、あるまじき事と思ひかへせば、外さまにと思ひたせ給ふが、猶えひき過ぎぬなるべし。いと忍びやかに入りてあまた人のけはひするかたにうちとけ居たらむ氣色もゆかしく、さりとともみづからのありさまばかりこそわらめ、何ばかりのもてなしにもわらじを、大かたのけはひにつけても。

堤中納言物語 終

濱松中納言物語

孝養の志深く思ひたちにし道なればにや、おそろしう遙に思ひやりし浪の上なれど、荒き浪風にも遇はず、思ふかたの風なむ、殊に吹き送る心ちして、もろこしのうんれいといふ所に、七月かみの十日におはしまし着きぬ。そこを立ちて、かうしうといふ所に泊り給ふ。そのとまり、入江のみづらみにて、いとおもしろきにも、石山のをりの近江の海思ひ出でられて、あはれに戀しきことかぎりなし。

「わかれにし我がふるさとのはの海にかげをならべし人ぞこひしき」。それよりこはらたうに着き給ふ。いとおもしろくて、人の家ども多くて日本の人着き給ふとて家々の人出でて、見騒ぐさまどもいと珍し。れきやうといふ所に船とめて、それより花山といふ山、峯高く谷深く、はげしき事かぎりなし。あはれに心ばそく「さうは道遠し雲千里」とうちすんじ給へるを、御供に渡る博士ども涙を流して「はくふ山深し鳥一こゑ」とそへたり。山越えはてぬれば函谷の關に着き給ひて、日暮れぬれば關のもとにとまり給ひぬ。この關はとりの聲を聞きてなむあくるといふとをまると聞き、御供の人の中にはへたる者ありて、いざ試みむとて、夜なかばかりにとりの聲にいみじう似せて遙に鳴き出でたるに、關の人驚きてその戸をあく。「いとよしなき事しつるかな」と人々いひにくむを、君も聞き給ひて、「ふるさ心さすが



におぼえけるにこそ」と、うち笑ひ給ふ。明くる日、この關に御迎の人々参りたり。その有様からぐにといふ物語に繪にまゐるしたる同じ事なり。日本のてんふ渡いて關をいゝに中納言ひきつくるひて、いみじく用意し給へるかたちありさま、光るやうに見ゆるを、この國の人々めづらかに見奉り驚きて、めで奉る事かぎりなし。昔のわうかくしやうの居けるかうをうに、中納言のおはしまし所、心ことに玉を磨き、輝くばかりにしつらひてする奉る。やうやうしづまりて、ふるさとおぼしやるに、くもかすみ遙に隔て、海山を分け過ぎにけるにつけても、人々のおぼしたりしさまどものおはれに悲しけれど、いつしか三のみ子、疾く見奉らむと思ふにぞよろづ慰み給ふ。帝のせんじくだりて、内裏の承願殿といふ所にめしわりて参り給へり。帝三十よばかりにて、顔かたち、いみじく麗しくめでたうおはします。中納言のありさまを御覽するにたぐひなし。そこらつどひたる大臣公卿、日本はいみじかりけり、かかる人のおはしけるよと驚きて、「いにしへかうやうけんに住みけるはくかんこそは、我が世にたぐひなきかたちのなをとめたるも、あいぎやうのこぼるばかりにはへるかたは、更にかゝらざりけり」と定めけり。題を出して、ふみを作り、遊をしてこゝろみるにも、この國の人にまさるはなかりけり。この人の事をこそ見ならひとむべかりけれど、この國の事とは何事をか中納言には傳へなすべきと、帝もおぼしめし驚きて、唯この中納言を、朝夕にもてあそびなづさひ奉るに、いみじう憂へをやすめ、思ひをのぶる事に思へり。三の御子は、内裏のはとり近く、かうやうけんといふ所に、おもしろき宮づくりして、そこをぞ御

里にま給へる。母后も諸共に住み給ふ。御子の御消そくあり。限りなく嬉しくて参り給へり。所のさま、外よりもいみじくめでたく、水の色、石のた、すまひ、庭のおも、梢のけしきもいみじうおもしろし。こなたに召し入れたり。御年七つ八つばかりにて美しくうてるはしくびんづらゆひしやうをきておはす。ありし御面影にはおはせねど、哀れにさぞかしと見奉るに、涙もこぼるゝ心ちし給ふ。御子も御氣色かはりて、大かたの事ども仰せられて、ことばにはのたまはで、昔を忘れぬに、かく逢ひ見つるよしのおはれを書きて賜はせたるに、いみじうねんすれど涙とまらず。その御返しの文、雲の浪烟の浪と、遙に尋ねわたりて、しやうをへだてかたちをかへ給へれどおはれになつかしく、故郷を戀ふる心も、忽ちに忘れぬる心をつくりて見せ奉るに御子もえ堪へ給はず、うへあんののおぼし感ひしをさしあたりて見し折は、などかかゝる、事を思ひよりけむと悔しうおぼえ、道のほど遙に心ぼそく、いかになりぬる身ぞとおぼし、を、いでや思ひたゝざらましかは、いかにいみじういぶせからましと、よろづこの御衆にては、慰みてたのもしう嬉しと思へる氣色を、御子はあはれにかぎりなく思ひたれど、人目には、その事をおぼえ顔にもかけ給はぬを、かしこういうにもおはするかなと見奉る。母后といみじうときめき、御子の御おぼえもすぐれて、片時見奉らではえおはせねば、かばかりおもしろうあそびよくおぼさるゝかうやうけんにも、心のどかにもえおはせざりけれど、中納言に、常にむつれまほしくおぼされければ、ことのがれつゝ、さどがちになり給ひぬ。八月十五日のよひ中納言のおはするかうそらの前の前裁、殊に面白く見渡さる



るゆふへ、故郷をおぼし出で、すだれを巻き上げて、つくづくとかがめふし給へれば、人々も皆都を思ひ出で、さまざま言ひあへる中に、こゝろばせある人、かくいふ、

「むしの音も花のにはひも風のおとも見し世の秋にかけらざりけり」と言ひ出でたる返事を、集まりてうそぶくめれど、やゝ程経ぬれば、中納言うちほゝるみ給ひて、「げにさることあれど、おどされたる事ぞ多かる」とのたまはするも、すゝろにはづかし。

「おく露もさりたつ空もしかの音も雲のかりもかはらざりけり」とながめ給ふを、集まりてこれのみずんじて、え言ひでずなりぬ。十月一日、外よりも紅葉の盛すぐれたる内裏の西にとうていといへる所にみかどゆきし給ひ、中納言も仕う奉り給へるを見奉らむと、遠き國の人々さへのこりなくつどひて、かたちありさま見るに、肝消えて思はぬなく、及ぶまじきは病になりぬべく、我はと思ふ人々ぞかくておはする程だにも見え知られ奉らばやと心をかけて思はぬはなかりける。御子たち大臣公卿集まりて文作りわそびをし給ふにも、この中納言にしくものなく、めづらかにいみじかりける世の人かなと、帝を始め奉りてある限の人めづらしがる事かぎりもなし。その又の日、御子からやうけんに出で給ひぬと聞きて参り給へれば、風すさまじき夕べに、時雨時々うちそゝぐほどの村雲立ち渡りて、心ぼそげなる事かぎりなく物あはれなるに、又知らずおもしろききんの聲を聞きつけたる、嬉しき事限なくて、さるべきものゝくまに立ち隠れて見れば、おはします所は、さやらのひはだのいろもせず、こんじやうを塗りかへしたるやうに、唯大かたの調度は赤きにまゆ塗りたるさま

にて、にしきのへりさしたるみすどもかけ渡し飾られたるに、たつみのはうに大きな山より瀧高く落ちたるを、わきかへり待ちうけたる岩のたゝすまひ、よのつねならず、たざりて流れ出でたる水のはとりに、いろいろうつろひ渡れる菊の花の、いとおもしんきをもてあそばるゝなるべし。そなたのつまのみす巻きあげて、いみじうまやうぞきたる女房うるはしく髪あげたいひれなどして、いろいろうちをさし隠しつゝ、錦着けるを襟に十餘人ばかりならび居たり。上手の書きたりし唐繪にたがはず、上げたるみすのほどに、紫のからの裾濃の御几帳うちあけて、唐組の紐長やかにうるはしきを押しやりて、さんひき給ふなり。后のおはするとことなく見れば、御年二十ばかりにやおはすらむとおぼえて、御顔のやうだいはそくもあらずふくらにもあらず、よき程なるが、中少しもりたる心ちして、御色の白さは、玻璃しらたまといふとも、これにはまさらざりけむとおぼゆるに、あいぎやういみじくにはひ薫りて、眉ものよりけだかく見なし給ふに、唇はにといふもの塗りたるやうに、いささかもねぢけたる所なく、あたりまでもにはひて、髪上げうるはしき御さまにて、のどかにながめ出でつゝ、さんを弾き給ふ。この世にかゝることを見るやとあさましきまでおぼゆ。日本のは、髪は唯うちたれ、額髪もよりかけなどしたるこそ、我がかたさまになつかしくなまめきたる事なれと思ひ出づるに、うるはしくてかんざしして髪上げられたるも、人からなりければにや、これこそめでたくさまことなりけれと見るに、物のねさへ世に知らず聞ゆるに、若き女房七八人ばかり、天降りけむ少女の姿かくやと見えて、菊の花もてわそびつゝ、



「らんせいえんの嵐の」と、若やかなる聲合せてすじたるめづらかに聞ゆ。みすの中なる人々も、「この花開けて後」と、口ずさびおんずるなり。殊にをのこは歌よむめるを、女はえ詠まぬにや花を見ても文をすんじあへる、いと知らまほしきに后御簾をおろして入り給ひぬ。あかずなかなかなければなる月を見る心ちするに、え堪へず花のもとに歩み出でたるを、いたうあきれ驚きたるけしきもなし。少しはた隠れつゝ、居たる所に、花を取りて立ち寄り給ひて、

「ふるさとを戀ふるこゝろも忘るゝはこの花見つるゆふべなりけり」とこゝろみに言ひかけたれば、うちはさし出で、たゞまち取るほど、我が世の人にことならず。

「かれてさはこの花やがてにははなむふる里戀ふる人あるまじく」と答へたるけはひ、言はぬにはあらざりけりとをかしくおぼさる。御子出で給ひぬれば、居なほり給ひぬ。おもしろき夕なりとて、御琴ども取り出で、賜はせたる、ありつる御面影のめでたさは、名残のにはひまで、我が身にしみぬる心地して、さんの音のおもしろさ、へ耳につきつゝ、搔きたつべき方もおぼえず。后もみすのもとにて、つくづくと御覽するに、よろづめでたくすぐれたりける人かな、この人かへりなむ後、見ずなりなむこそはあはれなれと人知れず涙落ちておぼされけり。この後の御はんたいは、唐の太宗と申しけるが御子孫の末にて、しんのしん王といへる人ありけり。顔かたち身のさえずぐれたりければ、この國と日本に言ひ通はさるゝ事ありけり。えらびの使にて、日本へ渡りたるなりけり。筑紫に流され給へりける御子の、やがてそこにてうせ給ひたりける御娘の、いとかすかなるめのとにつきて、さやうへもえのぼ

らておはしけるを、語らひ聞え給へりける程に、言ひ知らす玉ひかる女生れ給へりけるを、あはれに悲しく見捨て、かへらむ方もなく、又ゐて渡らむには、させまるといひける者、うれはしといひける人をゐて渡りけるに、海の中の龍王のめで、船を留めけるにわびて、海の中に壘を敷きておきてける後、女はかよふ例なし。いかにせむと思ひわびて、五年が程筑紫にすこして猶とゞめむを悲しくおぼえければ、海の龍王に多くの事を申しこひける夢に「早くゐてわたれ。これはかの國の後なれば、たひらかに渡りなむ」といふ夢を見て、喜びつゝ、五といふとしゐてわたりて、限なく思ひかしく、おひたつまゝに、類ひなくすぐれめでたきを、帝聞しめしてければ、「御子達、東宮の母にておはする一の後の父、一の大臣、おそろしき人なり。類ひなき我がむすめを奉りて、必ずみだれある事出で來なむ」と、はかりてをしみ申しけれど、俄にみゆきし給ひて、十四といふ年、やうしうの中にゐて入り給ひにけり。その後、傍に又人ありともおぼしたらす。父の宰相も大臣になし、后も十六にて御子産み給ひければ、やがて后になして、ならびなく時めかし給ふに、一の後の父の大臣、おほきにかりの心をなし、そねみてこの人御おもひのつくべきよしを、さまざまいろにのろひ、いみじき事ども出で來て、今二人の後、十人の女御かたより給ひつゝ、皆人心をひとつになして、揚貴妃といふ昔のためしひき出でぬべかりけるを、父の大臣、世の中あぢきなくて、大臣の位かへし申して、北の方にまよくさんといふ山寺に、おもしろき家を造りて籠り給ひぬ。后も何をかけにてか、おほやけにも仕うまつらむとて、共に入り給ひなむとし給ひける



を、帝おほきにおぼし悲むに、この後のあまたの人にのろはれて、内裏のうちに立ち入り給へば、おほきなる病になりて、さえ入り給ふによりて、更にえ参り給はねば、大なる内裏にこそおはせざらめとて、ほど近きかうやうけん、限りなくおもしろきにみつばよつばの殿づくりして、すゑ奉り給ひて御子をば二三日づ、通はせ奉り給ふ。きびしくさかしやうなれど、帝の御ふるまひなど日本のやうに動きなくはあらざりければ、忍びておぼし召しあまるをりをり、みゆきして逢ひ見給ふやうなれど、それもおぼろげならではあるべくもわらず、いときびしく所せき世を帝もおぼしめしわび、御病になりぬべきを、よろづ祈りまつらる、けに、あるにもあらずもてなされておはしましたしてけるを、このころは中納言とおもしろき所々出でおはしましたつ、文作り遊ばせ給ふにまざる、やうなるも多くの人の御いのりのけなめり。この后、五つまでは母宮にそひ奉り給へりければその御有様よの常のことよりもおとなしくおはして、よくおぼえ給ふまゝに、今はとて出で離れにしに、母宮の抱きて、「今日こそ限の別なれば、世になくなりなむ程をも知り給はじ。今日を限とおぼせ」といみじう泣き給ひにし面影を心にかけて、やうやうおよすげ給ふまゝに、母宮いかになり給ひにけむとひんがしの山きはをながめつ、この世の中あらまほしうもおぼれず、物のみあはれに心ばそくおぼされけるに、百敷のうちにはさそはれ入りて、とりとならばと夜晝ちぎり仰せらるるも、心につきて、あはれにめでたき事とおぼされけるに、かゝる世のみだれどもに、いと世の中いみじく心ぼそくて、御子の御有様の、世になくうつくしくおとなしくおはします

によるづをば慰めていみじくおもしろきかうやうけんうちにうちながめて、晝は法華經を讀み奉り、月の明き夜は、きんを弾きつ、明し暮し給ふ。うれへ、世の常の人ならば深かるべけれども、もとより百敷のうちあらまほしからず、限なき御契、かしこうもおぼされて、唯母君のゆくへも知らず、逢ひ見るべき世もなき歎をし給ひし御身なれば、いとおもしろき所に起き臥し安く、月をも花をも見つ、過ぐし給ふは、心やすくおぼさる、かつは世づかぬ御心とおぼし知る。母宮の御有様に似て、もてなしありさま、物うちのためへるけはひ、日本の人に聊も違はず、たをやかになつかしうやはらかになまめき給へる有様、この國の人には似ざりければ、侍ふ人も、宮の御有様に似つ、たをやかなれば、ありし菊の花のゆふべも、我が世のひとにたがはず中納言もおぼえ給ふなりければ、風のつてにも、日本の人は聞かまほしうおぼされて、ひじりの渡りたりしにも、いみじうのたまひおぼし、に、又中納言のかくわたると聞き給ひしより、あはれにゆかしくおぼされしに、みこもなかなか我が世の人には物どほくおはするを、この人をば常に見まほしく、なつかしき事にもむつびさせ給へば、繁く参り給ふを、立ち出で、御覽するたびことに心にかゝりて、ゆゝしくおぼつかなく思ふ方の人ぞかした、哀に涙ぐましくおぼさる、御心の通ふにや、中納言も菊の夕の面影離れず、又見奉らばやと歎しきまで思ひわたり給ふ。人も聞かず、のどやかなる御物語のついでに、みこ母后に申し給ふやう、「にさうの人などおどろおどろしう、人の言ひなし侍るも、はかばかしからぬ身には、をこなるやうに侍れば、日ごろもえ申し出です侍るも、みづからは日本の人に



てなむ侍りし。この中納言、さきの世の子にて侍りき。唯一人侍りしかば、たぐひなく悲しく思ひ侍りしにより、九品の望もこのおもひにひかされて、かく生れまうで來たるとなむおぼえ侍る。中納言もかくなむ侍ると傳へ聞きて、おほやけも限なく惜み、母も命絶ゆばかり悲みけれど、猶ふりすて、三年がいとまを申して渡りまうできたるなり。されば知らぬ國の人を、うちつけに親しくむつびおもふやうにもこそ人も思ひ侍らめども、昔の心のおぼえ侍るにより、常に見まほしく、あはれにおぼえ侍るを、御心にも疎くなおぼし召しおさせ給ひそ。久しくも侍らましかんなれば、歸りなむ後の名残のおぼさなむ兼ねて思ひ侍る」とて、うち泣かせたまふに、后もあはれにあさましくおぼされて、「なごてか今までみづから一人には仰せられざりける。二さうの人におはしますとは、おのづから見奉れど、かくまで思ひよらずこそ侍りつれ。中納言にむつび給ふは見るめのためでたく侍ればかこそ思ひつるを、げに見る度にこの人の歸り給ひなむいかにあはれならむと、すゝろにおぼえ侍りつるも、かく淺からぬ人に侍りければこそ。宮づかへ仕りてはめんばくありて、さるべき人々を思ひやむ事なく、ひき立て侍らむこそはいあるべきに、みづからの故に、親も世にはしたなめられありわびて、深き山に籠り侍りにけり。我が身も百敷の内にもえ侍はず、昔玄やうやうきうにながめけむ人のやうに、この所に閉ぢられて、心細くあるかひなきやうに侍れど、ごせんのいとよう物おぼし知り、おとなしくおはしますに、さりともと唯ひとゝころを、今はよろづにたのみ奉り慰めて侍る身なれば、いかにもいかにもおぼしめさむ人をば、同じこゝろ

にこそ思ひ侍らめ。まいてげに哀に悲しき事にも侍るなれば、人め見苦しうあるまじうは、見えむかひもしぬべく」など申し給ひて後はいとゞ、我もいみじうおぼゆるかたさまの人とおぼしつるだに、あはれにむつまじかりつるを、まいてこのみこのおぼしのためさまなど聞き給ひて後は、何の人めにも耻ぢず、みづから物などのたまはまほしけれども、いかなるふしもかなとあさましうゆゝしき上に、この院にかく離れ居て、ひのもとの中納言をなむかたらふといふ事出できなば、身のいたづらにならむはさることにて、みこの御ため、中納言のためいみじかるべければ、さものためはず。中納言はかくおぼすらむとも知り給はず、ありし御さまを又見奉ることもがな、さりともけぢかく、物うちのためへらむ氣色言の葉は、少し見し世の人に似給はじかしと心に懸け奉りて、故郷の思ひ忘るゝまなけれど、おのづからまざるゝ心ちするに、大將殿の姫君、いみじく物思へるさまにながめおぼしいらる傍に寄りて、我も心に離るゝよなき悲しさをいふとおぼすに、うちなきて

「たれにより涙の海に身を沈めをるゝあまとなりぬとかしる」とのためを、いみじうあはれに、我もほろほろとなくと思ふに、涙におぼれてうち驚きぬるなごり、身にそへる心ちして、かう遙に思ひやるとならば、おぼよそにてもわらず思ひやりなうけぢから見なし程なく遙になりしを、いかにおぼすらむと思ひやる涙はうつゝにもせきやる方なくて、

「日のもとのみつの濱松こよひこそ我をこふらし夢に見えつれ」。今はと別れし曉忍びあへずおぼしたりし氣色も、らうたげなりしなど思ひ出づるに、もし命絶えてなくは、行きか



へり、この程の怨みとくばかり、いかで見え奉らむ、式部卿の宮おはしましにけむ、さらばいとほしうもあるべきかなと、ことごとくおぼし續けらる。年もはかなく暮れぬ。心から知らぬ世界に明け暮すを思へば心ぼそけれど、あらぬ御さまのいとをさなくおはしましなから、人知れぬ昔の御心かはらぬさまにおぼしたる御かげに、よろづはたのもしうて過ぐし給ふ。年たちかへりぬるあしたの空はいつくもかはらぬものなれば、霞める空も鶯のねも、春やむかしのとのみ思ひまがへたるにも、こぞのこのごろの人々の御氣色ども思ひ出づるに、あはれに戀しきなぐさめに、梅の木のかぎりあると聞く山を行きて見れば、遠くより風の吹き散らすにはほひかをりみちて、まことにこと木はまじらず一度に咲きわたりて、唯しる山とぞ見ゆる。

「しろたへにふりつむ雪と見えつるは梅さくやまのとはめなりけり。たうけんといふ水のはとりを見れば、岸にそひて、ひとへに桃の木のはるばると麗しく浪立ちてひらけ渡りたるさまもあやなり。これこそは昔花をけうじける人の、この桃の木のおらむ所までと行きければ、ゆけどもゆけどもつきせざりけるを、せめてたづねければ、犬の聲する所ありけり、そこに人ありけり、くはせたりけるものを食ひて、仙人になりたりけりとあるはこの花にこそわんめれ。遙に傳へてふみの事ども見しに、あらたに見つるも我ながらめづらしく人より殊におぼし知らる。その時大臣上達部のむすめわりとあるは、他國のかりそめの人なりともかくておはするほど、我が家の内に出し入れ奉りて見ばや、さて子をも産み出でたらば、

かばかりいみじき人の名残をとめたらむは、えも言はざるべき事なりと思ひ願はぬ人なきて、さまざま用意をしつゝ、氣色とり聞ゆれど、我が世にてだに、さやうの事思ひよらざりしを、まいて知らぬ世界にさるふるまひをし出でたらむにいとびんなからむかし、さだにゆきかゝりなば、歸らむとせむに、事悪しくなりなむかしと思ふに、みこも忍びて、「さおもむけ思へる人いと多からむめり。必ずおぼしなよりそ。かうこそ唯麗しき世界と見ゆれど、人の心いと恐しくて、日本へ歸さじなど思ふ心つきなば、事亂れなむ。さりとして、さるべくて生れ給へる人の、この世の人になりはて給ひなむもあさましき事なり。よろづよりも、母上を背きて思はせ給はむけうの罪いと恐し」と教へさせ給ふも、我もさ思ふことなれば、いよいよこがれぬるに、一の後の御父の大臣、あまたが中に五に當るむすめぐれていみじういつきかしづき給ふに、こぞの十月とうていの紅葉の賀のみゆきに見給ひて後、すゝるにふし沈み惱みて、色かたちもかはり行くを、一の大臣おほきに驚き歎きて、修法讀經など騒ぎ給へども、よろしうなるけぢめもなし。「いかなればかくはおはするぞ」と歎き給ふに、「日本の中納言の琴彈き遊び給はむを見侍らばや。それにやいさゝか心地まざるゝと、そこはかとなくおどろおどろしう苦しき事は侍らねど、唯うもれいたく心地のむつかしきを」と答へ給ふに、父の大臣、「誠にかの人を見れば、病も止み命も延びぬべきさまし給へる人なり。いとかしこくおぼしよりたり。われ迎へ奉らむ」とて、花盛いとおもしろきに輝くばかりしうゝ、中納言のおはするからそらにまうで給へり。國にとりては一の大臣にて、さばかり世の中を我



がまゝに靡かし、やんごととなげある人の、いかで物し給ふにかと驚き畏まり給ふに、「さるべき人々案内申し侍る事はべるなれど聞き入れさせ給はざんなりと承るを、おのれがわやしのいほりにこのころ花おもしろく侍るを、御覽せさせに御迎に参りたる」とのたまふに、いなぶべきならねば、「いとかしこう、唯めしに侍らましに参りませし」といふいふひきつくりひておはしぬ。この家のいきほひ、いみじく作り飾られたるさま大裏に異ならず磨きたてたり。入り給ふほど、らんしやうしかくしの、しる男も七八人大納言中納言などにてある限いとやごとなくてありけるに、ことごとしく迎へ入れて、水のもとなるえもいはぬ花の影、柳の下にわぐらども立てなめて、さうのかくやして舞をして、ふみを作り遊び給ふさまいかめしくおもしろし。御まうけ更なり。いかならむ珍しき事を盡さむとおぼしたり。大臣うちに入りて見給へば、錦の帳の内に、いつとなく沈み臥し給へるむすめの君、玉のかんざしあざやかにて、みすのもと近く、いとよくゑみて見出で、居給へり。大臣、「あはれかく安かりける事を、今までのたまはでなやまし聞えけるよ」とのたまふも、世には違へる事なりかし。いみじうおもしろうて暮れぬるに、「今宵はかくておはしませ」とせちにとめてみすの内に入るゝいと恐しと聞きしあたりをいかにしつる事ぞと、いみじくむつかしく覺えて、大臣の三郎にあたる中納言といふ、常に來つゝ語らふを呼び出で、「いかにおぼしてとめさせ給へるにかあらむ。ないない承りてこそ参りこめ」とのたまへば、「五に當り侍る娘のすぐれたるわい子に侍り。この月頃惱み煩ひて起きあがる事も侍らざりつるを歎き悲みて候ひ

つるに、日本の中納言を見奉らば、心地やみなむと申されければ、唯その心を慰めむとに侍り」とありのまゝに聞ゆるも、世づかすあさましく、我がまゝにうち聞ゆれば、この國のやうは、つくろふ事なく物いふなるべし、この人いさゝかかたはならず、さえありさまもさらさらしくやんごとなきが、かくいふは悪しからぬ事にこそと聞えながら、我が世の人いみじく飾りつくらふならひに、いとをかしううち笑はれて、「そはいと易き御なぐさめにこそ侍るなるを、なか今まで、かやうにて侍ひ御覽せられむ事は安かるべきをこの世をかりそめに思ひ給へるやうありて人の御あたり近く馴れ御覽せらるゝ事侍らざりし。かやうにおのづから心とままる人も侍らまし。かば遙に思ひより侍らましや。唯推し量り給へ。すゝろにあぐかれ侍りしあまりかくまで思ひなり侍りしなり。思へば世づかぬ事なり。よのつねの有様にてはえ聞えじ。唯時々かやうに召し侍らむ折々参り侍りなむ。世のつねのすぢに思ひよらせ給ふにや」とのたまふを、入りて父君にかくと聞え給へば、さ聞くことぞかしとおぼえて、「まか皆承りて侍れば、唯若き人の、珍しく見奉らまはしがり侍るを、いつもいつも尋ね知らせ給へとばかりになむ」とて、唯入れに入るゝを、あまりいなとて逃げ出づべきにあらねば入り給ひぬ。内のしつらひ更にもいはず輝くばかりにて、女房五十人ばかりいみじうまやううぞきて髪あげうちはさしつゝ、柱ごとに火ともし渡してなみぬたり。むすめの君は、帳のかたびらすこし巻き上げて、團扇を手探りにして見出で、臥したり。珍らかにをかしうもあさましうもおぼえて、いかいせむ、かうやうけんの後の、さやうにだにあらばしも、身のい



たづらにならむもおぼえずかしとおぼして、帳のもと近く寄りて物などの給ふに、耻ぢたる  
 氣色もなし。ほかげに見れば、十七八ばかりにて、白うをかしげにはあれど、後の御有様には  
 譬へやるべきかたもなし。こたへするも聞きしらぬ詞がちにて、誠にあらぬ世の心ちする  
 に、かばがりもなぞやとすさまじくて、ゆかにおしかゝりつゝ、琴を手ずさみて、いとわはれ  
 におぼしければ淺からずなむ。「この世に侍らむほど、時々は参らむ」など言ひ置きて、持ち  
 給へる笛をかたみにとてとめて、わけもはてず歸り給へぬ。恐しと聞く人の心破らじとば  
 かりに、その後もせうそなど聞え給ふ。姫君も唯めでたく、うつくしき人の見まほしく戀  
 しかりつるに病もつくにこそありけれ、まことしき思ひはさはやかにやありけむ、唯さばか  
 りうち見、物のたまひし有様を見聞きしに心ちも慰みて、それより後はおぼつかなきうらみ  
 もなし。大臣もさ聞き置き給へる人の御有様あれば、何のくせもなく思ひなして、姫君の心  
 ちをこたりぬるを嬉しくてやめさせ給へるよろこびを常に聞え給ふも、いとをかしう珍ら  
 かにおぼす。かの大臣のむすめを見しにも、かうやうけんの後今一度見奉らまほしき思ひま  
 されどさるべきやうもなし。思ひわびて菩提寺といふ寺におはします。佛いみじうけんじ給  
 ふといふに、まうで給ひて、かうやうけんの後今一度見奉らむと念じ給ふ夢に、この寺の僧  
 とおぼゆるもの、いみじうけうらにたふとげにしやうぞきて、

「今ひとめよそにやは見むこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ」。さめて後、いかに見  
 えつるならむと思ひあはすべきかたもなき心地するに、そのころかうやうけんには、えもいは

すいみじきさとしあり。やうしうのうちに参らむとおもほし立つより、心たがひて消え入る  
 くせのつき給へれば、あはれに悲しき御志をも、ひたぶるにさし召しなさむよりはありと  
 ばかりも聞き召さむと、なくなく申し遁れてかくてすくすを、猶安からず恐しき世につひに  
 いかになりぬべき身ならむとおぼし騒ぎて、そのころかしこきおんみやう師に忍びて物間  
 ひ給ふにいみじうおどろおどろしうトひ申して「所をさりていみじう難き物を思ませ給へ」  
 とまうしたれば、この世は、後の御ありきなどもさすがにやすく、みこをば大裏に入れ奉  
 りて、かうやうけんをば、いみじうかたき御物忌とさし籠めて、露ばかりも人に知らせず、  
 親しき人三四人ばかりにて、だいらのほど一日ばかり去りて、さんいうといふ所に、みそか  
 に渡り給ひぬ。その頃二位の中納言、昔この所に住みけるわうしゆといふ人の月のあかり  
 夜ける船に乗りつゝ、遊びし文作りける所にゆかしうて物し給へるに、月いみじうかすみお  
 もしろきに、花はひとつに匂ひあひたるよの氣色たぐひなきにも、住み馴れしよのそらもか  
 うぞあらむかしと今宵の月を見つゝ、思ひ出で給ふ人もあらむ。うちの御遊ありし、折々こ  
 どの春かやうに月の明かりし夜、式部卿の宮に参りたりしかばいみじう別を惜み給ひて、  
 「西に傾ぶく」とのたまひしその面かけ、かたがた思ひ出づるに、涙もとまらず。  
 「あさみどり霞にまがふ月見ればみし夜の空ぞいとこひしき」。ながめ入りつゝ、水の  
 ほとりにそひておはすれば、人の家ども所々に見ゆ。この水のはたに、松の木櫻などあるし  
 たに、いみじう老いたる人の、まつはなそらなるをばうして、かなづゑつきて、花を見わけ



つゝ、月のあかきをながめて立てるさま、繪に書けるやうにかうさびをかしたら、鬢づらひひたるわらはの團扇持ちたる、後の方に立てり。いみじうけうあるさまかなと暫し立ちとまりて見給へば、月のかほをまばりて、

「あすまでの命も知らずこよひこそあまてる月のかげもよく見め」とうち詠めたる、げにいとわはれなり。

「月かげの浮べるみづはくむまでにあはれいくよをながめ來ぬらむ」。そのほど近くおもしろき琵琶の聲聞ゆ。そのねを尋ね入り給へば、川にそひたる山の麓なる家の、口惜しからぬわてばみたるさまして作りさしたる氣色なり。人の氣色も見えぬば、とかくかまへて作りさしたる物の隈近く寄りて見れば、花いと前近くおもしろきに、月隈なくさし入りて、すだれ巻き上げて、例の事なれば、うるはしき姿にて、椽とおぼしき方におり居て、二三人ある中に弾くなりけり。そのさまいとけうらなるなかに、奥の方にそひ臥して、つら杖をつきて、つきをつくづくときがめてゐたるにしうなるべきと目とめ見るにはほのかなるかたはらめの世に知らずめでたき月影かうやうけんのおもしろさの菊見給ひし夕のやうにふとおぼえたり。うつたへにかうておぼすらむと思ひよらむやは、たぐひあらじと思ひ渡るを、かう似奉りたる人こそありけれと心もそらに亂れ、さるべきにや、のちの行くさきのたどりもなくなりて、やうやう人靜まるほどに入りぬ。いとあまましう夢かと思ひ惑へる中にも、この中納言なりけりとまざるべききさらぬば、皆心得て、そのよの人女なれど、かしこやありけむ、

いふかひなし。」誰とだに知らせで止みぬるわざをせむ」と言ひ合せつゝ、驚きあざむ氣色も見せず、后もかゝるべくてやおどろおどろしきなとしもわりて、おぼえぬ所に來にけるこそ、宮の内ならましかば、いみじうともかゝらましやはとおぼし惑はるれど、又おしかへし思ひかけず、さるべき契にてこそあらめ、今はいかゞはせむ、いかにして我とだに知らせで止みなむとおぼし續ければ、みづからもおぼしさわぐ氣色も見せ給はず、なほなほさまことになまめかしかちずのみある世の中に、これはすべて近き有様我が世のひとにつゆばかりたがふ所なく、あつかしくなまめきたをやかに、わはれなる氣色たぐひなく、かゝる人もありけるよとあまましきまでおぼゆれば、「思ひかけずかゝる契の程おぼろげならすいみじきを、この世に唯一人こそは結び置き給へりけれ。誰と聞ゆる人ぞ。今よりは片時見奉らであるべき心地せぬを、忍びて侍る所に迎へ奉りてむ」と、なくなく契り語らふに、あまましき事とももてはなれず、おのづからつゝ、むかたがたありなむとして、「心易くさやうにはえ侍らじ。げに淺ましう思ひかけぬにかばかり見え奉るちぎり遁れがたく思ひしらるれば、對面し給はむ事の難かるべきにもあらず。有様はこゝなる人にぞ問ひ給ふべき。聞えてむと、なつかしうこたへたることばけはひめでたう、なべての人とは見えす。程なく明けぬる心地するに、こゝはいとつゝ、ましき方々あるを、早うとすゝむるもことわりと思ひつゝ、わりなきに立ち出づべき心ちもせず。

「我が世にもまだ知らざりしわかつかの、かゝる別にまどひぬるかな。さるべき人々を置



きて、我ながらあやしう夢の心ちし侍るを、唯一所の御契に引かれてこそ侍りけれ」となくなく言ひ知らずる事ばかりは、我が御心にもおぼし知らるゝにいと心憂ければ、

「うしと思ふあはれとおもふ知らざりし雲の外の人のちぎりを」。うち泣きたるさまのあはれげなるに、更に立ち別るべき心地もせぬにつけても、大將殿の姫君の御事ふと思ひ出でられて戀しかりけり。げに心も知らず出でざらむいとびんなければ、「とくとおぼしたりつる事によりて、暮にも必ずと思ふを、いかでか尋ね聞ゆべき」と問ひ給へば、「今日明日は、いみじうかたき物忌きれば、こゝへはえおはしまさじ。ちやうりといふ所のそこそなるに、今二三日ありて夜さり立ち入らせ給へ。これはかりそめの所の物忌もいみじう難かるべし。つゝましかるべき人も侍るなり。御せうそくなどもこゝへはな賜はせそ。かしこにてを」といさゝか疑ふべくもわらず。慥におはすべきさま、尋ね給ふべきよしなどこまごまと教ふる氣色いさゝか疑ふべくもわらず。みづからもこよなき氣色にもわらず、その人に問へと言ひつるも、もてはなれ、かくて止むべきにはあらずかし、この世の人はありのまゝにいとたしかなめれば、うきてはあらじと返す返す頼み置きて出で給ひぬ。押し返して人を遣したれば「誠にかきがねの穴をさへふたぎて、うちも人いと多くとのゐ人だつ人集りてなむある」とて歸りきたるに、世になれぬ人にはあらざんめり、誠につゝむべきにこそはあらめ、馴れにし我が世の中だにかやうのすぢはつゝましかりしをまいて知らぬ世界にてすきすきしき名をとりひろめらるゝすぢも出で來なば、よしなかるべきわざと思ひまづめて歸りぬ。

三日といふ夜ざり、ちやうりといふ所はひの本の西のきやうなり、そこへおはして教へしままに尋ねれば「此のわたりにはさる人は聞え給はず」と答ふ。かいまみ伺へど、あはでさやうなる人見えず。心まよひして、胸ふたがりておしかへしありし所に人やり給へど、かしこるかまへてければ、そこに人かけもなし。わん内を知り馴れし世にだに人に知られじとかくるるにはえやは尋ね出づる。まいてわん内も知らぬ國に、我はかりそめのほかの人にて、夢のうちにも、かやうの事につけていさゝかもすきすきしきなん人ぞと言はれじと思ふに、尋ねべき方もなし。このちやうりには、人をそへて絶えず伺はずれど、ことごとく人かけもせず。心のうちは片時も忘れまざるゝ折なく心にしみて思ひ出でらるゝに、苦しきまで思ひわびぬ。

「荒かりしおほくの浪にそぼち來てこひの山路にまよふころかな」。その後いといたう思ひしづめりくんじおも瘦せて物なげかしき氣色、事に觸れてしるく見ゆるを、三の宮、暫しこそ珍しくもおぼえけめ、世づかぬ世界ありにくゝも故郷戀しき事まざるなめりと心得給ふに、ことわりにも心苦しうおぼされて、母后にも、「中納言のいといと世を思ひみだれたる氣色、さりげなくもてなせどしるく見ゆるかな。この世のありにくゝなりたるやらむ」と御目に涙をうけて、うち歎かせ給ふも、胸つとつぶれて、めでたしと言ひながら、後の位にて、あらぬ世の人に夢のうちにも見ゆべきちぎり、遁れ所なかりけるよとおぼし續くるに、いとそら恋しう、我が御契くちをしうおぼし亂れて、さんいより歸り給ひしまゝに、物なども



つゆ見入れ給はぬに、過ぎ行く月日かすへて、我が御心にわやしと思し知らるゝ事のみあるに、かゝるべき契にこそはとおぼすこは、うきも愛からぬためしおはれにおぼしてみかどには、男みこ三人よりほかおはしますまじと、そこらかしこきものども、考へ申したるを、我離れ居て、かゝる事のあらむをも用ゐるべきともあらず、后たちも、いとゞいかなる事をか言ひ出で給ひて、我が身もみこも、いたづらになし奉りて大きな罪に沈みぬべし、我いかさまなるわざをせむと涙を流しつゝ、おぼしわぶるに、月もやゝかさなり行けば、帝おのづから渡り給ふ時もあるに、しるう御覽せらるゝやうもあらばいかにせむとおぼして、その傾いみじきうれへとなりぬべき事を、一の后しいで給へるにことつけて、かばかりうき世の中には、みこを片時見奉らざらむもえあるまじう、帝の近くてだに見聞かむとせちに御志を背きかはならむはいと恐しうて、よろづ思ひもしりてかくて過ぐるをこたりなりと世をうらみて、みこをばかうやうけんには、さるべき人々あるべきかぎりしる奉りて、我が御身はたゞ親しくおぼし召す七八人ばかり忍びて、父おとゞの住み給ふそくさんに籠り居給ひぬるに、みこ心ぼそくおぼし召し嘆くを、帝、驚き歎き悲ませ給ふさま限なくて、父おとゞに「世を背かむ」とのたまへども「ゆめゆめ位にてあるほどになむ世の中も我が心ならず、身をえ捨てぬものなりければ、世を平ぐるほど、人のまゝなるやうにてあるなり。今暫しあらば、三の宮に世を譲りて、位を去りなむとすれば、ひたぶるに心安くて、何事も苦しかるべきやうなし。唯しばし思ひ念じて、みこの御世を待ち給へ」と日々に書きて賜はすれば、父おとゞ、さらで

だにさばかりの御有様を空しくなさむとおぼしなむや。かゝるにつけても、いよいよたのもしくめいぼくありてよろづに聞え慰め給ふ。后は帝の書きて奉らせ給ふ御文を見ても、かゝることの聞えあらむに、我が身はやがて、いたづらになりなむするぞかしと心をくだき涙を流しつゝ、法華經を讀み、行ひをのみし給ひて人にも見えむかひ給はず、佛の御前にのみ夜晝おはす。世の中にも、遂にこの后を、さやらの内にもえわらせ奉らざる事と哀がるを、中納言、ひしれぬ思ひ絶え難くなりまさるにつけても、この後の見し人にも、いとようおぼしも見奉らまほしうて、我が心にもいさゝか慰めやせむと心をかけ奉るものと、いかにおぼして遙かにこもり居給ひぬらむとあはれに聞き奉り給ふ。かうやうけんには、いかにいたらしめりおとなしくおはしますに、参り給へれば、いみじう嬉しうおぼえて人の心からさかしきやうにはあれども、この世はかるむる事もかく堪へ難くもてあへる事も、だうりなくなどして、人の心なさけなくゑしやく少き所もかゝる世界におはせむも恐しう、又歸り給ひはむも、いみじう心細かりぬべきなむと思ひわびぬる。いかにとらち嘆かせ給ふを見奉るに、ほろほろとこぼれてよろづこまかに申し仰せられつゝ、「宮をも見奉らねばいとわびしう心細きを、かくておはするを見れば慰む心地するに、籠りおはせむほどこれにおはせ」とて、御やすみ所めでたくしつらひする奉り給うて、御遊をし文を作りつゝ、かたみに御心慰め給ふ。みこも世を恨みて、うちにもをさをさ参り給はず唯この中納言とおはします。后のおは



しまし、ほどは、人の物いひつゝ、ましかりしを、心安くのたまふにも、ひまひまにはうちながめつゝ、

「春の夜の月のゆくへをしらずしてむなしき空をながめわびぬる」。うち泣き給ふ折々の氣色、わはれに心深げなるを、みこさりげなくて、耳とゞめ給ふに、故郷を戀ふるのみにあらず、覺束なく思ひ給へる事こそありけれ。この世には、誰ばかりかこの人心をみたすべきはあらむ、春のころはひよりは、あやしと見知らるゝ氣色なるに、月のゆくへを知らぬよし言ひつる、あるやうある事なんめり、かへすがへす誰ならむと、かたぶき思さるゝに、六月つごもりに、だよりより南に、大きな川流れたり。その川の名をちやうかといふ。三のみこ、中納言ぐし給ひて、御はらへしすゝみたまふ。おもしろき事限なし。住み馴れにし國の大井川、宇治川などやうにはやく大きな川なり。水のはとりに錦のひらばりうち渡して、あぐらどもを立てすゑて、文作り遊び龍頭げいすの船つけてみなかくしつゝ、いみじうおもしろし。ささきをこそはしたなめ奉り、山深く籠り居給ひしかど、みこの御有様のかしこくめでたくて、世にはけたれ給ふべくもあらず。帝も限なきものに思ひ聞え給へれば、かやうの御ありさのほどなども、かくかしづかれたまふさまはいとことなり。中納言のかゝるにもまぎれずおぼさるれば、いと涼しき水のはとりに、つら杖をつきて、つくづくとながめ入りたるに、かたちの似るものなく清げなるを、人々めでたしと見るに、みこも目をつけて御覽じて、居給へる所に立ち寄り給ひて、

「こひしさをみそげど神のうけねばや心のうちのすゞしげもなき」。ほゝゑみてのたまはする、いかでか心え給へる、我が心のうちぞとおそろしきまで心はづかしければ、

「みそぎ川かはせの神にことふれてまたこそ知らねこひの心を」。七月七日に、だいに、西王母、東方朔などいひける人の、今日は行きあひけるほうかでんといふ所にて、帝、文作り遊びま給ふに、中納言召されて参り給へり。この帝、御かたち心なまめきて遊の道に心を入れ、強くさかしき方は後れてや物し給ひけむ。一の大皇后たちに、よろづ劣りくひたれて、さばかり御心に入れておはせる、かうやうけんの後を、跡絶えてものし給ふは、強き所をおはせざるべきと中納言は推し量り給ふ。暮れかゝるほどの夕風の涼しう吹きて、月さし出で、おもしろきに、帝空をいたくながめ給ひつゝ、「天にあらば比翼の鳥となり、地にあらば連理の枝とならむ」とおし返しつゝ、ずんじ給へる御氣色、後の御事を思ひ出で給へるあるべしと中納言心苦しう見奉るに、盃まゐりてさし賜はするを、たまはりて、

「かはしけむ契の枝のかひぞなきと霞山どりのよそに見ゆれば」と奏したるに、心えてけりとおぼすに、え堪へずしはたれ給ひて、

「契りけむむかしの空にたとへてもつきせぬものは我が世とぞおもふ」。かやうにいみじうもてはやされて過ぐせど、心の中は、夢のやうなりし事を心にかけて、さりとも我がよの人ならましかば、いみじくつゝ、む事ありとも、いとかくは跡絶えざらまし、女も誠にゑさくなく、心憂くもありける世の人かなと、せめて思ひおとせど、雲の外の人の契はと、うち泣



きて答へしけはひありさまは、すべて世々を經とも忘るへうもわらず。いみじう戀しうわり  
 なるなりたる故郷も、この人におひ見で歸らむことは、えあるまじう思ひ渡る程に、秋も深  
 くなり行く。いとゞしく夜長きねざめも、さまざま物のみおぼゆるに、思ひわまり世の中の  
 氣色、煩はしからぬにはわらねども、能く似給へりし心地せし后を思ひ出で奉りて、忍びて  
 宮の御せうそく取りて、そくさんにまゐりたれば、山のさま高くはげしくて、瀧の落つる水  
 のながれ、草木のなびきもよのつねならぬさまに、大臣の御すみか、いとみじうおもしろ  
 くめでたし。源平三 とくもわらず、かすかに心ばそげに 源平三 とてしめじめとあるに、后は  
 月 なしうなり給ふまゝに、風の 源平三 に添へてもあみたを流し 源平三 けかたちも見え給は  
 ず、佛の つと籠りて、昔今の事をかね、悲しうながめ出で、行ひつゝ、「日の本の中  
 納言参り給へる」とて、宮の御せうそく取り入れたり。かう聞き給ふに、胸つぶれ給ひぬれ  
 ど、さこそいへ、かしこき人の御心に、彼も我と知りたるにもわらざりき、みづからも、夢の  
 中に心を通はす事もなきに、いとあさましきちぎり、さるべきにこそとおぼし知るには、人  
 をうとく思ふべきにわらず、さきの契こそ、心愛くうらめしきわざなれと、つくづくとおし  
 返しおぼすには、あはれも淺からで、わざと尋ねられたるに、宮も世の人には似ぬ心なり。人  
 づてならで逢へかしとおぼされたるは、おぼすやうこそあらめとおぼして、み堂の口にしと  
 ねさし出で、「こなたに」とあるに、歩み出で給へる、山蔭にて見るは珍しく、目も輝く心地  
 するに、后もさすがにおぼされたれば、少しのざり出で、御覽するにつけても、おぼすこと

224488

もど多かりける。御せうそこ申させたるに、答ふべきかたもなければ、

「よのうさにしをらで入りし奥山になにとて人のたづねきつらむ」。仰事なるに、所から  
 かこのあはれもえ忍び難うおぼされて、うち泣かれ給ひぬ。

「をちこちの知らぬ山路もなかりけり深き心を入れて思へは」。うちもともぞめぞめとし  
 て、みすの内のにはひ、えもいはずかをり出でたるなど、春の夜の夢の名残、いまだ我が身に  
 しみかへり、その夜通ひし袖の移り香は、ひやくぶんの外にもとほるばかりにて、よのつね  
 のたきものにも似ず、飽かず悲しき戀のかたみと思ふにはひにまがへる心ちするに、思ひも  
 よらずながら、すゝろに涙もとゞまらず。あるじの大臣、かく人おはしたりと聞き驚きて、い  
 みじうゆかしと思ひ渡る人なれど、山深きすまひ、その事となりては何につけてか立ち寄り  
 給はむと口惜しう思ひ渡りつるに、喜びながら「こなたに」と御せうそこあり。五十よばかり  
 にていと清げなる人なりけり。中納言を見るよりほろほろとうち泣きて、我がむかし日本に  
 渡りて年經し有様などこまかに語り給ふ。これはすべて、いさゝかあらぬ世の人と覺えず、  
 唯我が世の人に違ふ事なし。物言ひ有様もよのつねなれば、なつかしくおぼえて、物語こま  
 やかにし給ふに、うちとけ、この後の御母に別れし程の事など、語り出でたるまゝに、いみじ  
 うあはれなり。遊し文作りなどして、明けぬれば歸り給ふを、飽がすいみじとおぼせる事限  
 なし。朝ぼらけの山蔭こぐらぐら霧り渡るに、後の御方の妻戸おしわけてかんざしうるはしく  
 れいの繪に書きたるやうなる人々さし出で、見送るに、立ちかへりやすらひつゝ、



「朝霧の峯にもをにも立ちこめてかへらむかたもえこそしられぬ」とのたまへば、  
「をに立つや山のかひなる朝霧りの晴れずばしはし立ちとまれかし」と答へたるも見し  
世には變らず。この大臣の日本の人に馴れ、母宮もかの世の人なりける故に、この後の御あ  
たりの人はかゝるなんめり。一の大臣の有様、人々の物言ひなどは見も知らず、誠にあら  
ぬ世とこそおぼえしかと思ひおぼはするに、遂にゆくへも知らず思ひ歎かする人のけはひあ  
りさま、その國の人こそ又かくはありしか。このおとこのへんの人にやありけむ、ことひと  
はかゝらざるをなどつくづくと思へども、尋ねあふべき方もなきまゝに、うつり香しみし  
戀の衣ひさかけつ、

「なかなか我が身にしむもわびしきに何とまされるにはひさるらむ」。何となく冬に  
も寄りぬ。かのそく山の後は、このごろにやとおぼすに、帝にも、今一たびお見奉らさず、み  
こをも見奉らで空しうなりなむ悲しさを覺し入るほど堪へ難きに、いさゝか例にかはり惱  
み煩ひ給ふ氣色もなくて、唯袖のうちより生れ給へるやうにて、中納言の顔をうつし取りた  
る男にてぞおぼはする。すべてへんけんのことなり、いたく惱み給はましかば、いかにせまし  
と、嬉しさに物おぼえず、心しりの人、二三人あつかひ奉る。後は、おはれみこの生れ給ひし  
をり、帝、父おととおぼし喜び世の中にかしづきあつかはれし有様、この時おぼしおぼはする  
に、いと心憂けれども、又いとおぼはれにもおぼされて、この人を御覽するに、契の程も淺から  
ずおぼしつゝけ、今はいかゞはせむ、事なくたひらかにおぼはするにます事なく、おぼし喜び

て、心まりの人々、わたくしに忍びたる事のやうにて、さるべき人のちあるなどもとめて、私  
に忍びてありける事のやうにて、隠し養ふに、日々にものを引き延ぶるやうにて、ゆゝしき  
まで美しくしげに大きになり給ふを、后もみそかに時々見奉りて、いかなるべき人にかとさす  
がにおぼはれにおぼされけり。かゝることを中納言いかで知り給はむ。その年もかへりぬ  
れば、帝にも母上にも、三年がうちに行きかへるべしと、いとま申してしほどにもなりぬ。今  
年は歸るべしとおぼすに、おぼはれる事多かる中に、つひにこの人を見ずして歸るべきにや  
と思ひわびぬ。かくかへりぬべき心づかひを、帝より始め奉りて惜み思はぬ人もなくて、「い  
にしへは十二年をだに過ごしてのみこそ歸りけれ、五年をだにすぢし給へ」とあつまりて惜  
みつゝ、出し立つべうもあらぬどもさすがつひのすみかと思ふには心もあくがれて、母上  
を始め大將殿の姫君など戀しく覺束なき人多く、この世の人の心強く、深く我が事見聞か  
れて、かう思ひ歎かせて止みぬる事も心うければ、さはれ行きかへりなば、おのづから慰む  
事もやと思ひたてば、とゞまるべきにもあらぬを、みこもさるべき事ありとおぼせば、えも  
とゞめ給はぬものから、この世には又いつかはと心ぼそく悲しげなる御氣色を見るにぞ、よ  
ろづくらされて、「やがてかくてもありはてぬべき心地しながら、母上のさばかり思ひ惑ひ  
侍りしを見すて侍りにし。この程にいかゝなりはてぬらむと覺束なきになじ思ひ立つ」と申  
し給へば、ことわりに今暫しとだにいふべき事なし。身を代へたるわれにより、殊にありが  
たき道をふり離れ渡りたるに、ましてけにおもかはりせぬ親を、覺束なく思はむ、言ふ方な



きことわりにて、唯物も聞し召さず、御遊もなくて惱み煩ひつゝ、母后をいみじう戀ひ申し給へば、帝もいと覺し驚きて、そく山の後かへり給ふべき宣旨まきりになるを、后もこれにはじめぬ大方の世をやがて厭ひはてむとだにもわらざりき。唯わびしかりしほどの事を、帝に御覽じつけられじとつけ、思ひ入り給ひにしことなれば、何かはみこもいと覺束なく戀しうおぼえ給へば出で給ひぬ。帝いつしかみゆきして見奉り給ふに、久しかりつるおこなひ、ものおもひにうちおもやせ給へるしも、いと似るものなく、美しくげさまさりたまふ。限なくわはれと御覽じて、やうしうのうちに、明暮ならべておはしませぬを、なべての世あぢきなく心愛くおぼさる。后も我が身のちぎりそら恐しうおぼさるれば、更にうちとけ給ひても御覽せられ給はず。后たち大臣山深く籠り給ひしを、少し心安しとおぼし、に、又かく出で給へれば、絶えず渡り御覽じつゝ、めづらしういみじうおぼしませるを、いとねたくわびしとおぼして、又いと聞くに、おそろしきことども出でくれど、后出で給ひては、みこすしおぼしなごさみてものきこしめしなどするをうれしく見たてまつりて、猶この中納言歸り給ふべきほど近くなるを、あつまりてをしみ悲みきこゆれど、さすがにといむべき方なくて近くなりぬるを、みかど、この人三年がほどかくてありつるを、よろづの道々の有様、我が世にこれよりまさる人なかりければ、この人珍しうき、も見も驚く事なくてやみぬるが、日本に歸りて思ひ出でむが耻しかるべきかなとおきふしおぼし召して、我が世にすべて思ひを驚かすべきこと夢ばかりもなし、かうやうけんの後のかたちありさま、きんの聲を聞かせたらばしも、かゝること、さはこの世にありけりと、そればかりにや驚き思ふべき事

ならむ、后と知らせて見せ聞かせむは日本に聞き傳へむも輕々しかるべし、この中納言この世に久しくあるべくばこそ、もし心にかけてあるまじき思ひやあらむとも危ふからめ、后とはかけても知らせで、唯やうしうのうちにある、下藩などのやうにて見せ聞かせて、我が世のおもひいでに思はせむとおぼし定めぬ。歸らむ事は、九月つごもりと定めらるゝに、八月十五夜は、わかれの宴して月をもてあそぶに、常よりもいみじう事ども整へて、ひやうさうといふ所は、日本にとりては、冷泉院などいふ所のやうなり、池十三ありて、めでたくおもしるき事類ひなきに、月の宴ありて后にはかくともけしき見せ奉り給はず「唯日本の中納言歸りなむとするに他かずわはれなれば、別を惜みてひやうさうにて十五夜の宴せむとするを、ことごとしうは所せうもありなむ。かたへのうらみども、いとむつかし。唯御供にさるべからむ三三人ばかりにて、いと忍びて御覽せよ。中納言今とは思ひて、道々の事をしむてなく盡さむにはいみじからむを、この世に又はいつかは見るべき事にもあらず。見給はざらむも口惜しかるべし」とのたまはず。后、かけてもおぼしよらず、かく仰せらるゝも胸ふたがりて、顔の色もたがふ心地しながら、「げにそのほどの御有様見ざらむは口惜しければ、いとよう侍り。忍ぶとすれども、隠れなくば聞き苦しうや」と申し給ふに、「そはなごてか、ことごとしうはあらむ。いみじう忍びてこそは」とて、曉にだいに裏の女房のまづさきだちて参るやうにて、物の音聞き知りぬべき女房二人、いみじう忍びて渡り給ひぬ。御供に仕うまつるをのことも、宮の女房ども、物見るとぞ心得たる。辰の時に帝こゝに渡らせ給ふ。いみじうおもし



ろきひやうさうのうちを、いよいよかにせむと御心を盡して、輝くばかり飾りつくるひ、大臣公卿道々の物のじやうすども、少しもをしむてなくつくして、この中納言に見せ奉らむと心おこせる舞のすがた、樂の聲、珍しうおもしろきに、中納言に別れぬるかなしみの心の題出して、この國の名を得たる人々文作れる。この文の心はへおはれに悲しき中にも、中納言の作り給へる、更に涙とゞむる方なし。さまかたち、誠に光を放つやうなるを、后もつくづく、みすの内にて見給ふに、口惜しかりける契と、なげかしうおぼし渡れど、今日の有様を見るにはそのうらみも忘れて、見ず聞かずなりなむおはれもかぎりなく、涙も落ちつゝ、暮し給ふ。夕風心ほそく吹きて、御前の前裁、いろいろひはときわたす程、御遊はじまる。中納言の琵琶やうの琴にとりかへつゝ、秋風樂をいふ限なく彈き給へる物の音かたち譬へむ方なきを、帝來しかた行くさきおぼされず、御やすみところに入らせ給ひて「この中納言の有様、何事につけてもすべて我が世の人のこれにならぶなかりけり。いみじう耻しう口惜しう思ひめぐらせど、少しも珍しく驚く事なきに、我が世のおもておこすとおぼして、やうしうのうちなる下臈と思はせて、さんを彈きてこの中納言に聞かせ給へ」とねんごろに仰せらるゝに、后いとわるまじき事とおぼしたるを、せちに度々、「けふ我が國のおもておこし給ふらむよろこびには、世の亂れ出で來む事も知らず、三のみこに位を譲りて見せ奉らむ」とまめやかに仰せらるれば后驚き給ひぬ。その世の人、いたく物耻などやせざりけむ、「ともかくもさらばの給はせむにこそは」と申し給へば、喜びて中納言をみすの内に召し入る。いかなる事

にかと思ひながら、動きなうもてないて参りたれば、おはしますそばの方のみすすこし巻き上げて、蘇芳のすそごのざうがんの几帳ひとへうちあけて、柱がくれにそばみて、麗しく清らかにまやうぞきくたいひれなどしたる人の言ひまらすめでたき御前に侍らふとばかりはかなるそばめに見て、いみじう畏まりて辭 給ふに、「三年がほどかくて物し給ひて歸り給ふが他かすおほきなるうれへと涙とゞめがたきに思ひあまり、こゝなる人のさんの聲聞かせ奉らむと思ふなり」と仰せらるゝ御答ともかくも聞えさせずして、あざやかに居なはりて、扇をうち鳴らしつゝ、「あなたふ」と、うち出で給へる聲のおもしろさは、さまさまの物の音を、しらべ合せて聞かむよりもまさりて聞ゆるに、さん押し寄せ給へれば、うちはおきて柱にかくろへたれど、さゝやかにらうたきやうだい、後の菊見給ひし夕おもひ出でらるれど、うつたへに、后をかくてする奉りて、彈かせ給はむものと思ひよらねば、さりげなきしりめにとゞめて見れば、春の夜の月かげに見し人と見ゆるに、目もくるゝ心地す。さんを度々そゝのかさせ給へば、かんすといふ手を彈き出でたる、いふ限なくおもしろきに、このさんのねも、菊の夕の御ことの音なるを、同じ物の音などいひながら、いかでかはかくたがふ所あくてはあらむとあやしう聞き惑はるゝに、かたちありさまの似るものなくにはひをちらしめでたきさま、村雲の中より、望月のさし出でたる光を見つけたらむやうなるほど、かうやうけんの後の菊見給ひし夕、春の夜の夢、ひとかたに思ひわたさるゝ程の悲しきことの限なきに浮雲だにたなびかず、さやかに澄める月に、后もいみじう物をあはれとおぼしと



どめて、琴のてうし調べかはし、心ゆくかぎり弾き給へる、空に響きのぼりて聞ゆ。空穂の物語のないしのかみの弾きけむなむ風はし風の音も、かうはわらずやありけむと思ひやらるるに、來し方行く末かぎりなき心地して、心強く思ひといひれど更に涙といまらぬに、帝さればよとおぼして御覽するに、中納言日本の第一のならばなき人なんめり、后我が世のたぐひなきかたち御覽じくらぶるに、月日の光を並べて見む心ちして、我が世にかく珍しき事を見聞くよと、世のためしにもかきといめ語り傳へつべくおぼし召さる。中納言え堪へず琵琶賜はりて、思ふばかりの手を限なくかき合せ給へる、いふ方なくおもしろくめでたきを、后もあはれと聞き給ふまゝに、御心もすみ涙も落ちて、御心に入れて弾き給へる、すゝろに聞く人涙といまらで明けぬれば、帝后かへり給ひぬ。中納言、后とはいかでおぼしよらむ。春の夜の夢に見し人、かたちも琴の音も、后に似奉りたるにこそと思ふに、猶わやしく尋ね分くべき方なき心地して、我が心にいたく劣るまじくかきしきものを、かのさんいうにやり給ひて、そのわたりをよくたづぬ問はせ給へば、「かしこはかうやうけんの後御志そくにて、宮の御身に添ひて、いとやどとなきものにおぼされたる、女王の君と申す人の家なり。あまり此所には程遠しとて常にも出で給はず、ちやうりのそこそなる所になむ出で給ふ」といふ人あり。歸りてかうかうと申せば、さればこそ後の身離れぬ人にて、かたちもことの音も似奉るにやありけむ、さては猶あながちにありがたかりける人の、跡絶えて見え知られじとかまへけるは、後の御身に近くあらぬ世の人に馴れじとにやとぞおぼさる。暮しはてむ

心もとなくて、あはれなるゆふべの物思はむ人すぐすまじきほどに立ち寄り給へれば、人はし近く花ども玩ぶけしきにて、この曉こゝはといひし人のけはひもすると聞くに、嬉しう胸つぶれて、立ち寄り給ふを、さなめりと見るに、ささざきは跡絶えて、見え知られじと隠れしかど、この人歸り給はむするぞかしと思ふには、人知れぬ人の御事など思ひつけ、さすがにささざきのやうには、人影もせず隠れぬものから、いたく忍ぶ氣色にて、猶見も知らずがほに答ふるを、人のほどさばかりにこそあんなれと、かうしもやと心やましうつらければ、

「あはれしる人こそさらになかりけれ今はとおもふ秋のゆふべを。」さまよう涙おしのごひつゝ、いみじう恨みしをれて立ち給ふさまの、さし方行く末の事もおぼえず、めでたくあはれにおもほゆれば、ひはにとまれといふ手を、いたくすまして弾き出でたれば、立ちかへり、やり水のはとりなる岩のうへに休らひて笛を吹き合せ給へる、よろづ涙といめ忍ぶべき心地もせずなりて、名残なく、みすの内に入れ奉りて、人々に物など言はせて、女王の君思ひつゝくるに、后そく山を出で給ひしよりこの若君を預りて、我も此所にゐて居つゝ、月日にそへて引き延ぶるやうに、めでたく美しくしき后、中納言の御有様を、一つにとり合せたる顔つきして、このごろやうやう立ちありきなどし給ふを、あはれに悲しう見つきて、うしろめたさに、おぼろげならでは宮にも参らず、明けても暮れてもあつかひ聞ゆるを、親子の契、この世の事にもあらざんなるをかゝる事なども知らせで止み給ひなむが罪深く哀にもあるべ



きかなと、歸るべしと聞くにつけてもおぼえければ、物めでをしあはれを知る方も心弱く、さすがなる世にやありけむ。日本ならば、さばかりにては、知らせでも止みなましを、さかしき所ある世の人にて、深き物かくしとおぼしき事などはなき世なるべし。女王の君むざり出で、物などいふ氣色しるう聞ゆれど、雲井の外といひしけはひにはあらず、はらからなどにやとおぼして、あさましう思ひわびつる月ごろの心の中をなく言ひ恨み給ふほど、いとらうたげなるにえも忍ばれず、「かくも聞ゆまじういとそら恐しき事なれば、やがてかくて跡絶えてやみぬべき御事なるを、さる事はこの世ならず罪深き事に申し侍ればなむ、知らぬ國にもこの御事の聞えむはいとはしかるべき事なれど、少しも心おはせむ人、ざりとも世を隔で、も世に漏させ給はじ」と思ふやうなど言ひて、始よりの有様こまかに語り出でたるに、かくしたらむに、我が世の人ならば、今になりてかく顯はし出でざらましを、九百九十九人の王の數に入りて、歸り來たりけむ人のまことよりも、夢のうちの夢よりも、げにいかなる涙か流れ出でむ、后とはかけても思ひよらで、何心もなくかうやうけんに参りまかんでつるを、いかに見給ひつらむ、おぼろげならぬ契の程思ひ續くるにいふ方なくあはれなり。若君抱き出で聞えたり。いひしらす美しげにて、事しも見知りかはにて、うちゑみて抱かれたり。我ながらも、心強く思ひたつかなと思ふ道を、この契にひかれけるにこそと、かきくらしつゝ、さまたま思ひ續けらるゝに、我がすぐせもいとなべてならず、この世にてはさすがに深きと見し夢も、さだかに思ひ合せられぬ。ひやうさうにてきん彈き給ひしもこの后にてこ

そおはしけれ、いかですぐれたらむ事見せ聞かせむとおぼして、后とは見知らじとかまへられたりけると心得るもいとさま變りたり。とてもかくてもこの人の心にしみ思ひとめ奉るべかりけるほどを淺からぬに同じ世のうちにてだに聞き奉るまじき悲しさも身を責むる心地ぞする。かくて後は明暮このちやうりにおはしつゝ、見給ふに、若君いとよう馴れて、いみじう附きまとはし給ひて、出でなむとするにも慕ひて泣き給へば、見捨つべきにもあらずでぬて渡りなむと覺す。「この世に侍らむも唯しばしなり。今一度聞ゆべき事ひとことなむ侍るを知りながら、すきなきしきあやまちならばこそ罪も負ひ侍らめ。菊の花御覽せし夕より又いかで見奉らむとはかり心にしめて思ひ渡り侍りしかども、かうまでは思ひかけず、遁れ難き契のほどざりともおぼし知るらむを、この世にかくてめぐらひ侍らむ程、今一度聞えさせむ」と、なくなく責めわたり給ふ。女王の君聞きわびて、宮に参りて、我が言ひ出でたる事とはなくて、「この中納言、菊の花御覽せし夕の琴の音をも聞き、御有様をも見奉り知り給ひければ、あやしと思ひ渡りながら、さしもやはと思ひ定めがたく思ひわびしを、ひやうさうの月の宴の日、御琴をも聞き、ほのかにも見奉りあはせてければ、尋ねおはして、わか君をも見奉り、かたがたなむいとわりなく責めいられたまふ」と申すに、いとあさましく、知られ給はで止みなむをだに、たけき事にせむとこそおぼしつれ、悔しく口惜しうも見しられにけるかな、げに人のをこたりにあらず、さるべきにこそはと思ひ知らるれど、ざりとは我が心にしるしる、今一度のゆきわひはあんべい事かはと思し絶えたり。げにのたまはするさきの



世の契遁れ難く思ひ知らるゝ事なれども、さりとして我がため人のため、今更いとあいなくびんなかるべきわざなるを、みこいとわはれにおぼしめだれ惜み聞え給ふさまなどのこの世ならずわはれなるを見るにも、よろづの思ひ知らるゝ事多く侍れども、同じ世にだに今いくかゝは、聞きかはい奉るべきにもあらず、夢のやうなりけるさまの世の契のほどぞかしとばかりおぼしけちて止み給ひぬれど、さすがにいとあるべかしうなつかしきものから、思ひよらず言ひ放ち給ひ、いふかひなく悲しけれど、かばかり恐ろしかんめる知らぬ世にげにいささかにも事の聞え出で來なば、我がため人のためいみじう便なかるべき事ぞかしと、思ひとどむるしもいふ方なくせき難く堪へがたきに、すがすがしう出でたゝむともおぼえず、唯人知れず若君を見給ひつゝ、思をまし胸のひまをもわけつゝ、過ごし給ふ。九月にもなりぬ。歸る方もおぼえず、さりとしてかくのみ年月を過ぐさむもさすがにありべき事にもあらず、母上もよを経て夢に見え給ふ、さりとも、今はと待ち給ふにやあらむ、いかゞなり給ひけむ、といまらむ事も悲しう、今一度わりし夢を見合する方なくて、速に歸りなむも堪へ難く、中ぞらに身を責むる心地して、年ごろ常なき世のわはればかりを思ふよりは外に、さしわたり心づくしなる事をばなくて習ひにし身の、この世もかの世も、なのめならぬ思ひに惑ひて、道の空浪のうへにて、すゝろにさすらへぬべく思ひわびつゝ、出で立ちやらで、ほればれしうながめ居給へり。后も人知れぬ若君を、女王の君忍びて時々見せ奉り給ふにも、心憂きものからわやくわはれも限なきに、中納言とゞむべきにもあらざんなるを、許し取らせてこの世

ながら聞きかはずべきにもあらず、行くへも知らず思ひなしてむもいみじうかなしう、さりとして事のまされあるやうもあらぬ有様を、この世にとゞめ置きても、生ひ立たむ程はいかゝと、物悲しう言ひ遣るべき方なし。さらでだにある世の氣色を、まいていかなる事か出で來むとおぼしつゝくるに、中納言、中ぞらに思ひわび給ふ心の中にも、をさをさ劣り給はず、ありがたう、よろづを心強う思ひとれる人ともなく、思ひわぶるさまを聞き給ふに、いとわはれにおぼさるれば、

「風さわぐ浪のうへなるふねよりも思ひたゞよふなにゆゑにぞも」とあるを見給ふ、なのめならむや。

「浪のうへの小船は泊ありと聞くたゞよふ水に思ひこがるゝ」。人の問ふまでほればれしうなりにけるも、あまりにならばこの世の人に思ひおとさるゝ、たがひめおのづから出で來むも、今更にあいなし。大將の姫君を見すて母上を見置き奉りし心地、いかばかりかはいみじうおぼえし。かばかりに思ひ立ちぬる道を、心弱くとまるべきかはと思ひ立ちしは、かゝる契のありけるにや、たけう漕ぎ離れにしいふかひなくて過ぐされずや。まいてこれはかくてのみあるべき世にもあらず、さもわれやと心強く思ひ立ちて、若君はおくらかすべきにもあらねば、忍びてゐて渡るべき心づかひにて、はたすべうもあらぬを、后いとわはれに悲しくおぼされて、いかなるべき事にかと、泣く泣く寝入り給へる夢に、「これはこの世の人にてあるべからず、日本のかためなり、唯とく渡し給へ」と人のいふと見て、さらばと思ふも



いとわはれなり。我もかの國に生れて母君の御身を離れて渡り來しほど、かくこそありけめ、今はとて別れし曉、抱き給ひていみじう泣き給ひし面影は、今に身をはなれぬ心ちす、そのかはりに又これを渡してむする悲しさ、母君のおはしけむもかばかりにこそありけめ、事のむくい、げにあるわざにこそとおぼしつゝ。あさてばかり歸り給はむとの夜月隈もかく明きにかうやうけんに登り給へり。みこえさらぬことにて、惜みとゞめさせ給はぬものから、おぼしわびたるさまいみじうたぐひなくわはれなるを、はじめ常に立ち馴れつる宮の中の木草のなびき、水の流も立ちはなれ難くおぼゆるに、なかなかとかくも聞えやるべき方なれば、唯つくづくと人まにはながめ給ふに、やうやうしづまり更け行く程に、後の御方に召しあり。いよいよいみじうもてしづめてつゝいぬ給へる、月かげ常よりも殊に見ゆるを、みすの中の人涙をとゞめがたし。みこもこなたにおはします。「さかづき、人々御前近く候ふにや」と聞えて、やをらぬざり出で給ふ。御にはひいひしらす薫り出づるにも、我が身にしみかへりたりし春の夜の夢の名残にかはらぬを、心まどひせられて思ひ出づるに、「宮のこの世ならず思ひ聞え給へる御氣色見知り侍りにしより、見る世の人よりも、わはれになつかしう思ひ聞えながら、さすがにすゝるにやと人目もつゝ、まして聞えざりつるを、今はとおぼし立つ程、盡せずおぼし歎きたんめるも心苦しう、ざりとともげに限ある御有様をばいかいと見奉るも、人やりならず思ひあまりてこそ」などのたまへる程、けはひありさますべてとはどほしう變りたる事まじらず、あてになつかしう匂ひ満ちたる御氣色、聞く心地いかでお

ろかならむ。つゝみあふべくもなく騒ぐ心をわりなく静めて、いみじう畏まり御いらへ聞え給へる」などいふも愚にめでたし。后「身の有様おのづから聞き給ふやうも侍らむ。母に物し給ふ人は、日本にぞおはすらむ。聖のわたりしに、若し世の中に、さる人や物し給ふと問はせしかば、大内山といふ所に尼にてなむおはすと聞きしとかたり侍りしかば、歸り渡りしにつけてせうそく聞えしを、世にだにおはせば、ざりととも確に告げ侍らむ。そのひとり、ざりとともあだにはせじと思ひ給へながら、いみじう覺束ちう侍るに、これより後さるべき風のたよりにもありがたくこそと思ひ侍りてなむ。よしなきやうに侍れども、必ず御心に入れて尋ね聞き給ひて、これたしかに傳へさせ給ひて、かの世界の人は、絶えずわたりくるやうに聞ゆるを、あだならずおぼしかまへて御返り見せ給へ。世になくなりなきと聞き給はゞそのよしをも書きつけてこの箱はかへし給へ」とて沈のふみばこの少し大きなるをさし出で給ふまゝに、誠にいみじう泣き給ふけはひの春の夜の夢にかはらず、なつかしうなまめきたるに、忍びもあへず、大方の世のわはれにことつけて涙せきやる方なう流るゝを、あながちに忍びつゝ「浪のうへにもさすらへて命絶え侍らずば、罷りつかむまゝに深き心の及び侍らむほどは尋ね聞えて傳へ奉りつゝ、御返りは例なき事に候ふとも、みづから必ずもて渡り侍らむ。ともかくもこのあない聞き召さずば、罷りもつかぬわたつ海の底に道のそらにて空しく捨てにける命にや思しめせ」など申し給ひて、日本には、したの通ひこそ亂れがはしくもあれ、后女御の前にて、かやうになど仰せらるべくもあらぬを、この世はさびしながら、さすがに



まどけなくこそとありけれとおぼせば、このついでに、忍びがたき心の中をうち出でぬべきにもさすがにあらすわりなく悲しきに、みこも少し立ち出でさせ給ふに、御まへなる人々もおのおの物うちいふにやと聞ゆるまぎれに、

「二たびと思ひわはするかたもなしいかに見し世の夢にかゝるらむ」。いみじう思ひて紛らはし給へり。

「夢とだに何かおもひも出でつらむたゞまほろしにみるは見るかは」。忍びやるべうもあらぬ御氣色の苦しさに、いふともなくほのかに紛らはしてすべり入り給ひぬ。おぼろげに人目思はずはひきもとめ奉るけれど、かしく思ひつゝ、うちよりみこ出でさせ給ひて御遊はじまる。何の物の音もおぼえぬ心地すれど、こよひを限と思へば心づよく思ひぬんじて、琵琶賜はり給ふも、うつゝの心地はせず、みすのうちにはさんのこと搔き合せられたるは、ひやうさうにて聞きしなるべし。やがてそのよの御おくりものに添へさせ給ふ。今はといふかひなく思ひ立ちてぬるを、いとなつかしうの給はせつる御けはひありさま、耳につき心にしみて、肝消え感ひ更に物おぼえ給はず。日本に母上を始め大將殿の姫君に見馴れしほどなく引き別れにし哀など、たぐひわらじと人やりならずおぼえしかど、ながらへば、三年がうちに行き歸りなむと思ふ思に慰めしにも胸のひまはありき、これは又かへりみるべき世かはと思ひとぢむるに、よろづ目とまり哀なるを、さることにて後の今一度のゆきあひをばかけ離れながら、大方にいとなつかしうもてなしおぼしたるも、さま殊なる心づくしいとや

まさりつゝ、我が身人の御身さまさまに亂れがはしき事出で來ぬべき世のつゝ、まじさをおぼしつゝ、めることわりも、ひたぶるに恨み奉らむかたなければ、いかさまにせばと思ひ亂るる心のうちは言ひやる方もなかりけり。いとせめてはかけ離れなさけなくつらくもてなし給はしいかゞはせむ、若君のかたさまにつけても、我をばひたぶるに覺し放たぬなんめりと推し量らるゝ心ときめきても、消え入りぬべく思ひしづみて、暮れ行く秋の別れ猶いとせちにやるかたなき程なり。帝、春宮をはじめ奉りて惜み悲ませ給ふさま、我が世をはなれしにも、立ちまさりたり。まことや、かのやまひをやめし一の大の君の許よりえもいはずわはれに悲しくおもしろき文を作りて奉りけり。からの薄紫の紙に書ける文字のつくり筆のさきり、いとかしこくおもしろき奥のかたに、

「今や訪ふけふや見ゆると待ちつゝもおなじよにこそ慰めてけれ」。さえある人とは聞きつれど、すべてからやうけん御あたりよりほかの事はおぼえて過ぎぬるを、誠にかしこくありけるかなと驚かるゝに、今はと思ふにわはれも添ひて、御かへりの文に、これもそへ給ひて、

「別るべき後のなげさを思はずは待たれましやはあさなゆふなに」。明日とてからやうけんに参り給へれど、今宵はよべばかりの御聲をだに聞かず、涙を流しとめつゝ、つひに逢ひ奉ることなくて別れ去りなむうれへ、世々を經ともやすむべきにもあらず。

「いとせめて結ぶばかりにわらずとも言の葉をだに聞くよしもがな」とおぼすもむげに



くんじにける心なりかしや。歎き明さむもかひなければ泣く泣く罷り出で給ふ。更に晝の文  
 珍しう覺されければ、一の大官の御許に忍びて立ち寄り給へり。深き夜の月浮雲だにたなび  
 かず澄めるに、遙に廣き池の中島に作りかけたる樓臺に、三四五の君琴ども掻き合せて月を  
 ながむるほどなり。やがて「こなたに」とて入れ奉れば、中島のみぎはよりよこたはれおひ出  
 で、樓臺の上にし覆ひたる紅葉の、さても誠によるの錦かと思えたるに、みす巻き上げて  
 几帳ばかりをうちおろして入れ奉れり。常はいかゝあらむ、面白き池の上紅葉の蔭にていと  
 麗しく玄やうぞき髪上げて居たる、月影ともいづれともなく繪に書きたるやうなり。三の君  
 きん、四の君玄やうの琴、五の君琵琶、掻き合せたる聲々いづれとなくおもしろし。きんはか  
 うやうけんの御ことの音にならぶべきことならぬと、をりからなればにやをかしく聞ゆ。玄  
 やうの琴もおもしろき中に、琵琶はいみじうすぐれて聞ゆれば、親のならびなくわきて悲し  
 がるもことわりこそとおぼす。男君も、この音に合せ笛を吹き給ひつゝ、別を惜み給ふに、  
 おはれも悲しさも取り集めたる心地するに、やうやう明ければ、

「日の本の山より出でむ月見てもまづぞこよひはこひしかるべき」。琵琶の君にさし寄り  
 てのたまへば、いとゞかきくらす涙に聲もたがひて言ひ出でねば、琵琶にて、

「かたみぞと暮るゝ夜ごとにながめてもなぐさまめやはなかななるつき」。いとよくこ  
 えて弾きすましたる、似るものなくおもしろし。なごてつきごる聞ききりつるぞとこ  
 れさへ飽かぬおもひ添ひたまひぬるとぞ。』わたり來しほどは、世に知らずあはれにかなし

く、ゆくへ知らぬなみのうへに漕ぎ出でしさまさまのおもひかぎりなしといひながら、いの  
 ちだにあらばみとせがうちにかならず行きかへりなむかしとおもふころに、いさゝかな  
 ぐさみにけり。知らぬ世の幾程の年へざりしかども、又返りみるべきやうもなしかしと思ふ  
 に、悲しさも別るゝあはれのよのつねなるべきならぬ中にも、さばかりたぐひなき思ひをし  
 め心をとめて、いとけなきかたみばかりを名残に身に添へて、さしも荒き海の上の浪より  
 も泣き流す涙の淀む時なきにくらされて、明け暮るゝも知らぬやうにて、筑紫に坐しつくべ  
 き程近くなりぬと聞き給ふ。この若君は、母後の今はとて出で離れし曉になくなく抱き寄せ  
 給ひて、「道の程ちまぬらざらむかはりに、この薬をくゝめ奉れ」とて添へ給へりし薬のゑる  
 しにや、いさゝか瘦せ衰へす色もかはらず、いよいよ白う美しくしげに光るやうになりまさり  
 つゝ、ぬもつゆも泣かず、荒々しき男の中にあつかひ聞ゆるに、物むつかしう所せきことも  
 なし。あさましくへんぐるの物のやうに清らかなるをかつはゆゝしうおぼして、かく外の世  
 に生れたる人と知られては行くさきこの世に少し隔たるやうそはむ、後の聞えはありとも  
 猶いかで外よりゐて渡りたるとは人に知られじとおぼしまはして、母上の御許に、「このは  
 どたひらかに物せさせ給ふにや」とみに罷り歸るべくも侍らざりつれど、暇申し侍りし程の  
 過ぎ侍らむもいと覺束なくて、ありがたうてこそまうで來にたれば、見奉らむする嬉しさに  
 ます事侍らすなむ。さてこまかなる有様は今みづから申し侍るべし。中將のめのと、覺束な  
 さに待ちもあへず、さまたせしう來向ふやうに人には思はせて、夜を晝になしてくださせ給



へ。さやうに入り侍らぬさまに、かれにあづくべき物侍るなり。あなかしこあなかしこ、人に知らせさせ給ふな」とて、「さてかの國の人々、おくりに来うでくるを返し侍るに、珍しう待ち見侍りぬべからむ物取り出でさせ給ひて賜はせよ。さやうの事もしたためてなむさやうへ上り侍るべき」と書き給ふ。姫君の御方には、かの宰相の君の許へ遣り給ふ中にて、事はおろかならむやは、

「君により遠のはや船さしはやし風間も待たずこがれ来るかな」と聞え給ふ。「さやうにはかの國の王に去たてまつらむとてとゞめ給ひければ、なかなか返し給ふまじかなり」とて様々にいふを世の人も惜み悲み聞えさするに、まいて母上などは、胸心を碎きておぼし歎くをりしも、かゝる御せうそこまち見給ふ御心地ゆめのやうにて、喜びなきにさへしも物をおぼえ給はず。中將のめのとにこいよし去のびてのたまへば、さやうにのたまはせざらむにてだに人目はさまあしきやうなれど、参りむかはまほしく思ひ給ふるに、嬉しさなどはおろかなり。唯急ぎに急ぎ立つを、さるべき人々なども皆参るに、「中將のめのとにさやうに坐しつかむも心となしと急ぎ出で立つめるを、さらでありぬべきやうなれど、おのれらにだに覺束ならいふせきを、まいてことわりなう、そのうへよるを晝になしてくだれとこそこのたまはせたんなれ」など口々いひあひたり。尼、姫君、これを聞き給ふにも胸うち潰れて年ごろもつきなきすみかと思ひつれども、うへの御もてなしをおながちに背き渡らむも思ひ限なく様悪しき心地しつるに、おはすと聞く聞くかくてあらむがびんなくもわるべきかなと、おぼ

しあまりては少將の乳母に「かの殿にもはやおはしぬべかんなればけそならむかし。こゝにも今は人しげからむ事はいとつきなかるべし。かゝるさましたる人はかすかにのどやかなるすまひにてこそよかるべきを、さやうに殿にもうへにも申しなせかし」と盡させずうちはぢらひ給へるものから、おはれにことわり知られてのたまはするをいかゞはせむ、かゝらぬ御有様にて待ちつけ奉り給へると思はしめかばど、常よりもいみじう物を思ふに、いとゝかくのたまはすれば、うち泣かれて、實にさも思し召しぬべきことなれば、殿も上もならひて、ちぢ姫君を御中にすゑ奉りて抱さうつくしがり聞え給ふに、かうなむおぼし召されたる御氣色にてと申し出でたれば、殿も歸り給ひぬとうち聞き給ひしより、嬉しながらも今一かたの御心亂れまざるに、これを聞き給ふにつけても涙のはろほるところばれ給ひぬるを、ことわりにはとほしう見奉り給ひて、「うへぞなごてかこなたにかくて物し給はむ。けんそうにおぼされむ心苦しう、我があやまちのやうに見奉る御有様なれば、生きて侍る限は身にそへて朝夕見奉らむをだに志と思ひ侍るを、かう猶おぼし隔て、のたまはするが心憂きなり。中納言は、ひんがしの對にこそ侍らめ。更にあるまじき御事なり。今はいふかひなき御有様に、唯聞えさするまゝにて物し給へ」とのたまふ。殿はいかにもうへに任せ奉る御事なれば、ともかくものたまはせねど、げにひとつにおはせむ事はさも憚りおぼされぬべき事なれど、うへのかうのたまふをせめてもてはなれ外にうつろひ給はむもびんなし、ちぢ姫君ものし給へばむげにたよりなきことにもあらず、さはいふとも、姫君などをいさ知らずとおぼめ



き給ふべき御事にあらじとおぼせば、今は唯この御おもむきのまゝにおはせむぞよからむ。さすがに心をたて、おはしますまじきやうにさへ、人に見え知られ給ひにしいと口惜しき事なり。いみじき思ひやり心深きながら、唯せうせうの世のもどき誹られ、いたうたどらず、あるに任せて、おいらかに人のもてなすまゝに、いと深からざらむは、罪も消えて、こゝしうらうたかるべきわざなり。さすがなるさかしら心のきは高く、さいまくれたるやうなる、かへりてはうたてありや」など、この御有様を、盡きせずいみじとおぼえての給はするも、げにさる事と耻しければ、御前をたつにつきて、おはして、人聞かぬ處にて「いかに、御せうそこはわりや」とゆかしげに問ひ給ふも「心苦しうわはれにて候ひつ」とて、宰相の君の許なるも御前なるも引きそばめて御覽せさせれば、うち見るに、さしあたりたらむうさもつらさも名残なく忘れぬばかり、心深くわはれに淺からずかきつくりひたまへるを、この道にしほじみて、偏になほざりのたのめごとなど、ことよく言ひ續け給ふべき人にもあらざめるを、むげに淺からむにはかゝる言の葉をば世にあらばかい給はじかしと、うち置き難う見給ひて、いと滞りなうおぼし立ちたる御心をさなさをぞいみじう心愛くおぼされける。殿、上のたまはする事、姫君に聞えさせれば、「うき世を見ず聞かず思ひ離れなむ我が身ながらも、さばかり思ひ離れしかひなう、所もかへずかくてあらむよ、猶うへこそさのたまはずとも、殿はげにさてあらじとおぼされよかし」と涙こぼれて心憂けれど、かばかり常に言ひわはめ給ふにあらぬ所はなきものから、出で離れ逃げ隠れなむをいとつけしからず疎まれはてられ奉ら

むも、限あらむ命の程は、わりなうおぼさるれば、山梨の花の心愛さをおぼしいるに、うへは年月の胸あく心ちし給ひて、御しつらひ、御帳御几帳のかたびらを始め、女房しもつかへの装束に至るまで、つくろひたて給ふ。我が御装束、よるの晝のと年頃よりも世になき色あひにとおぼしいそぐ。これにも心殊にやんごとなき人々かの國より御送に渡りてと、おほやけにも聞し召して、志おくらせ給ひき。こがねなんどちにも餘りて筑紫へ御使にてこの頃かたちのみならず、身のざえなど足らひたる左大臣の御子の權中將なるを下させ給ふ。筑紫には中納言おはしまし着きぬ。大貳を始め國々の司どもこぞりて待ち喜び聞えさせたるさまでも限なし。御迎の人々、中將の乳母、夜晝わかす急ぎ参りたり。年をろ戀しうわりなしと思ひ惑はれつる御有様を、うち見奉る嬉しさにもまづ物おぼえずかさくらしたるを、君もいと珍しうおぼさるゝに、いと清げに若やかなりし人の、年比の物思ひに夜晝音をのみ泣きければ、いたう瘦せ衰へてまみなどもうちかはりたるやうなるを、うへもかやうにやおはすらむと、いとわはれに見給ひて、若君の御事を忍びていとささきの御腹とこそわらはかい給はねど、「かの國にありし程思ひよるまじきわたりに、かゝる人の出で來たりしを見捨てむいどわはれにて、母なりし人は引き放ちにくらぞ思ひたりしかども、こゝまで来て來たるを、おひだちの行く末おのづからかくれあかるべき事なれど、外の世に生れたるとは暫し人に知らせじと思ふに、荒々しき男の中にのみあらせてはこの事しばしのかくるへもあるべきならねば、こゝにてこれあづけ奉りてむとて、迎へ聞えてしなり」とのたまはせて、抱き出で



給へるちごの御有様、大將殿のちご姫君を世になさものに見奉る人も「思ひ聞えさせたるめでたさにも劣らず、さまことにはほいみじきものから君の御顔もうつしたるやうなり。ちなども聞し召さず、いかでをのこの中にておはしましつらむに、この御色かたちのつゆも瘦せ衰へさせ給はぬ事よとまづこれにつけてもなむそれが恐しきまであさましきなり。ねをなむすべてあかぬ。この世のものにはあらず。佛などの變じ給へるとなむ覺ゆる」などのたまふ。御氣色いみじう淺からずおぼしける人の名残なめりと見えたり。大將殿の姫君の御事も始よりこまやかに語り聞えさせて、厄になりておはしますさまなど聞えさせるに、我ながら目の前に人の許しなき事を思ひよるべうもあらずと覺ゆるに、遙に思ひ立ちにし程にしもいみじう心亂れていとほしう悔しう心苦しかりしかど、この程に思ひ立ちまことに事とも顯はるべきならずとこそ思ひつれ、さはいといちじる事もありていみじき事も覺し立ちにけむ事とも引きたがへ、さばかり限なきものにおほしかしづかれ、めでたかりし人の御身をもいたづらなるさまにしない給ひてけるを、大將いかにあやなううらめしう淺かりけるものに心おさおぼさるらむ、かの御氣色見給ふらむ母上の御心もいかゞは安からむ、そはさるものにていと心深くのみ聞えし人の、我をばさまことなるものにたゆみて、うらなくなつかしびを通はい給ひしに、思の外なりしをだに愛しつらしとさばかり悔しげにおぼし入るめりしが、かゝりける事どもの亂れ、げにいかばかりかは、おぼろげにおぼしわびてこそは世にためしなうわたらしかりし御ぐしをも、そぎ棄てやつい給ひけめなど、もろこしにて

も心深ういみじかりし御思に紛れず、この世の戀しき御なげさには、げにはたぐひなかりし人の御事なれば、さしわたりて聞き給ふあはれはまいてます事なきにつけても、昔よりかゝるかたさまにつけて、我が心をも亂らかし、人にも心おかれ歎かせじと心強う思ひきたゝめしかひもなく、我が世も人の世もよにまらぬ戀のみだれに身をば沈め、人にいみじき物思はせ、ことびとだにあらず、今は親たちに心おさあさき恨を負ひぬるは、すべて昔思ひしことども、皆違ひぬる我が身なりかすと、來しかた行くさきかきくらし涙にくれて、もしみづからの御かへりやなかにあると、宰相の君のをいとぎわけ給へれば、宰相の君の文だに事多からで、

「浦にすむわまとなりしを見し人もたゞあさなきにもしはたれつ」とばかりあるを見給ふもいとことわりにもろこしにて、涙の海に身をまづめしと見し夢、おぼし合せらるゝに、他かす悲しくて胸よりあまるばかりなり。いと又かくおぼし入りぬるを、中將のめのと、いとわびしと見奉るに、よろづ慰め聞えさす。この若君をばうへにあづけ聞えむと思ひつるを、限なくおぼしあつかふ人あなれば、恨なく別るゝ御心もありがたからむ、又人はかくさまさまにおぼし亂れけるに、我は外の世に立ち離れ、かゝる忍草もつみいでけるよと誰も見おぼさむ事、後かくれなかるべけれど、ふと猶いとほしうおぼして「かの殿のうちにも、聞かせ奉らじ」など語らひ給ふ。立ち離れにしこの世の外の世界のみ歎のものとて、我が世はこの人のこの程をやもてなし給ふ方なくば、これをこそうち忍びつゝ、ゆるされなくとも心



の限は淺からぬよるべにはせめと深く頼み聞え給へる人をさへ、空しう聞きなしたる口惜しさは、枕よりあとも戀のせめ來る心地して、いと心のひまなう歎き沈み給ふをも知らず。そのころの大貳、心ばへいみじうすきてもめでする人にて、限なく思ひかしくむすめのあるをこの君に奉らばやと昔より思へど、さやうに覺しよるべくもあらず。思ひとくにはこよなく及びなき事にはあらねども、人柄のいみじう思ひあがり、世を殊の外に覺しすみたるさまの物遠く、雲より遙なるこゝちするに思ひ煩ふを、年ごろ經て見奉るに、いと盛に成りまさり給ひにける御かたちありさま見るにめでたし。命延ぶる心地するに、かくておはします程、見せ奉りなむわざとおぼしといめずとも、年に一夜なりとも、おぼしだに出では、見るかひあるひこぼしの光なりかしと思ひよるに、御氣色などふと取らむも、猶いと心耻しううち出で難かりければ、おもしろき所に、珍しきさまなる樓臺を作りて、行き通ひつゝ遊ぶに、月いといみじう明き夜、忍びて、むすめをそこに渡してあそびなどして、中納言のおはし所いと近かりければ、をひなる筑前の守をまゐらす。

「ふるさとの三笠の山に思ひなしこよひの月はこゝに來て見よ」。中納言月をながめつつ、よろづおぼし出で給ひて、今はとて立ち寄りたりし一の大官の家の紅葉のかけの月の夜、五の君のなぐさめやはと弾きたりし琵琶の音も耳につきて、などありし程絶えず立ち寄り聞きならざりけむと、さしもおぼえざりし事さへ心にまみて悔しきままでにおぼされて、「立ちよりてなどか月をも見ざりけむ思ひ出づれば戀しかりけり」。かうやうけん御あ

たりの事は唯かけても片端おぼし出づるに我が身も浮ぶ心地していとわびしければ、行くへも知らずはてもなくむなしき空にみちぬばかりにながめ入り給へるに、すきずきしさは顯はれていざなひたる、はしたなからむもいとほしうて、又わびしきに心もや慰むと忍びやかに渡り給へれば、人まげうはあらず、少し物おぼえたるもの五六人、かすかにさびしうもてなして、待ち喜び聞えたるさまいみじげなり。所のさま、山と海とおびたり。汀見えていと面白きもそく山の大官の御すまひ先思ひ出でらる。まらうどの御前にまやらの琴參らせて、われ琵琶弾き、筑前の守和琴笙の笛吹く。このへんのすりやうなどありければ、をかしき程に遊びて、夜の更け行くまゝに昔物語聞き所あり。をかしくわりなき御心慰むばかり申しなどすれば、急ぎ歸り給はぬに夜いたう更けぬ。今宵は猶こゝにおはしますべく、せちにといめ聞えさすれば、わりなうてやすらひ給ふに、明方近うなれば、うちへ入り給ひてうち休まむとま給ふに嬉しくて、奥の方よりさゝやかなる女をおし出で、「御あし參らせさせ給はむ」とてのきぬ。いと怪しう、誰をいかにする事ぞと驚かるれども、見いれ給はざらむも女のはしたなう思ひぬべければ、いとほしうて「ゆるされありつる足もおさへ給へかし」とて引き寄せ給へば、にはひありさまいとわてはかにかうばしうて、手あたりもいとみじうさゝやかにあえかにらうたげなる氣色かいなでの人とおぼえず。いと折々所せげにもて煩ふよし愛へいふむすめにこそあらめ、我が心をよの常に推し量りてするなりかし、只今はいみじき天女天降りたりとも、心をつゆ迷はずべからぬものと思せども、入りぬとのたまはずべ



きにあらねば、物わづらはしうおぼすおぼす傍らにかき寄せて、袖うちかはして臥し給へるに、手あたりけはひいと憎からず、うたかりぬべけれど、心の中に、又人をけぢかう見むとしも覺されぬをもと、して、もろこしの人々の、送に來たるもわまたあり、さばかり一の大臣のまづはかしてだに寄りつかずなりにしを、行きつきしまゝに大貳の婿になむ奇りにき<sup>元</sup>と聞えむもいとわろく、この世にとりては大将殿の姫君の尼になり給ひにけるを聞く聞く、それをば思ひ入れでかくなむむつびよりにけむと聞えむも、いとほしうおぼさるれば、唯いとなつかしううち語り給ふを、女はむげに心得ざるべし。しばしはあさましうあきれたるさまなりつれど、かばかりめでたき御けはひに疎ましからず契り語り給ふに、をかしうわはれにて、心えざりけることながら、思ひ慰みて、うらなくうちそひたるけはひも、あはれなりぬべけれど、なかなか事あり顔にあかつきおさせむもわざとがましければ、御殿でもり過ごしたるやうにて、海の見ゆる方の戸を押しわけてこの人を見給へば、いろいろにこきませたるうへにうつし色なる織物を着たり。十七八のほどなるべし。いと若うあえかにうちひそみてあてやかにをかしげにて、髪は少し色なるがすぢも見えず、こまごまとひすゐなどいふらむやうにひろどりかゝりて、いとこちたくはあらず。裾つきの尾花の末のやうにて、色隈なく白きに、こぼれかゝれる額髪のためまたえま、簪などこゝこそわろけれと目だつ所なくをかし。すべてかをりなつかしげなり。思の外にめざましうもありけるかなと、さすがに見すてむ事口惜しうて、こまやかにのちせの山をたのめて出で給ひなむとす。

「ゆめゆめよしたはふ葛の下葉よりつゆ忘れじとおもふばかりぞ」御かへし聞えむかたなうはづかしければ、

「忘れずば葛のした葉の下風のうらみぬほどにおとをきかせよ」わりなうつゝ、ましげに顔をもて紛らはしたる聲もいとらうたく若うをかしげなり。忘れぬほどに言ひ出でたるも人からはざれて見所あれば、いみじう心とめて語り置き置きて出で給ふを、大貳は、よもすがらいかにしつる事ぞと胸潰れて思ひ明しければ、明け過ぎぬるも心時めさせられて胸のひまあくに、中納言立ち出で給ふまゝに、大貳を呼び寄せて、「足うたせよとゆるしありつる人を、女房などにこそはと推し量り思ひ給へられ侍りつるを、人の御さまのなべてならぬ心地し侍りつるに、おもほえずいと心も物覺えず驚かれてこそ」とうちほゝゑみ給へるが、世に知らず恥しげなるに、おもて赤む心ちしながら、「昔よりこれをかりにも殿の御あたり侍はせむと、志深う思ふ給へしかど、わざと御氣色など給はらむも御耳とやめさせ給ふやうもあらじかしと思ひ給ひて、かゝるついでに御わしをも參らせそめさせむとてなむ。年に一夜よひのまにもおぼしいださせ給はむ、この世のさいはひに思ふ給へて、かまへ侍りて人やりならず思ひ亂れ明しつる」よしを聞えさせてうち歎きぬ。おはれにいとほしうて、いかにはいさく恨みむとおぼえて、「怪しうも思ひむけしけなるものかな。さなむ思ふとのたまはせましかば、有様をも委しう聞えて、心得ぬさまにはおはさゞらましを」とうちながめて、「唐土なりし程、一の大臣のいみじう悲しうするむすめを、せちに志しいはする事ありしか



ど、外の世にさやうにうちとけ、人に馴れむつびむ事と、つゝましまさる事にて、さやうにありつきては、とみに歸らむ事かたくやあらむとおぼえしかば、あながちに遁れてなむ止みにしを、この途に来たる人々は、そのへんの人なれば、いきつきしまゝに、さゝの人のあたりになむ寄りにしなど、いづくにも人の物言ひ變らねば、言ひなさむも、我にあながちに遁れしもの、さりける事のありけるよと聞かれむ事もいつしかに侍り。かりそめにも馴れにし世の人に又さうち聞き思はれ侍らむ事の心はづかしさ、さばれや、外の世の事にてあらねばおのづから聞き給ひけむも、この世を思ひ離るゝ心深うて、人に似ぬひがものにてすごし侍りにしかど、にごり多かる世に過ぐるほどの心は猶え住み侍るまじきわざなりければ、大將殿の限なくおぼしかしづき、世に知らずおぼすめりし御むすめに、我も人も心より外にゆめのやうなりし程に、いちじるしきしるしえまぎらはさす出で来て、誰も誰も歎き亂れて世を背くさまになり給ひにけりなど聞き侍るに、すべてさまの世の契さるべきぞとはいひながら、かの大將のおぼさるらむ所罪ざりがたく、さらぬそれよりまも軒端の人だに皆かやうにいとほしきすぢにより、人に心置かれ、歎き思はせじと思ふ心深く侍りしを、親と思ひ聞ゆべき人の御恨を負ひ、心を亂し歎かせ、人の御身もいたづらになして侍り。唯みづからのをこたりと思ひ知り侍る。萬よりもすぐれて世に知らぬ浪風にたゞよふも、まだ知らぬ世界に渡り罷りしも、親の身をかへておぼすらむも、見奉らむと思ふ志にまかせて渡り罷りしなり。この大將の思ひ歎かるゝ、我が方さまのことによりと、安からずとのみ歎き給ふらむ母の御

心も、いと罪えがましく恐しく歎き思ひ侍るを、所をも隔てずさなむあると、むげに思はれぬやうに聞き侍らむ事の、いみじう愚にあやしかるべきにより、例さまにけぢかく亂れ奉りては、人の御爲もいとほしく、我が心も苦しく侍るべきにより、いみじく思ひ亂れてこそ明し侍りぬれ。かくけざやかに聞きなし給ひて、外さまになゆめゆめ思ひ給ひそ。かゝる事を聞く聞く、このほどにさやはあるべきといふもどきをさへおぼしとおもひ忍び侍るなり。今少し日數過ぎ侍りまば、必ずあづかり聞き侍りなむ。さりてあいなかりけりとおぼしかば、若しくはおぼさずとも、恨み申し侍らむ」など、うち歎きつゝのたまひ續くる事も、心深くわはれげなり。かゝる御はかりども深かりけるに、こちたくわやしかりけるわざかなと驚かれて、悔しけれどもいかゞはせむ。「人ぎゝなどの、よのつねのさまに思ひ給ひよらましかば、いとかくゆくてにゆくりなく御覽せさせむとは思ひ給へよるべきにもあらず。御心の程を承り知りて侍らば、何となく紛はして、御覽じだにそめてはと思ひ給へよりて、さ御覽じなれざりけりとして、外さまに思ひ給へよることは、いかでか」とうちなきて、

「はこ崎の松はちぎりもなかりけり何にこゝろをかけてまたまし」。「猶わらく口惜しきおもひの、絶え侍るまじきにこそと、むげにさはいかに言ひ放ち給ふ」と、うち笑ひ給ひて、「行くさまをはるかに契るこゝろあるにかけなはなれ箱崎の松」として出で給ふに、「いやためこそ人の」とうらめしげにうちずんじつゝ御供にまゐる。はいなげなる氣色を、さすがにいとほしうおぼし、かのみづからのけはひの、まめやかにをかしかりつるを、せめて見



過をしつる我が心も、よに似ずわやしうおぼし知られて、暮つ方筑前の守を召して、御文賜はせたり。さまことに思ひおきてつる事の、わいなくはいなきをうち歎きて、母君「めでたきにもよしなし。思ふ事ことにおはしまさむ人に、あはつけうひき出で、すさまじうはしたなきものを思ふかな。親などなきもの、心細げなるこそかやうの事はあれ」など言ひてむつがるを、ことわりにて悔やしう思ひ亂るゝに、この御文いと嬉しうてひきあけて見るに、

「何となく暮れゆく空をながめつゝ、ことわりがほにうれしきはなぞ」。いみじうぞ書かれたるや。母君に「猶これ見給へ。かゝる人をばいかでか思ひよらぬ人のあるべき。さまさま思ひ憚る事どものあるほど、うちとけ見馴れては人の爲もいとほし。我が御心も安からざるべきをおぼしたどりて亂れ給はぬ心ふかさ、まづはいとありがたし。その心に知らせて恨み置かれじなど思ひ給へるようい深さなど、返りてはこれかれいみじうありがたう世にあらぬ御有様なり」とせめていひなだめて、喜びあはれがり聞ゆるを、あながちなる事など聞き見ながら、北の方もこの御文をうちも置かず見つゝ、誠にいとめでたしと思ふ。むすめは、母君の涙をさへ落してむつがり給ふなど聞きにくかりければ、つゝまじう耻しかりつるまゝに、まどろまざりつる名残寝入りたる所に、大貳うち忍びてきて驚かしつゝ、この御返事目とゞめ給ふばかりと教へてかゝす。

「暮れなばと思ひわかれぬ空なれば雲のゆくへもながめやはする」。手も子めかしうをか

しげなるを、いとうらみさしすきたる口つきは、大貳のをしへなめりといとはしうをかしう見給ふ。そのくれにも、忍びやかに立ち寄り給へれど、さらぬものから人目のあいなかりぬべければ、對面もせさせ聞えずなりぬ。ことわりによりらみ所なしかし。おくりの人々かへるに、ありがたう嬉しと思ひぬべく、かの國にも餘るばかりの物ども品々に贈り賜はせて文書き給ふ。三の宮の御もとに哀なる事ども書きつゞけて、女王の君の許には道の程も恐しううしろめたければ若君の御事などかけても書き給はず、いみじういぶせうわびし。少しもよのつねなる事にこそ心も詞も及ぶわざなりけれ。思には濱の真砂の數よりもまさりて聞えさせまほしき事どもあまた物し給へど、え書き續けられ給はず、よろづおしこめおぼしむせびて、唯うち思はせて書き給へるしもぞその心え見る人あらばあはれに悲しかりぬべき。御涙の水莖の流れあひつゝ、かきもやられ給はず。

「なに、かはたとへていはむ海のはて雲のよそにて思ふおもひは」。かくぞ世のつねなりける。一の大臣の五の君の許へは、涙にもかさくられねば、見し世の事どもあはれにおぼしすまして、なかなか御心のゆくかぎり書きつゞけられ給ふ。

「あはれいかにいづれの世にか廻りあひてありし有明の月をながめむ」とて、身をかへてばかりや、琵琶のねを聞かむなどこともなくおもふには、さしも心に入らずおぼえし事にも涙のみぞかごとがましうなりにたるや。あすとの夜宣言にて、おほやけの御使にくだりたる中將大貳をはじめて、筑前、備後の守など、國に少し物おぼゆる限集ひて、文作り歌詠



む。中納言の作り給へる御文に、もろこしの人々も、この世の人も聞くかぎり、くれなるの涙を流してめであはれがらきこゆ。

「おなじ世のまばしほど、思ふたに別れてふるはいかゞ悲しき」とうち泣き給ふ。御かたち有様見奉るかぎりの人、文のめでたさのあはれよりは、これは今少し悲しういみじと見奉る中にも、大貳は身にまむばかりおぼえたり。かの國の宰相なる人、かたち心ばへずぐれ、何事もなだらかにたどたどしからず。このみとせがほど夜晝中納言の御あたり離れず、この御有様をめでたしと身にまみてせちに別を思ひわび、御送にこれまで渡り來たる、いみじううちまをれて、

「荒る、浪雲のながめをへだてつゝ、いつともわらじ君戀ふること」とぞよみたりける。今はとて、曉きやうへのぼり給はむとするに、いみじう志したりしにあまりいとほしうをかしかりし様も今一度見まほしうて、月いみじう明き夜、いたう更けて、とかう紛はしつゝ立ち寄り給へり。思ひ立ちにし事も誰ならなくに、ひきかへしけざやかに離れ背き聞えさせむもけしからざるべし、大方人に似ぬ御くせと聞けばせめてとかく思ひなして、月さし入りをかしき程なる眞木の戸を押しあけて、御まとね参り入れ奉りて、障子に几帳をへてむすめを押し出したる。「かやうに事々しうものへだつばかりは契り聞えざりしを、こよなくおぼされにけるこそなかなか心愛けれ」と恨み給ひつゝ、障子よりこなたへ引き寄せ給へり。月影は今少しをかしげになまめさまさりて、おぼろけにおぼし召すは見過ぐすべくもあらねど、一

方ならず思ひまづみたる事どもおぼし出づればおぼろけの事に心靡くべくもおぼされぬ中にも、この人は人きゝさへねぢけがましければ、せめて思ひ捨て、ことわりをいみじうあはれに淺からず語らひ契り給ふを、女もこのたびは遠うなり給ふべしなど思ふにや、こよなくあはれざる氣色にうち靡きたるもらうだけなるけはひなり。明けぬべきを心あわだ、しうて立ち出づるほど、一の大正の五の君の、なかばなる月と彈きし琵琶の音聞きとめて出でし曉にいたく劣らぬ心ちして、

「心からしづくに濁るわかれかなすまばなげかであるべきものを」とうち泣きて、「親たち外さまにもてなすとも、ゆめさやうに思ひ靡き給ふなよ。行く末には必ず身に添へて見奉らむと志ふかうおもふを、おろかになおぼしなし」と返す返す語らひ給ふさまのめでたきを、若き心にはともかくも思ひたどらず、殊に身にしむ心地して、耻かしと思ひつゝめども、堪へずこぼれぬる涙もあはれげなるけはひなり。

「影見ずばかくぞよそにてあるべきになど結ぶ手のしづくばかりぞ」とらうたげに言ひ出でたるを、見捨て難うおぼすおぼす我ながらもいとあやしう、夢のやうにもあるかなとおぼしつゝ、のぼり給ふに、大貳も御送にせきまでする。中將のめとは若君具し奉りて、こよふねにてのぼる。心知らぬ人は、いみじう思ひ聞えける君かなとことわりにあはれがりけりのぼり着き給ひぬれば、中將のめめとは、讃岐の守なりし人のめにてありしかども、守もなくなりにしかばやもめなれども、むすめとも數多廣き家にすみみちて、うちうちは猶その



名残ゆるらかにてある人なれば、若君具し奉りて里にぞ急ぎおちつきにける。御をぢたち大將殿御事もまた親しう語らひ聞え給ひし上達部殿上人は皆さるべきかぎり御迎におはし迎へたり。珍しうあはれなる中にも、大將殿をうち見つけ給ひては、いかに我に心おきうらめしとおぼさるらむとおぼすにも、胸うち潰れて涙の落ちぬるを、大將も年ごろ隔て、珍しう見奉り給ふに、いとめでたうけうらになりまさりにける御かたち有様見るには、御ゆかりむつひゆかしげなしといふばかりこそあらめ、姫君のさて物し給はましも、口惜しからざらましものを、ひたすらかたちを變へ給ひにし事いと口惜しう心憂し、かばかりの人にだに用ゐらるまじき御契に物し給ひけることよ、心ばかりは二葉よりかみなき位にもと思ひかしづきしかひなかりける世なりかしやと、口惜しうおぼしつゝけて我もうち泣き給ひぬ。かたみに御心のうちにはおぼす事あれども、氣色しりがほにも給はせず、大かたの御物語などして急ぎのぼり給ひぬ。宮には人々参り集りていつしかと待ち奉るに、大將母上の年ごろの御物語つぎすべくもあらじを、ちぢ姫君など見給はむに、さすがまじらひたらば人もはかられ給ひなむとおぼして、おくりおき聞え給ひて我が殿におはしましぬ。中納言の君はうへを見たてまつり給へば、さばかり若うさかりなりし御かたちのいみじう瘦せ衰へてあらぬものおもがはりし給ひつゝ、うち見つけ聞え給ふよりかきくらし物も言ひやり給はぬ御氣色の、われもいと堪へ難く、この御ころにかくおぼしくだかせつらむほど罪得がましう恐しきにも、さまざま淺からずおぼし知らるゝ事ども多かり。年ごろの御物語は今宵につぎす

べくもあらねばまづ姫君を抱き出で、見せ奉り給ふ。三つにぞあり給ふらむかし。髪は眉のほどにゆらゆらとかゝりて言はむ方なくかをりをかしげにて、上に抱かれ奉りて火かげにうちまぼり給ひつゝ、例ならぬ人にとうち解けぬ氣色、あはれいみじと見奉り給ひてうち泣き給ひぬる、いとさまよくあはれ淺からずげなり。忍びやかに「殿などいかにすきさきしう亂れがはしささまにおぼし召されけむと限なういとほしう思ひ給ひてなむあさまじさも殊にまさられ侍る」と、かばかりのしるしを御覽せむ人はささきの世のさるべき契といふも遁れ難きわざに少しは許し給ひてましを、あらぬさまに厭ひ背き給ひにけり。「數ならぬ身のこゝとわりに、罪さり所なく」とばかり歎き給へる氣色、いとこのりおほげなり。若君の御事も忍びて、「心より外にはさるもの見出で、まうで來たるを、暫し人に知らせじとて、中將にはかしてにてあづけ侍りしなり」と語り聞え給へば、唯一人おはするがゆゝしう心細きもの思ひ聞えさせつゝ、今にこの御方にあまた出で來給へらむをいくらもいくらも見あつかはまほしう覺し願ふ御心なれば、かれをなか今宵まつと、いと口惜げに覺したり。「上にも知らせじと思ひ給ひてなむ。今は心のどかに御覽じてむ」など申して、「かくて今見奉りぬれば思ふ事なうあり侍りぬるを、今宵はうち休み侍らむ。あの御方にせうそこ奉らむ。はしたなうや侍らむすらむ」と歎き給ふまゝに、中將障子のもとに宰相の君を召し出で、あひ給へり。ひと宮のうち、喜ばなきさへゆゝしきまで立ち騒ぎ心地よげなるを見聞き給ふにも、すゝろにわいなき有様にてもけ近く聞くかなと、心より外なる世を常よりもおぼし亂れて、み



几帳の内に入りて、御殿籠りたるやうにて、よろづおぼし續けて、あはつけき御身の宿世をおぼして御まくらも浮ぶばかりになりぬるに、宰相の君の御せうそこ申しに入り来て、み几帳のもとにゐざり寄るに、やがて續きておはしにけり。胸うち潰れて昔よりもいみじう耻しう疎ましくわびしければ、起きあがりてみ几帳のそばより出で給はむとし給ふを、引き留め給ひぬるねたさ言はむ方なし。宰相の君はゆくりなくと驚かるれども、かくとも今始めて諫め聞えさすべきならねば、少しるざり出で、居たり。今はと別れ給ひにし曉より今宵までの事なくなくかきつくし、「かゝる事どもし給ひけむも知らず過ぐしける我がをこたりも、さきの世の契のうらめしさも、いふかひなき御名の忽にさよまはらせ給ふべきにもあらず。式部卿の宮の聞き給ふ所ありて、うきを知りかほにおぼしてを背き捨てさせ給ひけむかし。なかなか音きうとましよううたてあるやうにぞかの宮にも聞き給ひけむかし」とよろづ聞えわばめ恨み續け給ひてさし寄り給へるに、御手あたり有様は唯ありしながらにらうたうわてやかなるに、御ぐしのふさふさと短うてゆらめきかゝりたるをさぐりつけて、あないみじ。さばかりめでたかりし御髪を、いかばかりかはかくあさましうおぼし餘りてかくしなし給ひけむとおぼしやるに、何のなげきもおぼされず、聲も忍ばず泣き盡し給ふ御氣色の心深さによるづのつらさも消えぬべし。

「思ひいでよそこらちぎりし言の葉をいかに忘れてそむきぬる世ぞ」。うち忍びつゝ、涙の落ち給ふより外の事なく、さうでの氣色は夢にもなきを、さしあたりて見奉り給ふ折は、い

かばかりの心づよさにてかばかりわはれなる人を置きてさしもあらしき浪の上に漕ぎ離れ、及びなうあるまじき事をさへ思ひそめて、人の世にてさへ身を苦しめて、長くこの御有様をいたづらにはしなし聞えさせけむ、悔しう悲しきに、姫君はひたすら見じ聞かじとのみ思ひすて給ひにし人の御有様なれば、いとかうせきかね給ふさまのよのつねならぬにも、いと取りかへさまはしきそのよの事ども只今の心地し給ひて、かやうにけぢかう見え聞かれ奉り給ひぬる事のあさましきにも、

「思へども命はかぎりありければなほあるものと知らるゝぞうき」とてうち泣き給ひぬる、よしよししうわてにわいぎやうづきたる御けはひも變らず、うち聞きつけ給へるほどの珍しうわはれなる事限あり。ゆくてにかけつゝ、見渡し給ふべき人をだに來し方行くさきの思ひやり浅からず、うちとけて亂れより給ふ事おぼろげならではなき御心の、まいて佛のおぼさむ心としてはあるべきならずかし。かたみに涙をせきわびつゝ、冬の夜一夜聞え明し給ふ。何事もまねびやるべき方なし。あまり心深き御事どもは書き盡さむ方もなかりけり。親の御心のあり難かりける事は、大將殿、ちと姫君を見ていかゞ思ふらむ、對面やし給ふらむ、猶ほかへこそ渡し奉るべかりけれ、さすがに目の前にて殊に口惜しき事など歎きつくす、かくなり給へりともてはなれたる氣色を見聞き給はむがいみじういとほしうもあるべきかなど、つゆまどろまずおぼし明して、さすがにいと覺束なかりければ、又いとく渡り給ひて、少將の乳母召してこまかに問ひ給ふ。「御氣色のいと哀なれば、ありのまゝに宰相の君召



し出で、御せうそこ聞え給へりしかば、申しに入り侍りしに、やがて入らせ給ひて明くるま  
で物聞えさせ給ひつる御氣色など淺くも聞えざりつ。今こそ出でさせ給ふめれ」と語り聞え  
さするに、うち笑みて、親の御心のやみはあやまりて、後の世の罪などもおぼしやられず、か  
くあがらも淺からぬ御氣色にてだにあらばとおぼして、「はけつきもてなして、けさうちか  
けめひさき、ねふつしいりて、な見え奉り給ひそと教へ聞えよ」などのたまひて、「いであな  
こ、ろう、よろづ思はずなりける御ありさまかな」とて涙ぐみ給ひぬ。めづらしがり聞えて、  
よろづの人まゐりつどひていとさわがしきにもまぎれず、こなたに入り給ひて、姫君あそば  
しをこつり聞え給ひてあはれに淺からぬわすれがたみの御有様にもおとらず、悲しうらう  
たしと思ひ聞えさせ給ひつ、かき抱き奉り給ひて、みづあさみになりためる世の中に、我  
しもつゝむべきかはとて、中の障子をとほりてゆくりなく入りおはしましたるに、人々もあ  
されぬ。晝はさりとともうちとけ給へるに、姫君いはむかたなうあさましうおぼされて、ま  
ぎらはさむかたもなければ唯うちそばみて居給へるを、見聞え給へば、花のはひにも立ち  
まさりてあざやかに氣高うあいきやうづき給へりし人の髪は、ぬたけにあらむかし。ゆらゆ  
らとそぎかけられて、いつへの扇などをひろげたらむ心地して、猶いとたをたをとあくま  
であてになまめきてひたひ髪の花やかにかゝれるに、はづれたるつらつきかたはらめ、かく  
てしもさまことに美しくしげなる事まさりけるにこそと見えて、くれなるに匂ひわたりて、わ  
りなう苦しげに思し亂れたる色あひなどあたりは匂へる心ちして、にび色かう染などあま

た重ねてうちやつれ給へる、いろいろにまやうぞきたらむよりもなまめかしきさまかはり、  
はけつきたふとげになりて、け近く見むはけうとくうたてあらむと思ひしを、なかなかいみ  
じう見所ありてめでたかるべきわざにこそありけれと見え給ふに、あはれこれを親の御心  
には后になして見ても猶わかずこそおぼすべけれ、この世にはいたづらなるやうにしなし  
ておぼすらむほど、我をいかばかり妬しと思さるらむと、うへの御心にはいかりて、念じ給  
へるにこそはと、あはれに世を経とも罪さるべき方なく、あたらしういみじうもあるべきか  
など、かつみるみるもあくがれて、せきやるかたなう泣き給ふに、いとはしたなうわりなき  
を、さまよう心にくうもてなし給ふほど、かうやうけんの後のことば、なべてこの世のもの  
ならざりし御有様を、知らぬ世のかはれる事のみ多かりし程にしも珍しういみじう見つけ  
聞え給へりし御心まよひに更に劣らず、この世には又かけてもこの御有様に勝る人あらじ  
かしと、類ひなういみじう見え給ふにも、やる方もなう口惜しければ、さばれかし、うちうち  
の心清う濁らざらむさまは、わりなき心をまづむる程もほとけおのづから見給はずらむ、世  
の人のともかくもとりなし言はむ事は、いたく苦しかるべき事にもあらず、この人を心のと  
まりに朝夕見てこそ又大將の恨も少し解けめ、ひさうつり今一かた俄に式部卿の宮を聲と  
り給ひけむほど、よろづかはりけむ程などを、少將のめのも、いかばかりかはあさましう  
珍らかなりけむとおぼしやるにいみじういとほしければ、召し出で、「今は身のをこたり  
を聞えてもかひなし。うへばかりおはします中將もあまりにこのあつかひに、さとがちにこ



そあらめ。そこに何事も今よりおぼしはぐ、め。よろづ頼み聞えてあるべきぞ」と、なつかしうのたまふさまのめでたきによりづ慰みて、世づかぬ御有様なればはかさまにやおぼしならむと思ふも苦しう口惜しかりつるに、嬉しさ限なかりけり。うちより頻に召しあれば参り給ふ御有様おろかならず。めでたき御装束のにはひを整へて珍しう立ち出でたまふ。目輝くばかりなり。世にまらぬ御にはひ、百ぶんのほかも薫るばかりにて、日ごろも降り積る雪今もうちそゝぎわたすに、いと光を添へたる御有様に、ゆきゝの道の人々も珍しう見奉る。陣歩み入り給ふより、何の深き心もなげなるものども、女官どものつかさなどさへ、涙落して見奉り驚く。まいて御方々の細殿の内にこぼれ出で、苦しきまで見送るを、しりめにかけつゝ過ぎ給ひぬるも口惜しう妬げなり。御前に召しありて参り給へるに、年頃隔で、御覽するはあさましうこの世のものならず、御目も驚きて、とばかり物も仰せられで涙落させ給へる御氣色かたじけなきに、我もえ心強からず。かの國にありけむ事どもなど委しく問はせ給ふに、御前をとみに立ち出づべうもあらず。暮れぬるに雪も猶降りまさりつゝ、月いとおもしろう澄みのばりたり。遊などもすさまじうおぼえて、殊に物の音なども聞かでない過ぐしつるにとて、御遊始まる。中納言はこの夜の事ども珍しうおぼされて、見し夜の春に似たりしほどなど、事につけつゝいみじうおぼさるれば、心すまして掻き立て給へるまやらの琴の音、おもしろうわはれなる事限なし。例の事なれば、涙とゝむる人なかりけり。珍しげなき事あれど、えぞ書き續けざりけるぞ。御ぞ賜はり給ふ、常の事なりかし。

「別れては雲の月もくもりつゝ、かばかり澄めるかげも見ざりき」と仰事あるに、いとなべてならぬ事なればかたじけなうおぼす。

「ふるさとのかたみぞかした天の原ふりさけ月を見しぞかなしき」と奏し給ひて、おり給ふまゝに舞踏し給ふ。夜更けぬれば、中宮の御方へ参り給へり。必ずさやあらむと用意したるさへ心にくき人々をまた、そらたきもの心ことににはひ満ちつゝ、まち聞えけるかひありて、言ひしらす薫り満ちて参り給へり。いと珍しきを宮もいと忍びて立ち出でつゝ、御覽するにやと心時めさせらるゝにも、かうやうけんのみすの前ふとおもひ出でられて、物遠き心地するにも、さもさすがに事變りて歸らむとせしほど、なつかしう物などのたまひし御けはひのめでたさは、身にしみておはれに悲しと思ひ出でらるゝにも、物などいふも心はそらにて、ひがごとせられぬべくぞおぼさるゝ。みすの内にも心かくるにや。

「おもひだによりましものか紫の雲のかゝらぬならひなりせば」と心の中に思ふも、めざましうおほけなきことなりかし。いたく用意して、みすの内にもはかなき事ども聞ゆる中に、

「西へゆく月のひかりを見てもまづ思ひやりきとしらすやありけむ」といふ人あり。

「たれなればかたぶくさ夜の月見てもありやなしやと思ひ出でけむ」。うちたどり思ひ出でけむほどのけしき、中に身にしむばかり思ふ人多かるにも、かたへは珍しきにやあらむ、紫の雲のよそへに物わはれなる氣色を見て言ひすごしも、しつゝおぼえければ、あかぬは